第２回
満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集
2020 年度活動報告集

2021 年 1 月

満洲の歴史を語り継ぐ高知の会編

刊行に寄せて

「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」（以下「語り継ぐ会」）は、高知県内の旧満洲（中国東北部）帰国者、大学教員、マスコミ関係者らが、体験者が次々と逝去し歴史の継承が難しくなる現状を危惧して 2018 年 9 月に結成されました。以前高知にあった「満州会」などの体験者の懇談会という形でなく、次の世代に歴史を語り継ぐ組織です。高知県から満洲へ渡った人の実数は正確に分かりませんが、「満洲開拓団」「満蒙開拓青少年義勇軍」で渡満した人数は 1 万人を超え、人数では全国 10 位ながら、人口比では全国 4 位の 1.4%となっています。戦前の高知県民にとって満洲は、多くの県民が移民した非常に身近な地域だったことが分かります。

語り継ぐ会では活動として 2019 年 7 月 13 日、高知大学人文社会科学系プロジェクト「地域における平和学研究」と連携してシンポジウム「第 1 回満洲の歴史を語り継ぐ集い」を高知市で開催しました。この集いには、大学生、教職員ら 70 人が参加し、さまざまな視点から高知県に関わる満洲の歴史を学ぶ機会となりました（内容は『第 1 回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集』として 2020 年 3 月に刊行）。

2020 年度もシンポジウム「第 2 回満洲の歴史を語り継ぐ集い」を 2020 年 9 月 6 日に開催予定でしたが、台風接近のために開催が中止となりました。この集いには、名古屋大学名誉教授の川田稔先生や国文学研究資料館の加藤聖文先生をお招きして満洲国建国の歴史や語り部事業についてお話しいただく予定でした。コロナウイルスの感染拡大で再開催の見込みも立たない中、実施内容を活字で残して置くことが重要と考え、『第 2 回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集・2020 年度事業報告』として刊行することになりました。

「第 1 部　満洲国の建国に迫る」では、川田先生が基調講演される予定だった「陸軍内部から見た満洲事変と満洲国の建国」を寄稿いただきました。加藤先生には満洲国の建国から崩壊までの歴史を「日本と満洲の歴史」としてまとめていただきました。また、愛媛大学「資料学」研究会発行の『資料学の方法を探る』18 号掲載の高知大学教授の小幡尚先生の論文「高知の戦争史料」を再掲載させていただきました。満洲国建国前の関東局警察に関わる県内史料や高知の戦争史料の状況が紹介されています。

「第 2 部　満洲の歴史を語り継ぐ」は、満洲の歴史の継承の重要性を改めて考える内容となっています。語り継ぎをテーマに加藤先生、中国残留邦人を祖母に持つ語り部の山崎哲さん、語り継ぐ会の発起人の一人・始めた崎山ひろみさんに寄稿いただきました。また、崎山さんらが続けてきた「満洲聞き取りの会」の聞き取り記録をテープ起こしして資料化しました。「第 3 部　2020 年度活動報告」は学習会などの活動報告、補論では「満州建設勤労奉仕隊徳島県隊「アルバム」について」と題して高知県立歴史民俗資料館学芸員の石畑匡基さんに寄稿いただきました。記録集は、多くの方々に寄稿いただき、満洲の歴史を学び、語り継ぐテキストとなる内容に仕上がっています。今後様々な形でご活用いただけましたら幸いです。

満洲の歴史を語り継ぐ高知の会・会長
大野正夫

目次

刊行に寄せて（大野正夫）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第１部　満洲国の建国に迫る

陸軍内部から見た満洲事変と満洲国の建国（川田稔）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

日本と満洲の歴史（加藤聖文）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

高知の戦争史料（小幡尚）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

第２部　満洲の歴史を語り継ぐ

“残留邦人”の歴史はなぜ語り継がなければならないのか？（加藤聖文）・・・・・・・・・・31

祖母の命を語り継ぐ（山崎哲）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

語り継ぐ活動への思い（崎山ひろみ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

満洲聞き取りの会の記録「満洲で看護婦として生きた（高橋猪利）」（楠瀬慶太）・・・・・・37

第３部　2020 年度活動報告

太平洋戦争後の満洲の悲劇―著書：大地の伝言―を教材として（大野正夫）・・・・・・・・57

第１回学習会記録（大野正夫）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59

第一次大戦時の日本におけるドイツ兵俘虜のことなど（瀬戸武彦）・・・・・・・・・・・・60

満洲聞き取り記録の１次整理について（楠瀬慶太）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68

2020 年度事業関連資料（チラシ等）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69

補論　満州建設勤労奉仕隊徳島県隊「アルバム」について（石畑匡基）・・・・・・・・・・72

第１部　満洲国の建国に迫る

陸軍内部から見た満洲事変と満洲国の建国

川田稔（名古屋大学名誉教授）

１、柳条湖事件前後

満州事変は、1931 年（昭和 6 年）9 月、関東軍による鉄道爆破（柳条湖事件）から始まった。関東軍は、当時中国東北地方「満州」に駐留していた日本軍で、日本が経営する南満州鉄道およびその沿線を守備することを主な任務としていた。

関東軍の石原莞爾作戦参謀、板垣征四郎高級参謀らは、9 月 18 日夜、奉天（現瀋陽）近郊で南満州鉄道を爆破。これを中国軍による攻撃として直ちに関東軍を出動させ、翌日のうちに南満州の主要都市を占領した。石原、板垣らによる謀略だった。

彼らは、かねてから全満州の軍事占領を計画しており、それを実行に移したのである。　東京の陸軍中央では、永田鉄山軍事課長、岡村寧次補任課長、東条英機編制動員課長、渡久雄欧米課長などが、石原らと連携し、関東軍の活動を支援する方向で動きはじめる。彼らは、陸軍中央の中堅幕僚グループ「一夕会」に属していた。一夕会は、会員 40 名前後で、小畑敏四郎、山下奉文、鈴木貞一、武藤章、田中新一など、後に陸軍を動かすようになる幕僚たちが加わっていた。石原・板垣も一夕会メンバーだった。

当時の政府（若槻礼次郎民政党内閣）のみならず、南次郎陸相・金谷範三参謀総長ら陸軍首脳も、当初、事態不拡大の方針だった。だが一夕会系中堅幕僚グループは、それに抗して関東軍の行動を支持していたのである。

一般には、満州事変は、関東軍に陸軍中央や内閣が一方的に引きずられたと思われがちだが、実は、関東軍と陸軍中央の一夕会系幕僚の連繋によるものだった。

一夕会は、1929 年（昭和 4 年）に結成され、その中心人物は永田鉄山だった。

永田鉄山は、陸軍大学校卒業後、第一次世界大戦をはさんで断続的に合計約 6 年間、軍事調査などのためヨーロッパとりわけドイツ周辺に駐在した。そしてその後、陸軍中央の少壮・中堅幕僚グループである、二葉会、木曜会、一夕会などの中心的存在となった。また、陸軍省整備局初代動員課長に就任し、満州事変期には、軍務局軍事課長に就いていた。軍事課長は、陸軍実務における最も枢要なポストだった。その後も、参謀本部情報部長、陸軍省軍務局長として陸軍中枢の要職にあり、満州事変以降の陸軍を主導する存在となる。ことに陸軍省軍務局長は、陸軍実務ポストのトップで、永田は、事実上全陸軍に強い影響力をもつこととなった。だが、陸軍内部での皇道派と統制派の派閥抗争のなか、1935 年（昭和 10 年）8 月、軍務局長在任中に執務室で刺殺される。二・二六事件は翌年、日中戦争突入はその翌年である。

永田が関わった中堅幕僚グループの二葉会は、大正末頃から続けられていた非公式な集まりをもとに、1927 年（昭和 2 年）頃に名付けられたものである。会員は陸軍士官学校（陸士）16 期の永田鉄山、小畑敏四郎、岡村寧次を中心に、陸士 15 期から 18 期にわたる。永田らの他に、東条英機、板垣征四郎、土肥原賢二、山下奉文など陸軍中央の中堅幕僚 20 人程度が参加していた。

永田、小畑、岡村は、当時陸軍の実権を掌握していた長州閥の打破と、国家総動員に向けて

の軍制改革を実現しようとしており（1921 年、バーデン・バーデンの会合）、二葉会はその意図を継承していた。

木曜会は、この二葉会にならって、陸軍中央の少壮幕僚らによって、1927 年（昭和 2 年）11 月頃に組織されたもので、構成員は 18 人前後であった。メンバーは、鈴木貞一、石原莞爾、根本博、土橋勇逸ら陸士 21 期から二四期が中心だが、16 期の永田鉄山、岡村寧次、17 期の東条英機も会員となっていた。

この木曜会は、1928 年（昭和 3 年）3 月に開かれた第 5 回の会合で、「帝国自存のため、満蒙に完全な政治的権力を確立するを要す」との注目すべき決定をしている。張作霖爆殺事件の約 3 ヶ月前である。

このように、「満蒙に完全な政治的権力を確立する」こと、すなわち満蒙「領有」方針が申し合わされたのである。この決定は同年 12 月 6 日の第 8 回会合で木曜会の「結論」とされた。ここに満蒙領有方針が、陸軍中央内で初めて本格的に提起されたのである。

（四つの対中国政策。①満蒙特殊地域論＝田中義一政友会内閣②国民政府全土統一容認論＝浜口雄幸民政党内閣③満蒙分離論＝関東軍④満蒙領有論）。

一般に、満州事変は、世界恐慌下（1930 年代初頭）の国内の窮状を打開するため、石原莞爾ら関東軍によって計画・実行されたものと見方が多い。だが、じつは 1929 年末の世界恐慌開始より 1 年半前に、陸軍中央の幕僚のなかで、満州事変に繋がっていく満蒙領有方針が、すでに打ち出されていたのである。

したがって、満州事変は、その企図の核心部分においては、世界恐慌とはまた別の要因によるものだったといえよう。世界恐慌は、満州事変を計画した石原（木曜会員。石原による満州事変計画立案＝満蒙領有案も世界恐慌前）らにとって、かねてからの方針の実行着手に、絶好の機会を与えるものだったのである。

また、木曜会では、永田らの主導で、旧来のような統帥権の独立によっては国家を動かすことはできず、陸軍が積極的に政治に影響力を行使すべきだとの考えが共有された。つまり、陸軍が組織として、陸相を通じて内閣に影響力を行使し、軍の考える方向に国家を動かしていくことを志向していたのである。

さて、この木曜会と二葉会が合流して、1929 年（昭和 4 年）5 月、一夕会が結成される。田中義一政友会内閣の末期、浜口雄幸民政党内閣成立の約 1 ヶ月半前である。

構成員は 40 名前後で、陸士 14 期から 25 期にわたり、木曜会・二葉会会員に加え、武藤章、田中新一などの少壮幕僚もメンバーとなっていた。

主要な一夕会メンバーは、永田鉄山、小畑敏四郎、岡村寧次、東条英機、板垣征四郎、土肥原賢二、山下奉文、鈴木貞一、石原莞爾、牟田口廉也、武藤章、田中新一などで、いずれも、こののち昭和陸軍で名を知られるようになる（すべて陸大卒）。

この一夕会に、さきの木曜会の満州領有方針などが持ち込まれたのである。

一夕会は、第 1 回会合で、陸軍人事の刷新、満州問題の武力解決、荒木貞夫・真崎甚三郎・林銑十郎の非長州系 3 将官の擁立を取り決め、まず陸軍中央の重要ポスト掌握にむけて組織的に動いていく。これらは、永田鉄山、小畑敏四郎、岡村寧次が主導し、永田がその中心的存在

であった。ちなみに、当時、田中内閣、浜口内閣の陸相には、ともに長州閥の流れをくむ白川義則（愛媛出身）、宇垣一成（岡山出身）が就いていた。ことに宇垣は、政党政治期憲政会・民政党系四代の内閣の陸相を務め、陸軍内で強い影響力をもつようになっていた。

同年（1929 年）8 月、岡村が陸軍省人事局補任課長のポストを得る。補任課長は全陸軍の佐官級以下の人事にたいして大きな権限をもっていた。この岡村補任課長を通して、一夕会のポスト掌握が進行する。翌年 8 月、永田が陸軍省軍務局軍事課長に就任。軍事課長は、軍政部門のみならず全陸軍における最も重要な実務ポストであった。

さらに、翌年の満州事変直前、1931 年（昭和 6 年）8 月までには、そのほか一夕会員から、陸軍省では、徴募課長に松村正員、馬政課長に飯田貞固、軍事課高級課員に村上敬作、軍事課支那班長に鈴木貞一など。参謀本部では、動員課長に東条英機、欧米課長に渡久雄、作戦課兵站班長に武藤章、支那課支那班長に根本博などが就いている。

陸軍省・参謀本部における主要部局の、実務担当者である課長もしくは班長を掌握したのである。なお、1928 年（昭和 3 年）10 月に、石原莞爾が関東軍作戦主任参謀として、翌年 5 月には、板垣征四郎が関東軍高級参謀として満州に赴任していた。また、満州事変 1 ヶ月前の 8 月、一夕会が擁立しようとしていた将官の一人荒木貞夫が、中央要職の教育総監部本部長に就任する。

このように満州事変直前には、陸軍中央および関東軍の主要ポストを、一夕会員が占めることとなった。そして、1931 年（昭和 6 年）9 月、関東軍の石原、板垣らの謀略（鉄道爆破）によって満州事変が起こる。陸軍中央では、陸軍省の永田鉄山軍事課長、岡村寧次補任課長、参謀本部の東条英機編制動員課長、渡久雄欧米課長、（いずれも一夕会員）などが、石原らと連携し、「関東軍の活動を有利に展開させる」（『岡村寧次日記』）方向で動きはじめる。この時、鈴木貞一軍事課支那班長、武藤章作戦課兵站班長ら陸軍中央に配置された一夕会員も、同様の動きをしている。

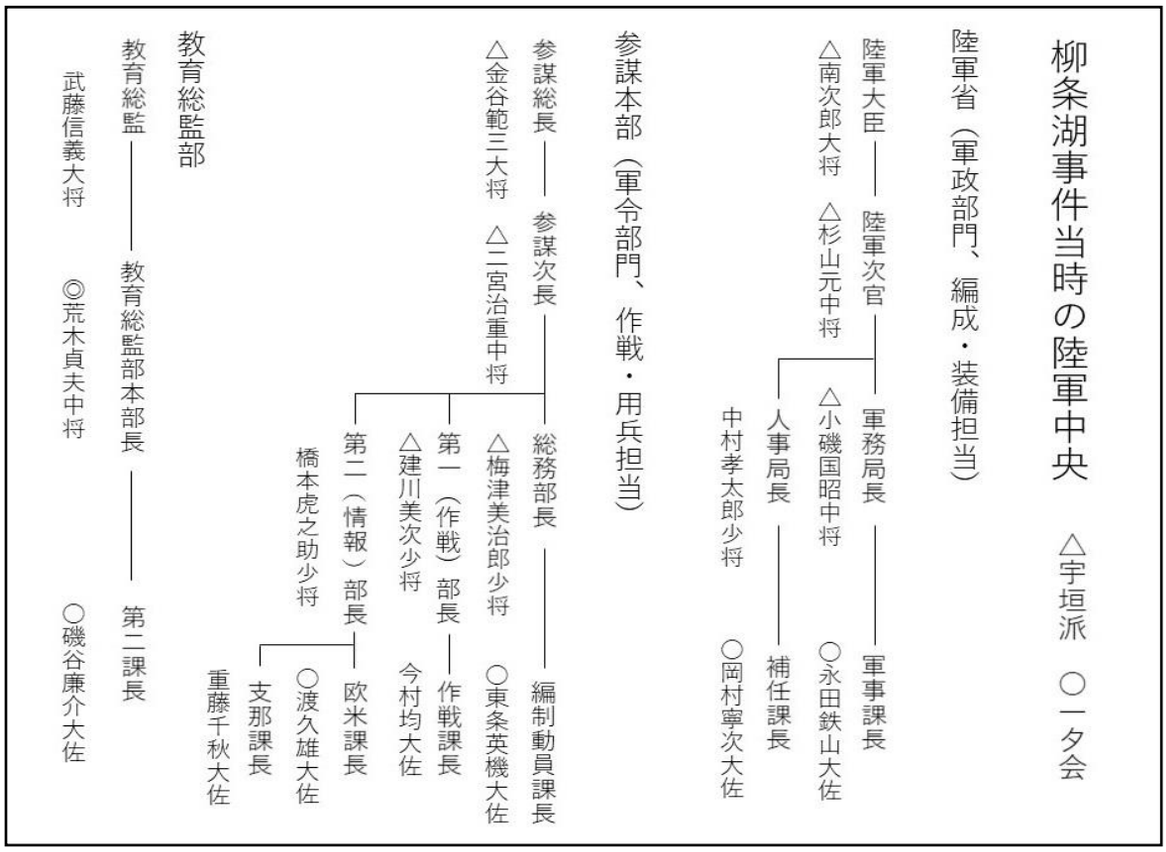
一般に、満州事変は関東軍の独断によるものと見られているが、実際には、関東軍の石原・板垣および彼らと連携する一夕会系中央幕僚によって計画・実行されたのである。

２、永田鉄山の構想

永田鉄山は、早くから次期世界大戦は不可避であり、日本もそれに何らかのかたちで巻き込まれると判断していた。そしてこう考えていた。

国家総力戦になると想定される次期大戦に対処するためは、国家総動員の準備と計画が必須である。それには国家総力戦を支える経済力の強化とともに、資源の自給自足が不可欠だ。だが日本には自給自足のための資源が不足しており、不足資源は近隣の中国に求めざるをえない。また必要な軍需資源は中国（とりわけ満州・華北・華中）のそれをふくめればほぼ自給しうる。そして現に日本の勢力圏となっている満蒙を完全に掌握することは、中国資源確保への橋頭堡となる重要な意味をもっている、と。

ちなみに、1920 年代陸軍を統括していた宇垣一成は、長期の総力戦への対処として軍の機械化と国家総動員の必要を主張しており、その点では永田と同様であった（宇垣は、加藤［高明］



護憲三派・憲政会単独両内閣、若槻憲政会内閣、浜口民政党内閣の陸相)。だが、基本戦略としてワシントン体制を前提に米英との衝突はあくまでも避けるべきとの観点に立っていた。したがって、おもに対ソ戦を念頭に、中国本土を含まないかたちでの、日本・朝鮮・満蒙・東部シベリアによる自給自足圏の形成を考えていた。それは、資源上からも厳密な意味での自給自足体制たりえず、不足軍需物資は米英などからの輸入による方向を想定していた。

だが、永田からみれば、それでは次期大戦にさいして、国防上「独自の立場」すなわち自律的な立場を維持することができないことになる。軍需資源を米英からの輸入することを前提にしていれば、それに制約され、提携関係も選択の余地なく米英側とならざるをえない。そのように提携関係においてあらかじめ選択を限定されれば、「国防自主権」、国防上の方針決定のフリー・ハンドを確保することができない。いわば国防的観点からみて国策決定の自主独立性が失われる。この点が、宇垣に永田がもっとも距離を感じ、反発していたところだった。もちろん、このことは米英との提携をアプリオリに拒否するものではなく、あくまでも敵対・提携関係のフリーハンドを確保しておこうとの意図からであった。このような観点は、武藤章ら統制派系幕僚にも受け継がれる。

宇垣の対米英協調のスタンスと異なり、永田の場合は、ソ連のみならず米英などとの対立の可能性も考慮に入れ、中国北中部をふくめた自給圏形成を構想していたのである。なお、宇垣は、次期大戦の可能性を考慮して、それに備えておくべきだとの姿勢であったが、永田のように次期大戦を不可避だとは必ずしも考えていなかった。

以上のように永田は、次期大戦は不可避だとみており、そのための国家総動員の準備計画の

必要性を主張していた。したがって、戦争の現実的可能性が切迫してくれば、国家総動員の観点から各種軍需資源の自給体制が求められることとなる。だが永田のみるところ、帝国の版図内における国防資源は極めて貧弱であり、「重要国防資源の自給を許さぬ悲しむべき境涯」にあり、したがって自国領の近辺において必要な資源を確保しておかなければならない、との判断をもっていた。

この不足資源の供給先として、永田においては、満蒙をふくむ中国大陸の資源が念頭におかれていた。永田は、主要な軍需不足資源のうち、特に「支那資源に関係深きもの」についての検討をおこなっている。そこでは、品目として、鉄鉱石、鉄、鋼、鉛、錫、亜鉛、アルミニウム、マグネシウム、石炭、石油など 17 品目の重要な軍需生産原料をとりあげられている。そして、それぞれについて、軍事用の用途、帝国内での生産の概況、「満蒙」「北支那」「中支那」の各地域で利用しうる概算量、それぞれの資源の需給にかんする「観察」が記されている。ちなみに、この 17 品目は重要な軍需資源をほとんど網羅するものであった。

すなわち、永田にとって、中国問題は基本的には国防資源確保の観点から考えられ、満蒙および華北・華中が、その供給先として重視されていた。とりわけ満蒙は、現実に日本の勢力圏として、その特殊権益が集積し、多くの重要資源の供給地であるばかりでなく、華北・華中への橋頭堡として、枢要な位置を占めるものであった。このような満蒙の位置づけが、木曜会の満蒙領有論の背後にある観点だった。

では、これらの中国資源確保の方法として、どのような具体的な方策が考えられていたのだろうか。もし日中関係が安定しており、何らかの提携・同盟関係にあれば、戦時下においても必要な資源の供給を受けることは不可能ではなかった。だが、永田は当時の中国国民政府の「革命外交」と排日姿勢のもとでは、実際上それは困難だと判断していた。したがって、この点について永田は、平時において、種々の方法で可能なかぎり確保できるような方策を立てておくべきだが、やむをえなければ、中国資源を「無理」にも「自分［日本］のものにする」方法をとらねばならないと考えていた。すなわち、場合によっては、軍事的手段など一定の強制力による中国資源の確保、満蒙・華北・華中をふくめた自給圏の形成が想定されていた。したがって、「国防線」の総延長は、「固有の領土ないし［現在の］政治上の勢力範囲」よりも「長大」なものとなるとみていた。つまり現在の植民地や勢力圏より広い範囲、すなわち朝鮮や満蒙のみならず、華北・華中などを含めたものが日本の防衛圏となるというのである。

このような、不可避的と考えられる次期大戦にむけての「国家総動員」の準備と計画の整備。そのための工業生産力の増強と、そこで不足する資源の中国大陸からの調達。これが、永田鉄山の構想の骨格であった。

さて、満州事変後の発言になるが、事変について永田は、「非道きわまる排日侮日」のなか、「暴戻なる遼寧軍閥（張学良）の挑発」にたいし、余儀なく「破邪顕正の利刃」をふるったものだ、と主張している。さらに「民族の生存権を確保し福利均分の主張を貫徹するに、何のはばか憚る所があらうぞ」、とも述べている。

永田のみるところ、日露戦争にとって確立した満蒙権益は、欧米諸国の圧迫干渉をうけ、ことに原敬内閣による新四国借款団加入以来、権益の削弱を余儀なくされた。さらに、ワシント

ン会議、ロンドン軍縮会議などの圧迫によって、国防力は相対的に低下した。そのことが、中国を「増長」させ、国民政府の「革命外交」の進展にともない、「排日侮日の行為」を激化させることとなった。したがって満州国に対する中国側の反抗は今後「いよいよ熾烈となるであろう」、というのである。

すなわち、満蒙権益は日本の「生存権」とかかわるものであり、国民政府の「革命外交」における排日侮日の態度からして、今後中国側の反抗はさらに激しいものとなるだろう。だが、それには生存権確保の観点から断固対処する。それが永田の姿勢であったといえよう。しかも、中国の反日姿勢の要因として、ワシントン体制による対日圧迫があるとみていたのである。永田は、その後も繰り返し同様な認識を示しており、ことに中国革命外交の背景にはアメリカの中国への利害関心、ことにその海軍力があると考えていた。つまり、米英協調によるワシントン体制には批判的なスタンスだったのである。

永田のみるところ、中国国民革命は、排日侮日を引き起こし、張学良下の奉天軍閥の反日姿勢とともに、自給資源確保にとって橋頭堡的な意味をもつ満蒙の既得権益を危くするものであった。そのことからまた、戦時のさいの軍需資源全体の自給見通しの確保についても、通常の外交交渉による方法では極めて困難な状況に追い込まれつつあると判断していた。

ここからは中国大陸からの資源確保の具体的方策の方向性は、おのずと示されているといえよう。それが、永田にとっての満州事変であり、その後の華北分離工作（華北地域の勢力圏化）であった。

このような方向は、原や浜口ら政党政治の中国政策とはもちろん、宇垣のそれとも異なるものであり、ワシントン体制とりわけ中国の領土保全と門戸解放を定めた九カ国条約と、厳しい緊張を引き起こす可能性をもつものであった。

先にふれた、木曜会の満蒙領有方針は、この永田の構想から強い影響を受けていた。

満州事変の関東軍側首謀者石原莞爾も、満蒙領有、中国本土資源確保による自給体制の構築という明確なプランをもっていたが、このような永田構想の影響下にあった。

なお、永田の政党政治への批判、それに協力的な宇垣への主要な批判は、右に述べたような意味で、その国防上の米英協調路線にあったといえる。

また、国内政治体制の問題についても、永田は、政党政治の方向に対抗して、「純正公明にして力を有する軍部」が国家総動員論の観点から政治に積極的に介入すること、すなわち軍部主導の政治運営を主張している。永田はいう。「近代的国防の目的」を達成するには、挙国一致が必要であり、それには政治経済社会における幾多の欠陥を「せんじょ芟除」しなければならない。だが、そのためには「非常の処置」を必要とし、それは従来の政治家のみにゆだねても不可能である。したがって、「純正公明にして力を有する軍部」が適当な方法によって「為政者を督励する」ことが現下不可欠の要事である、と。

３、満州事変の経過

一夕会は、このような永田の構想に強い影響を受けていた。その主要メンバーでは、満蒙の完全掌握のため、満蒙領有が秘かに検討されていた。来るべき国家総力戦にむけ、不足する資

源を中国から確保するため、その足がかりとして満蒙の政治的支配権を獲得しようとするものだった。関東軍の石原らも満蒙領有を考えていた（石原は日米世界最終戦争論という独特の考えをもっていたが、大きくは永田の構想の影響下にあった）。

そのために一夕会は、陸軍人事の刷新、満蒙問題の武力解決などを取り決め、それによって国家総動員に向けての軍政改革などを実現しようとしていた。

陸軍人事の刷新とは、当時宇垣派が実権を掌握していた陸軍を改革するため、一夕会が事実上陸軍中央の人事を掌握し、陸軍を動かすことを意味した。そのため荒木貞夫・真崎甚三郎、林銑十郎ら反宇垣派将官を擁立しようとしていた。なお宇垣派とは、1920 年代政党政治期に長く陸軍大臣を務めた宇垣一成を中心とするグループで、この頃の陸軍主流派を構成していた。南陸相・金谷参謀総長も宇垣派だった。

このような方針から一夕会は、まず陸軍中央の実務ポストを掌握する工作に着手する。その結果、課長以下の実務ポストの人事を掌握する陸軍省補任課長に一夕会員を送り込むことに成功。満州事変直前の 1931 年（昭和 6 年）8 月には、多くの会員が重要実務ポスト（各課の課長もしくは班長）に就いていた。こうして、石原らによる満州での武力行使を、陸軍中央でサポートする態勢が、すでに作られていたのである。

事変発生当初、若槻内閣は、国際的平和協調の外交方針から、事態を拡大しないよう陸軍首脳（南陸相・金谷参謀総長）に要請した。国際的平和協調とは、具体的内容には、当時の東アジアの国際秩序（ワシントン体制）を尊重することだった。

南・金谷ら宇垣派は、もともと内閣の意向を尊重する姿勢であり、その要請に従い関東軍に事態不拡大を指示した。

ただ、宇垣派陸軍中央首脳部（局長・部長以上）も、当時の日中間の緊張関係のなかで、満蒙の既得権益を守るためには、ある程度の武力行使はやむをえないと考えていた。

したがって、事変直後、朝鮮軍（朝鮮に駐留する日本軍）が、関東軍の要請により独断で満州に部隊を派遣したさいには、事後的にそれを承認した。関東軍の動きを支援する一夕会系幕僚の強い働きかけを受けたからである。

関東軍が朝鮮軍に出兵を要請したのは、南満州占領のためには関東軍だけでは兵力が不足するためだった。関東軍は事変開始翌日には南満州の主要都市を占領した。

若槻内閣は朝鮮軍の独断越境に驚いたが、容認姿勢となった宇垣派陸軍首脳との信頼関係の継続を重視し、結局それを認めた。明治憲法下では内閣は軍に対する指揮命令権をもたず、関東軍をコントロールするには、宇垣派陸軍首脳との連繋が不可欠だと考えていたからである。またその後、関東軍は、現地の中華民国地方政府（張学良政府）を否定して、独立新政権樹立の動きを示した。それを永田ら一夕会系幕僚が支持すると、彼らの強い圧力を受けた陸軍首脳はそれも容認した。当初新政権樹立に反対していた若槻内閣も、朝鮮軍の無断越境時と同様、結局陸軍首脳の判断を容認した。

ただ、この時の独立新政権は、後の満州国とは異なり、中国の主権を前提とした自治的な独立政権だった。したがって若槻内閣は、独立新政権が、ワシントン体制（中国の領土保全を定めた九ヵ国条約を含む）が許容しうるギリギリのラインだと考えていた。

このころ宇垣派陸軍中央首脳部も、武力行使が始まった以上、一時的な南満州占領、親日的独立自治政権の樹立（中国主権を前提）までは、やむをえないと判断していた。

だが、若槻内閣や宇垣派陸軍首脳（南陸相・金谷参謀総長）が、関東軍や永田ら一夕会系中堅幕僚に引きずられたのはここまでだった。11 月に入って、関東軍は北部満州（北満）の黒竜江省都チチハルへの進撃を企図した。だが、ソ連との衝突を危惧する軍中央首脳部は、これを阻止すべく、臨時参謀総長委任命令（臨参委命）を発動した。

本来、出先の軍司令官は天皇に直属しており、参謀総長といえども関東軍司令官を直接指揮命令することはできなかった。臨参委命とは、参謀総長が出先の軍司令官を直接指揮命令できる権限を天皇から委任されたもので、これにより関東軍司令官は参謀総長の指揮下に入った。これは、関東軍ら出先機関への陸軍中央の統制力を強化するための処置だった。北満は旧ロシアの勢力圏で、なお中東鉄道などソ連の権益が存続していた。若槻内閣も、国際的な考慮から、関東軍の動きを止めるよう南陸相や金谷参謀総長に強く求めた。南陸相・金谷参謀長は、この臨参委命によって関東軍のチチハル占領を阻止した。関東軍は、中国側の馬占山軍との戦闘経過のなかで一時チチハルに侵入するが、陸軍中央からの命令によってすくに撤退を余儀なくされる。また陸軍中央は、同様に関東軍の北満ハルビン出兵要請も認めなかった。

だが関東軍はチチハル占領断念後、方向転換し、さらに張学良政権のある錦州に進撃しようとした。陸軍中央は、この関東軍の動きも臨参委命によって押しとどめた。錦州はイギリス権益の関与する北京・奉天間鉄道（京奉線）の沿線に位置した。

関東軍の錦州侵攻についても、若槻内閣は南や金谷に、その阻止を強く要請していた。

実はこの時、これまでとは違ったレベルでの、陸軍中央首脳部と一夕会系中堅幕僚層の意見の相違が表面化する。陸軍中央のなかで、南・金谷のみならず、杉山元陸軍次官や二宮波治重参謀次長、小磯国昭軍務局長、建川美次作戦部長も、チチハル・錦州占領には強く反対した。彼らはすべて宇垣派で、対ソ・対英考慮からだった。彼ら陸軍首脳部は、関東軍司令官以下主要幕僚の更迭も辞さずとの強い姿勢を示した。陸軍中央首脳部の断固たる姿勢に、関東軍はやむなくチチハル進撃、錦州攻撃を断念したのである。

だが、永田ら一夕会系中央幕僚たちは基本的に関東軍の動きを支持しており、当初から北満をふくめた全満州の事実上の支配を考えていた。また、張学良政権の覆滅は当然のことで、したがって錦州攻撃も容認さるべきとの姿勢だった。

南満軍事占領と新政権樹立までは、永田ら一夕会系中央幕僚たちは、建川・小磯ら宇垣派中央幕僚上層の一部を巻き込み、ついには南・金谷も動かし事態を推し進めてきた。だが、永田ら一夕会系中央幕僚も、北満チチハル占領や錦州侵攻の問題では、陸軍首脳部を動かせなかったのである。この時点で、関東軍や一夕会系中央幕僚は、動きが取れない状態となった。

また、石原ら関東軍は、前述のように独立新政権の樹立（中国主権下での）を主張していたが、その後、日本の実権掌握下での独立国家の建設（中国の主権を否定）を策するようになる。これは元来石原らが考えていた満蒙領有の一つのバリエーションだった（国際連盟規約、中国の領土保全・門戸開放に関する九ヵ国条約への一定の考慮）。したがって、関東軍は、陸軍中央から認められていた新政権樹立の工作を続けながら、独立国家（のちの満州国）建設の準備を

進めた。永田ら陸軍中央の一夕会メンバーも、関東軍の独立国家建設方針を容認していた。

だが、南・金谷ら陸軍中央首脳部は、関東軍の独立国家建設方針を認めず、この面でも関東軍や一夕会系中央幕僚は、それ以上事態を進めることが困難な状況となっていく。

一般には、陸軍中央や内閣は、関東軍にひきずられ、なすすべなく既成事実を認めさせられたと思われがちだが、彼らは一旦は関東軍を抑え込んだのである。

４、陸軍における権力転換――一夕会の権力掌握

だが、このようなクリティカルな局面で、1931 年（昭和 6 年）12 月 11 日、若槻内閣が突然閣内不統一によって総辞職する。若槻内閣と南陸相以下宇垣派首脳部によって抑え込まれていた、関東軍や一夕会系幕僚にとっては絶妙なタイミングであった。

同年 12 月 13 日、元老時西園寺らの奏薦によって犬養毅政友会内閣が成立。一夕会が擁立しようとした 3 将官の一人荒木貞夫教育総監部本部長が陸軍大臣となった。

これは永田ら一夕会が、政友会有力者の小川平吉や森恪などへの政治工作を通じて、犬養首相に強力に働きかけた結果であった。

この荒木の陸相就任は重要な政治的意味をもっていた。荒木は陸相に就任するや、皇族のかんいんみやことひと閑院宮載仁親王を参謀総長にすえるとともに、台湾軍司令官の真崎甚三郎を参謀次長におき、以後真崎が参謀本部の実権をにぎることとなる。真崎もまた一夕会が推す三将官の一人であった。荒木・真崎は、2 月には、軍務局長に山岡重厚を、作戦課長に小畑敏四郎を任命。4 月、永田が情報部長、山下奉文が軍事課長に就任。小畑が在任わずか 2 ヶ月で運輸通信部長に転じ、後任の作戦課長には鈴木率道がつく。彼等はすべて一夕会員だった。そして、南、金谷のみならず、宇垣派の杉山、二宮、建川、小磯らも中央から追われ、宇垣派は、すべて陸軍中央要職から排除された。

陸軍における権力転換がおこなわれ、一夕会系幕僚と彼らの推す荒木・真崎が陸軍の実権を掌握することとなったのである。

一方、荒木陸相就任直後、一夕会系幕僚主導で、「満蒙（北満を含む）」は、独立新政権下より「逐次帝国の保護的国家に誘導す」との陸軍「時局処理要綱案」が作成された。陸軍中央で公式に満蒙独立国家建設が具体的プログラムにのぼったのである。中国主権下での新政権樹立から独立国家建設へ、陸軍満蒙政策の大きな変化であった。

この陸軍「時局処理要綱案」の満蒙政策方針を基本に、陸軍省・海軍省・外務省関係課長による三省協定案が策定された（陸軍側は永田軍事課長）。そして、1932 年（昭和 7 年）3 月 12 日、犬養内閣は、「満蒙問題処理方針要綱」を閣議決定した。そこでは、三省協定案をもとに、「満蒙」は、独立政権の統治支配領域となっている現状に鑑み、「逐次一国家たるの実質を具有する様これを誘導す」とされた。独立国家建設方針が内閣の正式承認をえたのである。すでに 3 月 1 日、満州国建国宣言は、関東軍主導のもと前黒竜江省長張景恵を委員長とする東北行政委員会によって発せられていた。

さて、荒木陸相・真崎参謀次長下の陸軍中央は、本土・朝鮮より満州に兵力を増派。関東軍は、陸軍中央の承認のもとに錦州を攻撃・占領した。さらに関東軍は同様に北満の中心都市ハ

ルビンを攻撃・占領した。また、北満の要衝チチハルも長期占領の態勢となった。ここに日本軍は、南北満州の主要都市をほとんどその支配下におくこととなった。事変開始から 4 ヶ月半であった。

関東軍の軍事行動に対して、中国国民政府は国際連盟に提訴。連盟理事会は現地への調査団派遣を決定し、1932 年（昭和 7 年）2 月、リットン調査団が来日した。また、アメリカのスティムソン国務長官（フーバー共和党政権）は、1 月、満州に関して中国の領土保全や不戦条約に反するような事態は一切認めないとする、いわゆる不承認宣言（スティムソン・ドクトリン）を発表した。

その後、犬養政友会内閣は、独立国家建設の方向を基本的に容認していたが、国際社会への考慮から、満州国の正式承認には消極的であった。そのようななかで、五・一五事件がおこる。1932 年（昭和 7 年）5 月 5 日、三上卓・古賀清志ら海軍青年将校および陸軍士官候補生、愛郷塾生などが首相官邸、警視庁その他を襲撃、犬養毅首相を殺害した。

22 日、元朝鮮総督斎藤実（海軍大将・後備役）が元老西園寺らの奏薦をうけて首相に任命され組閣した。その後敗戦まで政党内閣は復活することなく、犬養内閣を最後に政党政治の時代は終わりをつげる。斎藤内閣の陸相には荒木が留任し、同じころ林銑十郎が教育総監となった。参謀本部は真崎次長が実権を掌握しており、一夕会が推す荒木・林・真崎が事実上陸軍のトップを占める状態となったのである。

この間、参謀本部情報部長(陸軍少将)となっていた永田は、原田熊雄・近衛文麿・木戸幸一ら西園寺側近グループと懇談し、次のように述べている。「現在の政党による政治は絶対に排斥するところにして、もし政党による単独内閣の組織せられむとするがごとき場合には、陸軍大臣に就任するものは恐らく無かるべく、結局、組閣難に陥るべし」（『木戸幸一日記』）。

政党政治への強い否定的姿勢と、陸相の進退によって内閣をコントロールすることが示唆されているのが注意をひく。

なお、一夕会の小畑敏四郎、鈴木貞一も、同様の意見を原田ら西園寺側近グループに伝えている。また荒木も直接西園寺に面談し、政党内閣に否定的な意見を述べている。

このようにして成立した斎藤実内閣は、9 月 15 日、日満議定書を調印し満州国を正式に承認した。

さて、1932 年（昭和 7 年）10 月、日本軍の行動および満州国は承認できないとする、国際連盟リットン報告書が公表された。その後、リットン報告書をもとにした対日勧告案が連盟総会で可決され、翌年二月日本は国際連盟を脱退する。また、同年（1933 年）5 月、日中間で塘沽(タンクー)タンクー塘沽停戦協定が締結され、満州事変は一応終結する。

その後、日本は紆余曲折を経ながらも、日中戦争、太平洋戦争、そして敗戦へと進んでいく。

【参考文献】

川田稔 2014『昭和陸軍全史・第一巻』、講談社
川田稔編 2017『永田鉄山の軍事戦略構想』講談社

日本と満洲の歴史

加藤聖文（国文学研究資料館准教授）

１、20 世紀が始まるまでの満洲

現在の日本人がイメージする満洲は、満洲国とほぼ同じでしょう。しかし、満洲国は人工的に創られた国家でしかなく、民族的にも地理的にも歴史的にも「満洲」ではありません。本来の満洲と呼ばれる地域に住む民族や地理的範囲、さらには歴史的背景など実に複雑です。しかし、明治時代から現在にいたるまで、日本人はこのことをほとんど理解していません。

もともと満洲は、17 世紀（日本の江戸時代初期）に清という中華王朝を打ち立てた満洲族の土地でした。そのため、中国の中心部に住む農耕民族である漢族（私たちが「中国人」と呼んでいる人たち）の移住を制限してきました。農耕民族は土地を耕して畑にしますが、遊牧民族にとって土地を耕されると牧草が無くなって放牧ができなくなります。清は遊牧民族の生活圏を維持するために漢族の流入を禁止していたのです。

しかし、19 世紀になるとロシアがシベリアから極東まで進出し、19 世紀半ば（江戸時代が終わる頃）には日本海に面する沿海州まで進出してきました。

ロシアの脅威に対して、清は王朝発祥の地である満洲を維持する必要に迫られました。しかし、満洲は人口過疎地でしたので、広い満洲を守ることは難しいのが現状でした。そこで、これまで禁止していた漢族の満洲への移住を認めた結果、あっという間に満洲は漢族ばかりになりました。ちなみに、半世紀も経たないうちに 19 世紀末には満洲族 80 万人に対して漢族は 1100 万人と人口で完全に圧倒するまでになりました。

また、同時期には朝鮮半島から困窮した朝鮮人農民らが国境を越えて間島地方（現在の延辺朝鮮族自治区）に流入しはじめ、19 世紀末には約 2 万人になりました。

このように、20 世紀を迎えた頃の満洲は、圧倒的多数派になった漢族の影響を受けて中国化が急速に進みました。それと同時に、朝鮮人やロシア人も満洲に住み始める一方、満洲族など在来民族が少数派に転落し、やがて歴史から消えていきます。

一方、こうした満洲の激しい社会変動に対して、日本はまったく無関係でした。もともと満洲と日本との歴史的関係は、古代に渤海国という国がたまに日本海側の港にやってくる程度で、近代になるまで関係は何も無かったのが実情です。

日本人のなかで満洲が認識されてさまざまな書物で言及されるようになったのは、ロシアが意識されるようになった江戸時代後期からです。しかし、現地に行った人もいないので、ほとんど空想に近い話ばかりでした。知識人も庶民も満洲は宇宙のように遠い未知の世界でした。

２、満洲との関係のはじまり

何も関わりのなかった日本が、満洲と歴史的に直接関わりを持つようになるのは、1894 年に起きた日清戦争からです。

そもそも日清戦争は、朝鮮半島の主導権をめぐる日清両国の争いでしたが、日本軍が連戦連勝するうちに、朝鮮半島から満洲の一部である遼東半島に進攻したことで、はじめて日本は一部分とはいえ満洲と歴史的関わりを持ちました。

日清戦争の結果、占領した遼東半島を日本は清国から割譲させました。このままだと日本領になっていましたが、満洲への進出の機会をうかがっていたロシアがフランス・ドイツと共同で日本に外交的圧力をかけて、遼東半島を清に返還させました（三国干渉）。

さらに、ロシアは清に対して、三国干渉の見返りを求めました。その結果、シベリアと沿海州を最短距離（満洲里－綏芬河）で結ぶ鉄道と大連港・旅順港を含む関東州（遼東半島の先端部分）の租借権、さらにはハルビン－旅順を結ぶ鉄道を建設する権利を獲得しました。

こうしたなかで、1900 年に北清事変（義和団事件）が起きて、ロシアが建設する鉄道工事で働いていた中国人労働者が暴動を起こすと、ロシアは軍隊を派兵し、満洲全域を事実上占領するにいたります。そして、この占領期にハルビンや大連などの開発が進み、ロシア式の街並みが満洲に出現していきました。

ロシア軍の満洲占領は、国境を接する朝鮮半島の支配権を確保しようとしていた日本に大きな脅威を与えました。このロシア軍による満洲占領が日露戦争に繋がりますが、この頃の日本の関心は、朝鮮半島の確保であって満洲に関心をもっていたわけではありませんでした。

1904 年に始まった日露戦争は、朝鮮支配を確実なものとするために日本がロシアの脅威を取り除こうとしたことが原因でした。しかし、日本軍が満洲のロシア軍を先制攻撃したために、戦場となったのは朝鮮ではなく満洲でした。戦場となった満洲の南部を占領した日本は、1905 年のポーツマス講和条約の結果、日本が南満洲の経済的利益を独占することをロシアに認めさせました。日本の経済的利益は、長春から大連・旅順にいたる鉄道路線（のちの満鉄本線）と関東州の租借権（ある期間、自国の領土のように支配できる権利）が代表的です。

しかし、そもそもの戦争目的は、朝鮮半島に迫ったロシアの影響力を排除することであって、満洲を支配するといった目的ではありませんでした。そのため、満洲に対して十分な予備知識を持っている人は政府にも軍にもほとんどいませんでした。とくに、ロシアから獲得した鉄道については、どのように活用するのか、そもそも儲かるのかさえ誰もわかっていませんでした。

そうしたなかでアメリカの鉄道王ハリマンが日米共同経営を日本政府に持ちかけます。この提案に当時の桂太郎首相が飛びつきましたが、外相の小村寿太郎が猛反対して実現にいたりませんでした。経済後進国だった日本が単独で満洲経営をするよりもアメリカの資本を呼び込んだ方が経済的ですし、国際的にもアメリカを味方に引き入れることができましたが、血を流して獲得した果実を独占したかった日本は、その後もアメリカの関与を排除し続け、最後は満洲国の承認をめぐって対立、戦争へとつき進みます。

アメリカの資本参加も実現しないなか、鉄道の使い道を具体的に提案できた唯一の政治家が後藤新平でした。後藤の発案を基にして満鉄という鉄道会社が誕生します。満鉄は表面的には株式会社という民間企業ですが、実態は日本が南満洲の支配強化を担う国家機関でした。

南満洲は日本の勢力圏（縄張り）となりましたが、日本の領土ではなく、清の領土でした。日露戦争は日本でもロシアでもなく清の領土で戦われました。戦争ではどちらの国にも味方し

なかった清にとっては迷惑な話で、戦争が終わって日本が南満洲を勝手に支配することを許すことはできません。

満鉄が株式会社という看板を掲げたのはこのような事情があります。要するに、満洲でやっている事業や開発は日本の民間企業がやっていることで、日本政府は清の主権（その地域を統治する権利）を踏みにじってはいないという建前です。もちろん、実態は日本が満鉄を通して南満洲を支配するということです。

ただ、「日本」といいましても、その内実は、陸軍や外務省や政党などさまざまな政治勢力が互いに牽制し合っていました。結局、それぞれが自分の組織の利益を優先して満鉄に介入した結果、かえって日本の満洲経営は迷走することになります。日本は日露戦争の果実を独占しようとしましたが、確実に味わうことができませんでした。

３．満洲をめぐる日本と中国の対立

日本は満洲経営の具体的なイメージははっきりしないままでしたが、満鉄の経営は順調に拡大、それに比例して日本の満洲に対する影響力も増大していきました。

日露戦争の後になるとロシアと関係は良くなります。日本とロシアは満洲を事実上支配するために長春より南は日本、長春より北はロシアと勢力圏を決めましたが、さらに満洲に隣接するモンゴルにも関心を強め、日本は内モンゴルの東（今の中国内モンゴル自治区の真ん中あたり）を勢力圏としました。日本で満洲を「満蒙」（満洲と蒙古の合成語）と呼ぶようになったのは、大正時代に入って日露によってモンゴルの勢力圏が決められてからです。

こうしてロシアとの関係は緊密になっていきましたが、その一方、中国で大きな混乱が発生します。

1911 年に辛亥革命が起きて清が倒れて中華民国が誕生します。中華民国は、漢族・満洲族・蒙（モンゴル）・蔵（チベット）・回（ウィグル）の五民族による「五族共和」をスローガンとして、清の領土をそのまま継承すると同時に、清末期にイギリスやフランス・ロシア・日本などの強国によって奪われた権益（領土や貿易の関税権や外国人に対する裁判権など）を回復すること国家の目標としました。当然そこには、日本が満洲で獲得していた満鉄や関東州などの権益も含まれていました。

しかし、中華民国は中央政府の力が弱く、戦国時代のような群雄割拠状態になってしまいました。そのなかで、満洲では張作霖という人物が台頭し、満洲の支配者として君臨するようになりました。

満洲はかつて満洲族中心の社会でしたが、19 世紀後半から漢族中心の社会へと急激に変化しました。そして、20 世紀に入ると満洲は、中国になったのです。そのなかで漢族代表として台頭したのが張作霖だったわけです。張作霖は満洲の中国化の象徴ともいえます。

張作霖は、自身の政治権力を高めるために日本の力を利用しました。日本にとっても張作霖を利用することで日本の影響力を拡大しようとしました。とくに、1917 年にロシア革命が起こり、これまで友好国だったロシアから共産主義のソビエトとなったことで、日本ではソビエト

が弱体なうちに旧ロシアが満洲にもっていた勢力圏を奪おうという考えも広まっていました。日本は張作霖を使ってソビエトを排除しようとしたのです。

しかし、張作霖は満洲を支配すると今度は中国統一の野心を抱くようになります。そして、1924 年には北京まで進出し、中央政府の実力者にまで登り詰めました。この頃から日本との距離を取り始め、何でも日本の言うことを聞く相手ではなくなっていきました。このような張作霖の態度に不満を募らせたのが、関東軍でした。

関東軍は、もともと満鉄の鉄道警備を主な任務として旅順に置かれた小規模な軍隊でした。しかし、張作霖との政治的な結びつきや中央の目が行き届かない特殊な環境の影響を受けて政治工作にのめり込む体質を持っていました。張作霖を日本は支援していましたが、そのなかでも突出して深い関係にあったのが関東軍だったのです。ただ、張作霖が日本と距離を取り始めると張作霖に替わる人物を担ぎ出そうとして、張作霖爆殺事件を引き起こします。

1928 年に起きた張作霖爆殺事件は、かろうじて残っていた満洲の実力者と日本のパイプを寸断し、満洲で日本と中国の対立が激しくなる原因となりました。

父を殺害された息子の張学良は、同年末に張作霖と激しく敵対していた蒋介石率いる国民党に合流、ここに蒋介石による中国統一が完成、辛亥革命から 15 年以上続いた中国の内乱は終息します。そして、満洲が中国に統一されたことで、中国本土で盛り上がっていた奪われた権利の回復を求める声が満洲でも広がる結果をもたらします。張学良はこのような世論を受けて、日本に敵対するようになります。なかでも、日本の満洲支配の象徴として張学良が打撃を与えようとしたのが満鉄でした。

張学良のさまざまな圧力に対して、世界恐慌の影響を受けて経営が悪化していた満鉄社内では、中堅・若手社員が過激化します。彼らは世論に対して満洲の権益を守ろうと訴えましたが、関東軍とも結びついていきました。ちょうど張作霖爆殺事件直後、関東軍に石原莞爾が着任していました。特異の世界観と独自な軍事思想を持つ石原は、世界が最終的には二大超大国による戦争が起こると予見し、世界最終戦論を唱えます。最後に残る超大国になるために資源も無く、領土も狭い日本は満洲を占領しなければならないと主張し、関東軍内部で満洲事変が計画されていきました。

こうして、満洲の権益をめぐって日本と中国の対立が深まっていきましたが、当時 3000 万人の人口を数えた満洲で日本人はわずか 20 万人しかいませんでした。しかも、満洲の日本人社会は現地社会に溶け込むこともせず、満鉄への依存体質から抜けきれませんでした。要するに、当時の満洲にいた日本人は満鉄なしでは生きていけなかったのです。一方、日本国内は満洲に対する経済的依存度はそれほどでもなく、満洲なしで日本が成り立たないことはありませんでした。石橋湛山のようなエコノミストは、満洲は投資する土地であって、支配する土地ではないとまで言っています。

実は、日本と満洲との関係はそこまで強いものではなかったのです。しかし、中国にとっては、戦乱に明け暮れた中国本土に比べて満洲は一定の平和を保ち、漢族はますます増えていきました。漢族代表の張作霖・張学良が支配した時代は、満洲が「中国東北」になっていく時代でした。

しかし、日本はこの現実の変化を理解しようせず、あくまでも既得権の死守にこだわりました。満洲事変は、中国に飲み込まれる満洲という現実を受け入れるか否かをめぐる日本と中国の衝突だったのです。

４．満洲国の現実と破綻

1931 年 9 月 18 日に起きた満洲事変は、関東軍によって引き起こされ、半年も経たずに満洲国という国家が誕生しました（1932 年 3 月 1 日）。わずか 2 万人にも満たない小規模軍隊で資金も人材も欠けている関東軍が、短期間に軍事的成功を収め、満洲国を誕生させることが可能だったのは、満鉄の協力があったからです。

満鉄は、事変が勃発すると軍事輸送の他にも各地の情報を収集するなど戦争の拡大に寄与します。そして、満洲国が出来ると必要な資金と人材を供給しました。多くの満鉄社員が満洲国に参加して国家建設を担いましたが、その見返りとして満鉄は満洲国のすべての鉄道路線と主要な産業を自社のものとし、巨大なコンツェルン（財閥）となりました。

満洲国は、こうした満鉄と関東軍との二人三脚のうえに成り立っていましたが、こうした関係は長続きしませんでした。

関東軍では、満洲国が出来ると最大の功績者だった石原が栄転して満洲を去ります。これ以降、石原の思想的影響は薄れ、満洲国は関東軍の利権のようになっていきました。関東軍にとって､満洲国の経済や開発すべてを満鉄に依存することは､好ましいものではなくなりました。1935 年以降、満洲国も組織が出来上がると、日本国内の官庁から人材が送られてくるようになり、人材面での満鉄依存が薄れていきました。岸信介ら中堅若手の能力のある官僚が満洲国へ転任してきたのもこの頃です。やる気のある官僚にとって障害もなく、思い描いたプランを実行できる満洲国はまさに天国のようなところでした。

このような官僚を中心に満洲国の本格的な重工業化と大規模な資源開発が計画され、5 年で農業国の満洲を世界的な工業国へ生まれ変わらせようという壮大な計画－満洲産業開発五カ年計画－が 1937 年度からスタートしました。満洲国の近代的な町並みはこの頃に創られ、豊かな都市文化が生まれました。

その一方で、この計画によって大きくなりすぎた満鉄の解体が行われ、経済面での満鉄依存もなくなりました。満鉄の歴史的な役割はこの頃に終わりました。

さて、五カ年計画は鳴り物入りで始まりましたが、開始早々に日中戦争が勃発したため、大きくつまずきます。戦争が優先されたため、満洲国の育成は後回しにされます。陸軍の暴走によって泥沼化した日中戦争は、満洲国の発展を阻害したといえます。さらに日米戦争が始まると満洲国の開発どころではなくなります。結局、日本が超大国となってアメリカに対抗するために創られた満洲国は、本格的なアメリカとの戦争には何の役にも立たずに終わります。

このような経済面ばかりでなく、あらゆる面で満洲国は矛盾だらけでした。満洲国の建国スローガンは「五族協和」による「王道楽土」の実現とされましたが、五族（日本・漢・満洲・モンゴル・朝鮮）の平等は建前でしかなく、しかも不思議なことに国籍が作られなかったので、

満洲国には「国民」が最後まで存在しませんでした。日本人は日本国籍のまま満洲国に渡ってきて、政治や経済の権力を握っていました。しかし、権力を握る日本人が満洲国のなかでは少数派だった現実も変わりませんでした。満洲事変前よりは日本人が増えましたが、土地に根付いた人たちではなく、いつかは日本へ帰っていく転勤族が多かったのです。
こうしたギャップを埋めるために考え出されたのが満洲移民でした。1932 年から始まった満洲移民は当初、治安対策のための屯田兵と農村恐慌にあえぐ国内零細農民の救済という一石二鳥を狙った政策でしたが、やがて産業開発五カ年計画に組み込まれて、20 年で 100 万戸（約 500 万人）を満洲へ移住させる計画へと拡大しました。そして 1937 年から全国各地で移民の送り出しが盛んになり、これまで満洲とは縁もゆかりもなかった人たちが半ば強制的に満洲へと渡っていきました。

しかし、この計画も日中戦争の勃発によって当初から大きくつまずきました。移民として期待された成年男子の多くが戦争の拡大によって軍隊に召集されたからです。そこで、徴兵年齢に満たない 10 代の青少年がターゲットにされ、満蒙開拓青少年義勇軍として満洲へ渡っていきました。さらに、国内では戦争が長期化するなかで廃業した中小商工業者や会社員も農業経験は関係なく移民となり、空襲が激しくなると空襲罹災者まで送り出されるようになりました。すでに農業移民という目的は完全に失われ、数さえ揃えば誰でもいいといった話になっていました。

1945 年 8 月 9 日のソ連軍進攻によって関東軍も満洲国もあっけなく崩壊しました。関東軍は満洲国を支配することばかりに関心を払い、本来の任務である対ソ戦計画をおろそかにしていました。満洲国の出現を最も深刻に受け止めたソ連は、着々と軍備を増強し、1935 年以降、関東軍に対して軍事的に優位に立つようになりました。しかし、関東軍はこの事態を重く受け止めず、気づいた時には手遅れでした。

日本とソ連の戦争はわずか 10 日で終わりましたが、1946 年春の引揚開始までは実質的に戦争がつづいていたといえます。その間に、155 万人の日本人のうち、犠牲者は 24 万 5000 人にのぼりました。また、数え切れないほどの人たちが現地に取り残されました。

沖縄戦や広島原爆よりも多い最大の民間人犠牲者を生み出し、現在まで残留日本人問題として続く満洲の悲劇は、歴史的な必然性も明確な目標もないままスケールだけは大きくなってしまった日本と満洲との関係の帰結を象徴しているといえます。

高知の戦争史料

小幡尚（高知大学教授）

はじめに

本稿の主題は、近代の高知における「軍・戦争」に関する研究の基盤となる史料の現況を確認し、そこから今後の可能性についての展望を示すことである。

筆者は、近年「高知県における戦没者慰霊」を主たる研究課題としている[1)]。具体的に言えば、戦争で亡くなった兵士たちが同時代、そしてそれ以降現在に至るまでどのように弔われてきたのかという問題について、葬儀や墓に着目しながら考えている。

「戦没者がどのように慰霊されてきたのか」についての研究は、近年各地で進められつつあるものの、まだ不明なことが多い。このような研究を進めるためには、「誰がいつどのように亡くなったのか」についての基礎的な情報が不可欠であるが、このような情報が十全に整備されているとは言い得ないのが現況である。

高知県について言えば、「軍・戦争」研究を含めて、近代史研究の研究蓄積は厚くない。とくに、明治より後の時代に関しては、研究を進める上での前提となる情報も未整備である。

近代史料の状況について述べると、まず言えることは公文書の残存状態が極めて悪いということである。また、現在残っている 1945 年以前の公文書を活用しようという姿勢もほとんど見られない。さらに、高知県内に公文書館がないことに象徴されるように、これから公文書を保存・活用していこうとする意識も高くないのである。

地域を対象として近代史を研究する場合、基礎的な史料の一つとして活用できるのが、その地域で発行されていた新聞である。高知県は、地元紙の残存状態が極めて悪く、十分に情報を得ることができない。欠号が多いことの主たる原因は、1945 年の空襲被害である。

「昭和 20 年 7 月 4 日高知市は B29 によって大空襲を受け」、「この空襲によって高知県立図書館は蔵書（13 万冊）もろとも全焼した」。それは、貴重な蔵書の「疎開準備を終え移動というその間際」のことだったという[2)]。さらに、1941 年 10 月に土陽新聞と合同して以降、県唯一の地元紙となっていた高知新聞社の社屋もこの空襲の際に全焼している[3)]。

県史・市町村史などの自治体史は、発行から長い年月が過ぎたものが多く、史料的価値が高いものは多くない。

近代史の史料全般がこのような状況にあるため、戦争史料についても充実しているとは言い得ないのが現状である。例えば、高知に置かれた「郷土部隊」である歩兵第 44 連隊（後述）の一次史料はほとんど残っていない[4)]。

アジア・太平洋戦争の敗戦から 70 年以上が経過した今、戦争についての知見を記憶から得ようとすることは不可能となりつつある。そのため、これまで以上に、記録を重視する必要がある。既に述べたような状況の中ではあるが、戦争についての記録を残すことに努めつつ、少しでも研究を進めていかなければならない。そのためには、これまでと異なる発想で研究を進める必要があろう。

本文では、筆者らの近年の調査活動の中から、これまで着目されてこなかった史料を活用す

る事例や、新たな史料を「発掘」して戦争史料として利用する事例などを紹介していく。そこでは、主に日清戦争（1894-1895 年）・日露戦争（1904-1905 年）期の事例を述べていく。前提として、両戦争期の高知における軍の動向等について見ておきたい[5)]。

1873 年 1 月、全国は 6 つの軍管に分けられ、それぞれに鎮台が置かれた。この時、高知は広島鎮台が置かれた第 5 軍管に属した。よって、徴兵令の施行時、高知で徴兵された青年は広島に入営していた。1875 年には、同軍管下の香川県丸亀に歩兵第 12 連隊が置かれ、高知県民の入営先はここととなった。1884 年に愛媛県松山市に歩兵第 22 連隊が発足し、入営先は同連隊となった。

日清戦争期において徴兵された高知県民の入営先は松山であった。日清戦争に際し、22 連隊は戦地へと赴いた。高知県民の日清戦争戦没者は同連隊の兵を中心に 281 名を数える。

高知県に初めて置かれた「軍隊」は、香川県善通寺に置かれた第 11 師団に隷属する歩兵第 44 連隊である。同連隊は 1896 年 12 月に松山兵営で編制され、翌 97 年 7 月に土佐郡朝倉村（現高知市朝倉）の兵営に入っている。同連隊が、高知の「郷土部隊」であり、朝倉の兵営がアジア・太平洋戦争の敗戦にいたるまで高知県で唯一の「軍隊がいる場所」であった。

44 連隊は、日露戦争に出動し、多くの犠牲者を出した。同戦争における連隊の戦没者は 2,287 名である。また、高知県全体の戦没者は 2,537 名であった。

日露戦争期の高知県では、出征兵士の家族の救援などを目的に掲げる軍事援護団体が市町村を単位に広く組織された。それらの組織のほとんどは兵事会、そして婦人会という名称であった。

ここに見られるように、日清・日露戦争期の高知県においては、市町村が軍・戦争を支える役目を果たした。ここにいう市町村は、現在のものとはその規模が全く異なる。1889 年 4 月に、高知県に 1 市 2 町 194 村が設置されている（1893 年に 195 村となる）。よって、両戦争期においてはこれらの市町村が、軍事援護等の事業において主たる「単位」となったのである。また、1891 年 4 月には 7 郡（幡多・高岡・吾川・土佐・長岡・香美・安芸）が置かれている。

１、史料としての碑文

すでに述べたように、高知県においては「軍・戦争と地域」の歴史について、基礎的な史実を知ることすら難しい状況にある。そのような中、戦争と地域との関係に関する知見を深めるためには、これまで利用されてこなかった史料を積極的に利用する必要がある。ここではその一つの例として各地に残る石碑の碑文に注目したい。以下、高知県の市町村が日清戦争・日露戦争にどのように対応したのかについて、それらを用いて考える試みについて紹介する。

先に述べたように、日清戦争期の高知県には郷土部隊がなかった。そのこともあってか、同戦争との地域の関わりについては、基礎的な史実も明確になっていない。戦没者数は近年に至るまで分かっていなかったし、出征者の数は今も不分明である。地域に見られた動向については自治体史にわずかな情報があるのみである。文献史料では知ることができない情報を、現存する石碑に刻まれている碑文によって得られることがある。

香南市香我美町上分には、日清戦争と山南村（現在の香南市の一部）との関わりについて記

す「山南紀功碑」が現存している。同碑は、自然石を用いたもので、1897 年に建てられたという。同碑には、「征清之役」に従軍した「高知香美山南兵士十三氏」の階級・勲位・氏名が刻まれている。10 名が歩兵であり、「一等軍曹」2 名、「二等軍曹」1 名、上等兵 1 名、一等卒 5 名、二等卒 1 名である。他に、砲兵一等卒 2 名と三等看護長が 1 名いる。碑文には、戦時中の彼等の動向についても述べられている。彼等は全員「第五師団」に属し、そのうち 9 名が出征し、松山兵営に 1 人、広島兵営に 2 人、さらに「馬関」に 1 人残ったのだという。

図 1

日露戦争に関しては、戦争の規模が日清戦争よりも大きく、戦没者数も多い。同様に、従軍者も多かったと考えられる。日清戦争に比べれば、各市町村の戦没者に関する情報は豊かである。しかし、その詳細まで捉えることができるかと言えば、それは難しい。日清戦争と同様に、碑文から従軍者や戦没者の情報を得られることがある。

先に紹介した「山南紀功碑」の隣には、「紀念」と大書された 1912 年に建てられた碑がある。これは、同村から日露戦争に従軍した 51 名を記念するために建てられたものであり、戦没者 11 名と帰還者 40 名の階級・勲位・氏名が記されている。

また、安芸郡安田町別所の北寺（きたでら）の境内には、中山村（現在の安田町の一部）の「日露戦役紀念」碑がある〔**図 1**〕。1906 年 12 月 25 日に同村の興武会によって建てられたと同碑に記されている。

表面に書かれている碑文によれば「本村出征軍人実三十九名戦歿者十二名凱旋者二十七名」であるという。裏面にこの 39 名の人物の階級・勲功・氏名が「戦歿者」「凱旋者」の別に刻まれている。前者は「故陸軍歩兵上等兵勲八等功七級」1 名、同「一等卒勲八等功七級」2 名、同「上等兵勲八等」2 名、同「一等卒勲八等」2 名、同「二等卒勲八等」が 5 名である。後者は、「陸軍騎兵中尉従七位勲六等功五級」から「陸軍輜重輸卒」まで 27 名である。

碑の側面には「有日清役勲功者而此役在内地鞅掌軍務受賞典者」の氏名が記されている（「陸軍歩兵一等靴工長勲八等」）。

石碑や墓碑についての調査を進めることによって、「失われた」と思われていた史実を明らかにできる可能性がある。近代に建てられた石碑等の調査はまだほとんど行なわれていない。調査を進め、その碑文を記録していく必要があろう。

２、地域に遺る行政史料（各種公文書）

高知県における公文書の保存・活用に問題があることは前述の通りである。県全体として状況が変わる兆しは見られないが、各地で公文書が発見され、それを保存・活用しようとする動きが見られないわけではない。ここでは、近年「発見」された地域の史料を紹介し、それが戦争史料としても今後の研究を深化させ得る貴重なものたり得ることを述べたい。

2017 年 2 月 1 日付の『高知新聞』に「旧中山村の文書整理　安田町と 1943 年に合併　明治－昭和の 1000 点余　政策、世相把握へ」との記事が掲載された。これは、1943 年に合併し、現在は安田町の一部となっている旧中山村の役場庁舎（「安田町中山支所として利用された後、

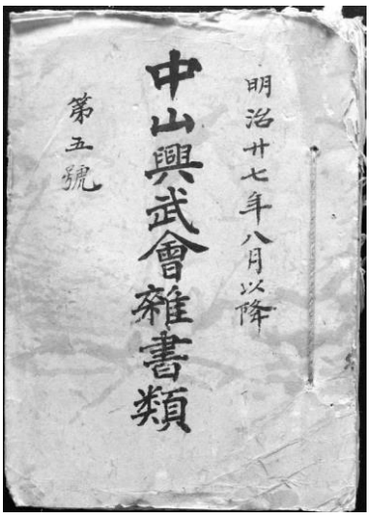


図 2

2015 年 7 月まで東部森林組合安田支所の事務所が 1 階に置かれていた」）に保管してあった文書が確認され、安田町などにより整理が開始されたことを報じるものである。

筆者は、同町の許諾を受け、2017・18 年度、「中山村旧役場等文書（仮称）」（以下、「文書」とする）の調査を行なった。同文書には、役場文書・村会文書などの公文書に加え、森林組合などの村内にあった各種公的組織の文書も含まれており、史料的な価値が非常に高い。その中には、同村や周辺町村、さらには高知県と軍･戦争との関係を知るための素材となる史料も多く含まれている。以下、同文書の史料によって明らかにすることができる「日露戦争下の中山村」の諸相について、その一端を示したい。

先に日露戦争期の同村について簡単に述べておこう。「文書」に含まれる史料『明治四十年中山村治一班　中山村役場』（綴り）によれば、1906 年末現在の戸数は 344 で、人口は 1,757 人（男 874・女 883）だという。同綴りには、「兵員（暦年末現在）」という項目がある。それによれば、1904 年は陸軍の現役 6・予備役 5・補充兵 13・後備役 5、第一国民兵 0・第二国民兵 244、同様に 1905 年には 6・3・15・6・2・234、1906 年は 7・4・18・7・2・228 であった。

また、同綴りには「三十七八年戦役恤兵救族」団体として、「中山村興武会　仝婦人会」が挙げられている。前者の設立年月日は 1894 年 8 月、後者は 1905 年 1 月で、その会員数はそれぞれ 325 名、276 名だという。両会は、同村の軍事援護団体である。

すでに述べたように、この時期の高知県では、軍事援護団体の一般的な呼称は兵事会であった。しかし、そうではない独自の名称を付ける町村もあった。中山村もその一つである。また、この会名は「日露戦役紀念」碑の建立者として記されていたものである。つまり、同碑は日清戦争を機に組織された同村の軍事援護団体によって建てられたものだったのである。

「文書」には、興武会の活動を克明に記録した史料が含まれている。『明治廿七年八月以降中山興武会雑書類　第五号』と表紙に記された綴りがそれである（〔**図 2**〕 以下、『雑』と略記する）。『雑』には、1894 年 8 月の設立から 1908 年 9 月に至るまでの同会の関係文書が綴じ込まれている。最も充実しているのは日露戦争期であり、当該期の同村出身の兵士たちをめぐる様々な活動（徴兵、出征の見送り、慰問、安否確認、怪我や疾病・入院の状況の通知、戦死・戦病死・戦傷死の通知、遺骨の帰還・引き渡し、葬儀、「凱旋」など）を示す文書が綴り込まれている。

当然ながら、『雑』には興武会が発した文書だけではなく、同会が受信した文書も含まれている。それによって、中山村に限らず、周辺町村、そして高知県全体の軍事援護の動向についても知ることができる。

高知県を単位として活動していた組織の一つが高知武揚協会である。同会は、「兵役に服する者を激励するために、入交太次平、川崎幾三郎らが発起して」1884 年 11 月に結成されたも

のである[6]。もう一つが高知恤兵通信会である。この組織については、高知県に関する辞典等にも項目が立てられておらず、その活動についてはほとんど知られていない。当時の新聞にも、「戦時県民の要求に応ぜん為め貴族院議員五藤正形氏が独力を以て経営せる県下唯一の恤兵通信機関」（「恤兵通信会に就て」〈『土陽新聞』1905 年 3 月 1 日〉）と報じられている程度である。『雑』によって初めて同会の活動実態の一端とその重要性が明らかとなった。

『雑』には、1904 年の「紀元節」（2 月 11 日）に出された「高知恤兵通信会趣意書」が収められている。それは、「戦時ニ於テ出征軍人ノ動静ヲ其家族ニ急報シ家族ノ状況ヲ出征軍人ニ示シ相互ノ通信ヲ計ルハ恤兵事業中ノ最要ナルモノト信ズ」と始められ、同会が「出征軍人ト其家族ノ中間ニ立チ一ツハ前者ヲシテ後顧ノ念テ断タシメ一ツハ後者ニ慰安ヲ与フルノ機関」たることが目的であると述べている。

趣意書の後ろに置かれた「高知恤兵通信会規約」では、同会による 3 つの「事業」が挙げられ、その 1 が「高知連隊区管内ノ出征軍人ノ動静ヲ可成速カニ其家族ニ通報スルコト」であり、その 2 が「出征軍人家族ノ状態ヲ出征軍人ニ詳報スルコト」とされている。同会は、文字通り、戦地の兵士と郷里の家族との「通信」を維持することを目指していたのである。

注目されるのは、同会の事務所が（「当分ノ内」とされてはいるが）「高知市追手筋高知連隊区司令部内」に置かれていることである。連隊区司令部は徴兵や動員に関する事務を扱う軍の機関である。つまり、同会は「国の機関」ではないものの、軍の機関と直接関わる形でその事業を展開していたのである。

『雑』には、通信会の活動を直接的に示す「高知恤兵通信会報号外」（「明治三十五年十二月十五日第三種郵便物認可」とある）が 2 号（1904 年 9 月 27 日発行のものと同年 10 月 11 日発行のもの）含まれている[7]。1904 年 9 月 26 日付の通信会会長名の文書によれば、同会の者が善通寺の第 11 師団「司令部に陳情せしめ交渉の結果善通寺予備病院及各分院各室を自由自在に出入来往し得る特許を得」、同地に担当者を置いて「本県出身の患者に対する入退院、転院、転室傷病者の経過其他の異動を時々報告」するなどの業務に当たらせることにしたという。

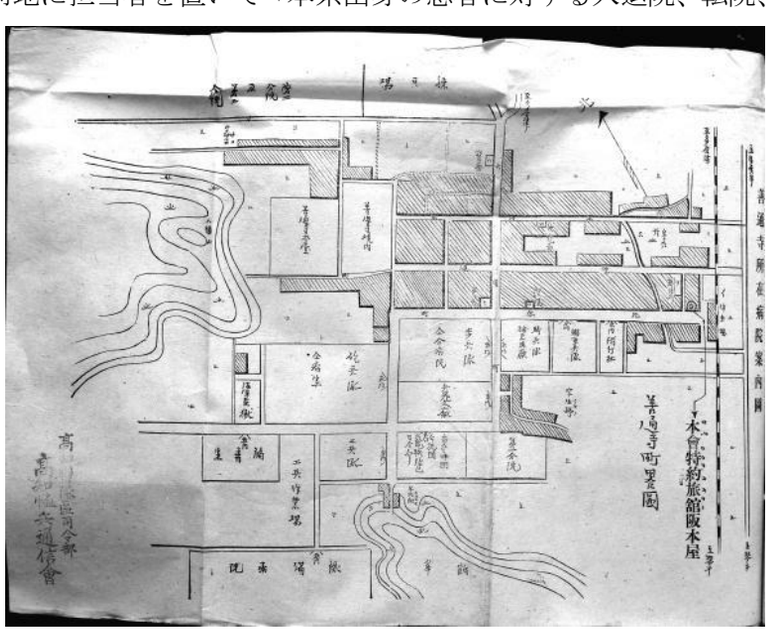


図 3

このことを反映しているのであろう、9 月 27 日発行の「号外」には、「傷病者慰問者の為めに」「予備病院所在地」「慰問者面会者心得」などの記事が掲載されている。また、「号外」とは別に作成された「善通寺所在病院案内図」には、各病院の場所が詳しく記されている〔**図 3**〕。

10 月 11 日付の「号外」には「遺骨受領に就て」「当歩兵第

四十四連隊補充大隊の遺骨遺髪遺留品に関する規定」「遺骨遺髪到着に就て」などの記事が掲載されており、通信会が戦没者の遺骨の帰還に関わっていたことを知ることができる。

「遺骨の帰還」等に関して具体例を示したい。以下、先述した「日露戦役紀念」碑裏面の「戦歿者」の 3 番目に記されていた「故陸軍歩兵一等卒勲八等功七級」Ａの事例を示す。

『雑』中に、中山村長南善策と興武会長清岡正栄の連名による同村出身の 23 名の兵士に宛てた 1904 年 11 月 1 日付の「書簡」がある。これの宛名の中に、Ａの氏名が初めて見出せる。この書簡は、軍務に従事する同郷の兵士たちを激励し、「御身体ヲ御自愛在テ堅忍持久益々奉公ノ誠ヲ竭サレ以テ終局ノ目的ヲ達」するよう求めるものである。

Ａの氏名の前には「出征第三軍第十一師団歩兵第四十四連隊第五中隊第二小隊第二分隊　歩兵一等卒」と記されており、戦地での所属分隊まで知ることができる。

この次にＡの氏名が見出されるのは、彼の死を伝える文書においてである。同年 12 月 1 日付の興武会からＡの遺族に宛てた文書（冒頭に「秘」とある）には、「左記ノ通リ高知恤兵通信会ヨリ内通」があったとし、「左記」の文書（11 月 30 日付）に「死歿（死因未詳[ママ]）」と記されている。

興武会は、この報に対して問い合わせを行なった。同年 12 月 18 日、Ａが「何月何日何レノ地ニ於テ何ノ為メ如何シテ死亡」したのか取り調べるように依頼する書簡を高知恤兵通信会に宛てて発した。これに対し、12 月 22 日付で「去月三十日以後何地方面ヨリモ音信相受ス」との返信が届いている。

Ａの死亡の態様についての詳しい情報は、12 月 26 日に通信会から興武会へ伝えられた。それによれば、10 月 30 日に「於清国盛京省東鶏冠山小砲台東南堡塁突撃ノ際生死不明」となったという。この情報については、「家族ニ限迅速御内報」するように指示されており、興武会は 28 日に遺族へと知らせた。

この後、Ａの遺骨が「到着」したとの知らせが入る。その日付ははっきりしないが、通信会からの知らせを興武会からＡの遺族へ伝えたのが 1905 年 1 月 27 日であることから、その数日前であったと考えられる。

3 月 10 日には、Ａともう 1 人の遺骨が村に帰還するという知らせが入る。この日、44 連隊の兵営にある補充大隊から安芸郡役所に届いていた（その過程については不詳）遺骨を村へ「恭迎」するので、14 日の「午後一時迄ニ安田村大字唐浜明神迄出迎」えるよう興武会・婦人会から告知された。

『雑』所収の文書から、この時点では戦死と認定されていなかったことが判る。4 月 17 日に通信会から「中山村兵事会」宛てに次のような文書が出されている。Ａは「十月三十日東鶏冠山北砲台ニ於テ戦闘ノ際生死不明ノ所本年一月二日仝所ニ於テ死体発見戦死ト認定」されたので通知する、と。

靖国神社に祭られている戦死者の「所属部隊号、戦死、病死及び不慮死の年月日」と場所、官職等級・氏名・原籍府県名が記されている靖国神社社務所編『靖国神社忠魂史』（同所、1934 年）にＡの名もある（第 3 巻、p120）。そこには、「明三七、一〇、三〇」「東鶏冠山付近」と記されている。戦死の日時はそのまま公式記録となったようだが、その場所は最終的に「北

砲台」ではなく「付近」と認定されたのだろう。

Aの葬儀が行なわれたのは 1905 年 4 月 23 日のことであった。この日、同村の北寺（先述した「日露戦役紀念」碑がある寺院）でAを含めた 6 名の戦没者の葬儀が興武会によって執行されている。

また、『雑』から、葬儀以外の局面でのAの慰霊についても知ることができる。『雑』に綴り込まれている 1905 年 8 月 15 日付で恤兵通信会から興武会に出された葉書には、「忠死者」たるAが「来ル廿四日朝倉忠魂社ニ合祭」されることになったので、遺族に通達するようにと記されている。興武会は同月 17 日付で遺族に伝達した。

朝倉忠魂社とは、44 連隊の兵営にあった戦没者を祭る神社である。同社は、「日露戦役に於て護国の鬼となれる連隊将兵の霊を祭り芳名を永く後世に伝へ以て後進の鑑とする目的を以て」兵営内に建立されたものであり、1905 年 3 月に竣工している。同社には、「日露戦役戦病死者」2,287 名が祭られた[8)]。

このように、『綴』によって日露戦争で亡くなった中山村出身の兵士について、その死が郷里にどのように伝えられ、どのように遺骨が帰還し、どのように慰霊されたのかについて詳しく知ることができる。また、村の軍事援護団体と高知恤兵通信会が兵士の家族と戦地とを結ぶ大きな役割を担っていたことも知ることができる。

『綴』そして、「文書」の他の史料を活用することにより、これまで明らかとなっていなかった戦地と郷里を結ぶさまざまな「線」の具体相を知ることができるだろう。

３、戦争史料を保存・活用する試み

最後に、高知県の戦争史料を充実させるために現在進められている活動について紹介したい。

高知県内の図書館・博物館は、他県に比して充実しているとは言い難く、収蔵スペースも大きくない。そのこともあり、高知県内において戦争史料が新たに発見されたとしても、博物館等の公的機関にその「実物」を所蔵してもらうことはほぼ不可能である。言うまでもなく、1945 年まで、高知県からも多くの男性が従軍し、戦場へと赴いていたのであり、地域には今でも多くの戦争史料が残っているはずである。それらは、共有されることなく「眠っている」ものと考えられる。この状態が続けば、貴重な史料は散逸し、二度と見ることができなくなってしまう。

このような状況に抗うために 2016 年 5 月に結成されたのが、高知戦争資料保存ネットワークである[9)]。結成以来、月に一度の定例会において、メンバーの元に持ち込まれた戦争史料をデジタルカメラ等で撮影し、その目録を作成している。「現物」は、撮影終了後に所有者に返却している。

今後、オーテピア高知図書館をはじめとする県内の公共図書館で目録を公開し、閲覧を希望する者には、所有者の認可を得た上で画像データを見てもらおうと考え、現在その具体的な方法について検討しているところである。

図４

これまでの約 3 年の活動の中で、さまざまな戦争関連史料と出会うことができた。そのうち資料的価値が極めて高いと考えられるものを 1 点だけ紹介したい。それは、『関東局警察遺芳』（関東局内南満州警察協会、1938 年〈以下『遺

芳』とする〉）という書物である〔**図 4**〕。大きさは四六倍版、およそ 1300 頁ある。

『遺芳』は、同ネットワークの会員・恒石節子氏が所有するもので、同氏の亡父の遺品である。同氏の父は、1904 年、高知県奈半利町生まれ。兵庫県で警察官として働いた後、1929 年より 1937 年まで関東庁で警察官として勤務していたという。1937 年以降は満州国で働いていたが、1945 年 7 月の葉書が届いたのを最後に消息が途絶え、今に至っているとのことである。

『遺芳』は「関東局三十年の歴史と、その功業を反映せしむるため関東局若くは関東局警察と縁故深き人々特に殉職警察官の在りし日の面影、その遺族の近影、殉職現地の写真等を努めて輯録」したものである（「例言」による）。発刊のきっかけは、1937 年 12 月 1 日に、「日本が多年満洲国に享有せる治外法権並に満鉄付属地行政権を、或は撤廃し、或は移譲し」、「関東局警察が、州内州外に分離し、その州外警察は、挙げて満洲国に移管され、同時に多年の経験と訓練を経た練達堪能なる三千五百余名の州外勤務職員が、この日を以て満州国に統合」することになったことである（「序」による）。

目次は次のようになっている（小項目・細目は省いてある）。

総括編　関東局／関東局警察の中枢／燦然たる満州文化／さらば関東局警察／回想／関東局警察の展望

州外編　警務部／警察官練習所／新京・范家屯・公主嶺・四平街・開原・鉄嶺・奉天・撫順・蘇家屯・本渓湖・鳳凰城・安東・遼陽・鞍山・大石橋・営口・瓦房店各警察署

州内編　関東州庁警察部／大連・大連小崗子・大連沙河口・大連水上・旅順・金州・普蘭店・貔子窩各警察署／大連消防署

本文には、それぞれの警察署の「沿革史」が記された上、「昭和十二年十月一日現在を以て編纂の基準とし」、「昭和十二年十月一日より同月中旬までの僅々一二週間の短時日に撮影蒐集」された多くの写真が配されている（「例言」による）。そこには、今は失われたであろう多くの建築物、当時の職員、更にその家族までが写っている。巻末には職員の索引が掲載されており、それぞれの出身地（「主として本籍地」）が都道府県のみではなく町村まで記されている。

それぞれの警察署の活動についても詳しく紹介されている。その中には、「討匪」もある。これはいうまでもなく、占領地における治安維持活動のことである。例えば、関東局警察の活動を紹介する個所には「討匪行」という頁が設けられ、写真のキャプションに「本渓湖神社々前に於ける関東局警備警察隊主脳部と各部隊長（昭和十一年一月二十八日）」、「警察隊司令部に於ける東条警務部長」とある（p51）。「東条」とは、後に陸相・首相となる東条英機である。撫順警察署の活動紹介中には、「治安粛正工作」を紹介する見開きの頁があり、「昭和十一年秋期討伐の思ひ出」として、「作戦」「情報」「出発」と題する写真が掲載されている（p528-529）。

『遺芳』が貴重なのは、その内容の重要性の故だけではない。管見の限り、同書は恒石氏所蔵のもの以外に残存していない。国立国会図書館にも所蔵がなく、CiNii Books などで検索しても情報はないのである。

関東局警察出身者によって組織された関東局警友会の事務局から 1981 年に発行された『関東局警察四十年の歩みとその終焉』（斎藤良二編著）という書籍がある。同書に掲げられている事務局長丸山好雄による「発刊のいきさつ」に、次のような記述がある。

> たまたま、警友会の計画解散が日程にあがるようになったことから、「関東局警察史」ともいうべき「遺芳」（昭和十二年刊・全警察官に配布）を終戦により失った私達にとって、それに代わる記録の必要性と、その意義を痛感した。

つまり、『遺芳』は関係者の間にも遺っていないのである。

『遺芳』は恒石氏によって大切に保管されていた。しかし、必ずしも同書の資料的価値について深く認識してはいなかったようである。同書が高知戦争資料保存ネットワークの活動の場に提供されたことによって、その価値についての認識が広く共有されるに至ったのである。

『遺芳』のようにそれ自体が際立って高い資料的価値を有するものではなくとも、多くの史料と有機的に関連付けることで重要な意味を持つ可能性を有する史料は多くあると考えられる。本ネットワークは、これからも地域に存する史料を発掘し、その価値を見出して行くことを目指して活動を続けていく。そして、保存・活用のための活動とともに、史料の価値を共有することができるネットワークの構築にも力を入れたいと考えている。

おわりに

繰り返し述べたように、「高知の戦争史料」をめぐる状況は決して良好ではない。しかし、光明が全く見えない状況でもない。これまで見過ごされてきた地域に存する多様な史料を収集し、それらを総合的・立体的に検討して行くことによって、「高知と軍・戦争」研究を深化させる余地は十分にあると考える。

本文において、そのような可能性を見出すことができる若干の事例について述べた。ただ、それらの事例が偶然に大きく依存するものであることは否めない。難しいことではあるが、今後は偶然に頼らざるを得ないという脆弱性を少しでも克服していく必要がある。そのためには、戦争・軍をめぐる史料同士を結びつけるネットワークを多様な形で構築し、史料を総体的・有機的に検討する機会を増やしていくように努めるべきである。

本稿では、高知というフィールドを対象とした事例を述べた。今後は、高知を基点としつつも、対象とする地域を広げていく必要もあろう。『雑』に綴られている史料によって、高知県全体の動きや第 11 師団の動向まで知ることができたことを本文で述べた。これからは、四国全体を見渡す視点を持ちながら検討していく必要がある。これは、単に地理上の便宜の問題ではない。善通寺（香川県）に置かれた第 11 師団の徴兵区は（ほぼ）四国四県なのである。同一徴兵区の中に見られるさまざまな事象について、その共通性と差異について考えることには大きな意味があろう。

「高知の戦争史料は充実している」と言うことができるような状況になるためには、数多くの事柄を解決していかなければならず、長い時日が必要であろう。その道程は長いものであろうとも、そう言える地点に少しでも近づくために、史料の調査と、それを共有する活動を継続していくしかない。極めて当然な結論ではあるが、そのような基本的な作業を重要視しながら

地道に活動を続けていくことがその捷径であるといい得よう。

註

[1] その成果の概略については、拙稿「高知県における戦没者慰霊」（坂根嘉弘編 2014『地域のなかの軍隊５　中国・四国　西の軍隊と軍港都市』吉川弘文館所収）を参照いただきたい。

[2] 高知県立図書館 100 年の歩み編集委員会編 1981『高知県立図書館 100 年の歩み』高知県立図書館、p22。

[3] 高知新聞社社史編纂委員会編 2004『高知新聞 100 年史』高知新聞社、p184。

[4] 同連隊によって作成された『連隊歴史』（1896～1945 年）のみが現在に伝えられている（高知県立歴史民俗資料館所蔵）。

[5] 日清戦争期の高知の動向については拙稿 2018「日清戦争と高知県―戦没者の問題を中心に―」（高知大学人文社会科学部人文科学コース『人文科学研究』第 23 号）を、日露戦争期については拙稿 2011「高知県における日露戦争戦没者慰霊」（高知大学人文学部「臨海地域における戦争と海洋政策の比較研究」研究班編著『臨海地域における戦争・交流・海洋政策』リーブル出版所収）を参照いただきたい。

[6] 外崎光広 1980「武揚協会」（高知県歴史事典編集委員会編『高知県歴史辞典』〈高知市民図書館、p654）。

[7]『高知恤兵通信会報』が出されていたことが想定されるものの、『雑』には収められていない。管見の限り、所蔵する図書館等も存しない。

[8] 歩兵第四四連隊編『連隊歴史』（同隊、1929 年発行・1936 年改訂増補版〈高知県立図書館所蔵〉）、p19・20。その位置については、高知大学弾薬庫調査班編 2016『旧陸軍歩兵第 44 連隊弾薬庫等調査報告書―国立印刷局高知出張所跡地調査による―』高知市教育委員会の「図Ⅱ-2　兵営配置復元図」（p6）を参照のこと。

[9] 筆者が会長を務めている。連絡は、高知大学人文社会科学部小幡研究室まで。また、Facebook 上にホームページを設け、活動についての記事を適宜掲載している。参照を願いたい。URL は以下の通り。　https://www.facebook.com/groups/404644176658001/

追記 1

「高知県内に公文書館がない」と記したが、その後、2020 年 4 月に高知県立公文書館が開館している。

追記 2

本稿執筆後、中山村が日露戦争に示した対応について、「高知県中山村における日露戦争戦没者―兵士の動向と地域の対応―」（『海南史学』第 57 号、2019 年）、「高知県中山村と日露戦争―地域の対応と帰還した兵士の動向―」（『高知人文社会科学研究』、2020 年）の二編を発表している。ご参照いただければ幸いである。

第２部　満洲の歴史を語り継ぐ

“残留邦人”の歴史はなぜ語り継がなければならないのか？

加藤聖文（国文学研究資料館准教授）

“中国残留孤児”といったことばも最近ではあまり聞かなくなりました。以前ですと、残留孤児のことを知りたい人には、「『大地の子』でも見れば」といえば良かったのですが、『大地の子』も知らない人が多くなり、またそれを見てもあまりにも今と時代がかけ離れていてわからないことだらけです。

今の中国ではすっかり見かけなくなった人民服や自転車通勤はともかく、“文革”のような政治的な大混乱になると複雑すぎて、どうしてあの人たちはあんなに騒いでいたのかも全く理解できません。30 年前ならわざわざ説明しなくても誰でも知っていた出来事が、わからなくなるほど今の社会は変化が早いです。

また、中国との往来も盛んになって、自由に行ったり来たりが当たり前の時代では、国交が無いとか帰りたくても帰れないといった話はピンときません。

しかも、私たちは、中国人と接することは日常的になって、珍しくもありません。そんななかで、中国から帰ってきた日本人が言葉や生活習慣の違いなどもあって、大変苦労をして生活してきたといわれてもイメージがわきません。

このようにちょっとした過去のことを伝えることが難しい時代に私たちは生きています。そうしたなかで、忘れ去られつつある残留邦人の歴史をなぜ語り継がねばならないのでしょうか？また、語り伝えることも、今なら体験者ご本人が語る姿を動画で記録して、興味のある人が好きな時間に視聴すればいいじゃないかという考えももっともです。

体験者から話を聞いた人が誰かに伝え、さらにその人が誰かに伝え…体験者の話を語り継いでいくことはなぜ大切なことなのでしょうか。

人はいろいろな体験をして、頭のなかに記憶を蓄積していきます。その記憶はプライベートなもので、本人にとってはどんなに特別なものであっても、他の人にとっては「フーン」といったものかもしれません。そして、本人が亡くなれば記憶も消えます。

ただ、本人（A さん）が記憶していたことを誰か（B さん）に語り、B さんが忘れずに記憶していればAさんはBさんの記憶のなかで生き続けます。さらに、BさんがCさんにAさんのことを語り、CさんがDさんに…と語り継いでいけばAさんはそれだけ生き続けます。
私たちが行っている語り部事業は、このように未来にわたって語り継がれていくことを目標としています。

残留邦人の方々の人生はそれぞれ重みがあります。重みのある話は、人に何かを考えさせます。残留邦人の体験は、戦争の悲惨さだけでなく、その戦争をもたらした原因、戦争に巻き込まれた時の人間の行動、激動の歴史を生き抜く力、日本と中国の歴史の結びつき、さらには、外国語を学ぶこと、異文化コミュニケーションの取り方、社会の多様性のあり方、などなど過去の歴史から現在そして未来の社会を考えるきっかけを与えてくれます。

さらに、誰かから話を聞いてその重みを感じたとき、私たちの心は昂ぶり、聞いた話を誰かに話したくなります。しかも、自分だけがその話を聞いたなら、その話を誰かに伝えなければという責任のようなものも生まれます。この何か伝えなければという気持ちが語り継ぐ力になります。不思議なことに、この語り継ぐ力は、体験者本人が語る映像以上に人の心を揺さぶることがあります。

語り部の方たちの語りを聞いて、何かを感じ、自分のこと、自分の周りのこと、自分の社会のことを考えて下さい。そして、聞いたことを誰かに語って下さい。そうしていただければ、残留孤児や残留婦人の方たちは私たちの社会のなかで生き続けます。

第１回満洲の歴史を語り継ぐ集いで講演する筆者
（2019 年 7 月、高知市立自由民権記念館）

祖母の命を語り継ぐ

山崎哲
（中国残留邦人等の体験と労苦を伝える戦後世代の語り部）

1. はじめに

私は現在、厚生労働省事業の「中国残留邦人等の体験と労苦を伝える戦後世代の語り部」として活動しています。語り部研修生募集の報道資料には次のように書かれています。（厚生労働省 HP https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000132537.html 2020 年 12 月 13 日アクセス）

> 戦後 70 年余りが経過し、戦中・戦後の労苦を体験した方々が高齢となる中、当時のことを語り継いでいくことが難しくなっています。このため、厚生労働省では、戦後世代の方々を対象に、当時の体験と労苦、思いなどを次の世代に伝えていく語り部の育成を開始します。

３年間の研修を経て私は現在、中国残留婦人であった祖母の経験を語っています。祖母の語りを行うと決めるまでには紆余曲折ありましたが、最終的に「祖母の語りを行うことは孫である私の使命だ」と思うようになりました。

2. 中国語を話す両親、日本語と中国語を話す祖母

幼い頃、私の両親は主に中国語を使って私に話しかけていました。一方、祖母は私に日本語で話してくれていましたが、私の両親と話す際には中国語を使っていました。子どもの頃はその意味がよくわかっていませんでしたが、それがなぜかを知りたいと思い立った大学入学前のある日、祖母が中国残留邦人だということを知りました。ただ、その時には「そうなんだ」と思っただけでした。その後、残留邦人に関する書物を読むことや関連するテレビ番組の視聴等を通じて、少しずつ祖母が経験してきたであろう歴史の輪郭がみえていきましたが、祖母自身に直接詳しく経験を聞くことはなく、私は資料を通じて間接的に祖母の経験を「こんな人生だったのだろう」と想像して過ごしていました。祖母の人生について興味関心がありながらも、いつか聞くことがあれば聞こうと先送りにしたまま時間が過ぎていったのです。

3. 研修への参加

そんな日々を送る中で、偶然「中国残留邦人等の体験と労苦を伝える戦後世代の語り部」募集のチラシを手に取りました。チラシに書かれた文字を一文字一文字読みながら、雷に打たれたような運命に近い感覚を覚えたことを今でもはっきりと覚えています。「中国残留邦人とはおばあちゃんのことではないか！この研修に参加して学びを増やす過程でおばあちゃんのこともよく理解できるはずだ、そして、きっとおばあちゃんに話を聞くこともできるだろう！」と興奮しながら応募を決意しました。この機会を絶対に逃してはいけない、なんとしても語り部になりたいという気持ちで、面接会場である「首都圏中国帰国者支援・交流センター」に着く

と、職員の方から「おばあさまにはお世話になりました。哲さんのことはよくお話されていましたよ」と声をかけられました。祖母は、このセンター（正確には前身の組織）で残留邦人の方々を対象に通訳を主として勤務していたのですが、祖母の存在を知る職員の方に会えたことが嬉しく、気持ちがさらに昂り、面接では「祖母の経験や残留邦人の方々の経験を三世として語っていきたい」とそれまで心に秘めていた思いを語りました。

4. 祖母の経験を語ると決めるまで

私たち研修生は研修を通じて、中国残留邦人の方々の話を聞いてきました。それぞれの方から語られる中国残留にまつわる想像を絶する経験は、家族を目の前で殺されたりなど、文字通り筆舌に尽くし難く、今後どのように私は語り継いでいけばいいのか考え続けていました。

研修を受ける中でも、私はいつか祖母にきちんと話を聞いてみたいという気持ちを持ち続けていました。「いつか、いつか」とタイミングが来たら祖母からまとまった形で戦争と中国残留経験について話を聞いてみようと思っていたのですが、研修期間中も、いつまでもそのきっかけをつかめずにいました。

研修の終盤、誰の経験を語るかを決めるタイミングにおいて、私は研修の当初にお話を伺った方の語りを行うことに決めました。その方の経験をもとに語りの原稿とスライドを作成し、先行発表会に臨みました。しかしこの間、私は心の奥でひとつの疑問を抱き続けていました。「祖母の経験を私は語らないのか」という疑問です。

上に書いたように、私はタイミングをつかめず、また、祖母に戦争と中国残留経験を聞くことが怖く、詳しい話をまとまった形で聞くことができずにいました。祖母に話を聞くことで、祖母のトラウマを呼び起こすことになるのではないかだろうか、私自身、祖母の苦難を聞くことに耐えられるだろうか、そういった気持ちが大きかったために、聞くことを躊躇っていたのです。しかし、高齢になった祖母に今聞かなければ、いずれ直接話を聞くことができなくなる日が来てしまうと思い、意を決して祖母に話を聞きに行きました。

5. 祖母の人生を聞き取る

祖母一家は 1939 年、福島から満洲に渡りました。しかし祖母は極寒の満洲に慣れず、その後日本へ帰国します。その後、1945 年 3 月に東京に大きな空襲があったことを知った曽祖父は「いよいよ日本も危ない」と、祖母をまた満洲に呼び寄せ、祖母は 15 歳になった 1945 年春に再渡満しました。祖母は 8 月のソ連参戦後の逃避行の末、瀋陽の日本人難民収容所にたどり着きましたが、そこから中国人家庭に預けられ、その後約 40 年を中国で生活することになります。祖母が日本へ永住帰国したのは、1983 年のことでした。私の両親は中国で結婚して祖母の永住帰国に合わせて日本に移住し、1985 年に私は日本で生まれました。両親は日々暮らしていくための仕事に忙しく、なかなか日本語を覚える時間がありませんでした。そのため、私が幼い頃は私に対して中国語を使っていました。祖母は再渡満したとき 15 歳だったため、永住帰国後に日本語を思い出せたことで私には日本語を使って話をする一方、私の両親とは中国語を使って会話していたのです。幼い頃に漠然と抱いていた疑問が祖母の人生を聞き取るこ

とによって氷解した私は、食い入るように祖母の話を聞き続けました。そして、祖母がもしかしたら何かのタイミングで逃避行中に命を落としていたかもしれないということに、また、祖母の人生が確かに今の私に繋がっていることに私はただただ圧倒されていました。

話を聞き、私は語りの対象を祖母にしたいということをセンター職員の方に相談にいきました。すると、「なぜおばあさまの話をしないのだろうと思っていましたよ。私たちもおばあさまの人生は詳しくは聞いたことがなかったのです。三世の哲さんだからできる語りを楽しみにしています」と言われ、私は祖母の語りをすることに決めました。

6. おわりに

祖母の経験について原稿をまとめ終わり、間も無く語り部としてデビューという今年 2020 年 7 月、祖母は 90 歳で他界しました。今際のきわ、祖母は肩で絶え絶えの呼吸をしながら、父には中国語で、私には日本語で絞り出すように言葉を発してくれました。祖母が鬼籍に入り、私はいよいよ語りへの思いを強くしています。

現在、私は中国残留婦人であった祖母の経験を語っています。ありがたいことに、すでに 2 度の機会をいただき、語りを行うことができました。語りを行う際私は、「中国残留邦人のことをこれからも覚えておいて欲しい」という思いを持って臨んでいます。1980 年代、新聞やテレビによって中国残留邦人について広く報道されましたが、現在ではほとんどみられなくなりました。報道のその後も、中国残留邦人やその家族が今でも生きているということを、どうか、忘れずにいてほしいという気持ちで語りを行っています。

私が祖母の経験を語り継ぎたいと思ったのは、自分が語り継がねば祖母の経験が誰にも触れられず忘れ去られてしまう、それはひいては、中国残留邦人の方々の経験も今後多くの人々から忘却されていくという恐れからです。中国残留邦人は同じ戦争の話として語られはしますが、沖縄や広島、長崎などとは異なり、中国残留邦人の過去は毎年同じ日付に思い起こされることはありません。誰かが中国残留邦人の経験を語り継がねば、その記憶は確実に風化し忘却されていきます。社会から中国残留邦人の記憶が少しずつ消え去ろうとするなかで、私は経験者の孫として祖母や中国残留邦人の方々の記憶を語り継ぐことが使命だと思うに至りました。この気持ちをこれからも心に強く刻み続け、語りを続けていきたいと思います。

語り継ぐ活動への思い

崎山ひろみ（満洲の歴史を語り継ぐ高知の会副会長）

1945 年 8 月 15 日満洲で敗戦を迎えた日本人が約 155 万人。「在満日本人はそのまま土着せよ。」「日本国籍を離るるも支障なきものとす」との日本政府からの指示で、飢え、伝染病、厳しい寒さによる凍死などで約 25 万人の死者や 1 万人以上の残留婦人や孤児の悲劇を生んだのです。翌年 5 月頃から引き揚げが始まり、秋が深まるころまでに葫蘆島港から約 105 万人が帰国してきました。その苦難の日々のことや開拓団の人たちの過酷で悲惨の逃避行のことなどの話を、多くの方が 1 度は聞かれたことがあると思います。

しかし、満洲で暮らしていた日本人が敗戦後どうしてこのような体験をすることになったのか、満洲国の成立の歴史や中国、中国人への加害の歴史も学ばなければ理解できないと思います。また、日本政府の満蒙開拓の方針に始まる、開拓団送出も大きな悲劇を生む原因となっています。

8 月 9 日、多くのマスコミで長崎の原爆投下のことは語られていますが、その日の未明満洲でソ連侵攻により開拓団をはじめ多くの日本人の苦難の逃避行が始まったことは語られません。日本の、太平洋戦争での犠牲者は軍民で 310 万人といわれていますが、中国は 1000 万人以上の死者を出しています。体験者がいなくなると、これらの歴史がなかったことにされるのではないかと懸念しているのです。

日本の現在の教科書ではそのような歴史はほとんど教えられていません。江戸時代、明治時代は詳しく習っても、近現代は簡単に通り過ぎてしまうようです。外国との交流が盛んになっている現代、外国、特にアジアの歴史を詳しく知っておくことはたいへん大事なことではないでしょうか。

満洲を体験してきた人たちは高齢になり、語ることのできる人がごく少なくなりました。それで 2018 年に「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」を立ち上げ、語り継ぐ活動をしてくださる方に、満洲の歴史や様々な実態を学んでいただき、後世へつないでほしいと思っているのです。

旧満洲で敗戦を迎えて 75 年。葫蘆島から引き揚げてきて 74 年が経ちました。アジアの人々とともに平和に交流していけるように、そして再び同じ轍を踏まないようにと願っています。

第 1 回満洲の歴史を語り継ぐ集いで体験談を話す筆者(2019 年 7 月、高知市立自由民権記念館)

満洲聞き取りの会の記録
「満洲で看護婦として生きた（高橋猪利)」

文字起こし：楠瀬慶太

2013 年から満州引揚げ者の崎山ひろみさん（満洲の歴史を語り継ぐ高知の会・副会長）や高知県立高知城歴史博物館の渡部淳館長らが定期的に続けている高知在住の満州引揚げ者への聞き取りの会。2020 年までに約 60 人に聞き取りを行い、音声と映像データで満州での体験の証言を記録している（高知城歴史博物館でデータ保管)。こうしたデータは、満洲での体験を語り継いでいくために欠かせないものだが、今後の活用のためには証言の資料化（文字起こし）と映像データの編集作業が必要である。この作業はまだほとんど行えていないが今後少しずつ作業を進めていく鏑矢とするため、今回 2015 年 2 月 23 日に聞き取り（18 人目）を行った故高橋猪利さん（大正 9 年生）の証言を文字起こしした。高橋さんは土佐市出身。20 代で満洲へ渡り、林口陸軍病院に看護婦として勤務し、戦後も八路軍に従軍し、昭和 28 年に帰国している。「満洲で看護婦として生きた」高橋さんの貴重な証言を以下に資料として記す。

第 18 回　満洲聞き取りの会の記録（2015 年 2 月 23 日）

（話し手：高橋猪利、聞き手：渡部淳、崎山ひろみ、中村茂生、於：高知市の高橋さん自宅）

渡部：さっそくですけど、お生まれからお聞きしてかまいませんか？

高橋：高岡郡戸波村の市野々（いちのの)、田舎のほんと山裾で生まれました。生まれてすぐ母を失って全然母を知りませんのでね。父方の祖父母が育ててくれたそうです。

渡部：何年の生まれですか？

崎山：お名前を？

高橋：名前は高橋猪利 (いとし)。昔の人、おばあさんは文字を知らない。学校がなかった時代でね。出生届け、「いとしです」と言っていたもんで。その時いいかげんな名前付けたもんよ。いのししの「猪」に、りえきの「利」。皆が男と間違える。みんなあが「いりさん」かよ、「はい」って言うて。あんまりかわいそうだから「いとし」とつけたんでしょうかね。みんなが「いのさん」「いりさん」「いのりさん」やら色々いうからね。「いとし」と書きます。（生まれ）大正 9 年 1 月 7 日です。

渡部：おじいさんおばあさんに育てられて？

高橋：父方の祖父母に育てられて。

渡部：地元の小学校ですか？

高橋：戸波尋常小学校 6 年、高等小学校 2 年、百姓を教える公民科というのもありまして、そこへ 1 年。全部で 9 年くらい、祖父母に助けてもらいましたね。

渡部：公民科を出られて。

高橋：公民科というのは、女はお裁縫とかね、そんなもんでね。行こうとやめようと義務教育ではないからね。

渡部：男子は百姓？

高橋：あそこは戸波谷三里と申しましてね。広い土地で生徒数が多かったですね

中村：高等小学校と同じ建物の中に公民科も？

高橋：女はお裁縫が一部屋あって。習いたければそこへ行くとか。割と自由でした。６年を過ぎた後はね。

渡部：それを終えられてどうされた？

高橋：私のいとこが郵便局の局長さん。今そこの森なんとかいう病院がある所のいとこが女中さんに行く約束してて、病気になりましてね。私学校出て「半年ちっと病気が治るまでお手伝いにいってや」と。そうしたりしているうちに。叔母が高知におりましてね。父が樺太へ出稼ぎに行ってまして。田舎は全然、なんていうのかな、職がないわけですよ。大きなお百姓だったら自分の田んぼや畑でできますけど。小作人っていうたら、少しぐらいのお米作っても生活できないのでね。だいたい男の人は出稼ぎが多かったですね。私も幼い頃だからそういうところがよく分からなくて。父が帰ってきてこれがお父さん言われたのが 21 歳でした。

渡部：そうなんですか。

高橋：ほんとに。だから父と一緒に暮らしたということはなかったですね。その時私は仕事に就いてましたからね。須崎の病院におりましたらからね。たまの日曜に帰ったら、育ててくれたおじいさん、おばあさんには、自分が休みの日には。あの頃交通の機関がなかったですからね。須崎から吾桑までは汽車がありましたけどね。それから後、戸波からまでがてくてくなんですよ。そやって帰って、そこから戸波へ帰って。中風（ちゅうぶ）で寝てるおじいさんを出して日なたへ出して髭を剃って。それが私の仕事でした。

渡部：病院では看護婦を？

高橋：看護婦の見習いを３年やらないと。資格がないわけよね。実務３年して。学校があったら学校出れるけど、戸波なんかには看護師学校ってその当時無かったですからね。病院で３年実習みたいなことをして。それも当時の赤本というて、井口乗海先生の書かれた本で、それで勉強をして。高知県の検定試験を受けて、やっとこさ看護婦に。それもなかなか。大きな病院で、「さんぼう学校」というのが高知にはありましたからね。そういう面では。戸波から高知まで通うということも、お金の面も、時間の面もあってね。だから結局自習みたいなことですね。なかなか看護婦の試験も、やっととりまして（えっへっへ）。今の高陵病院、あれば昔昭和病院と言いよりましたがね。そこで３年くらいおりまして。なんかね、あの頃、日本が戦争のあれもあって、満州事変だとか色々ありました時にね。なんかな。やっぱり今は知りませんけど、田舎っていうのは財産のあれによってね。結婚でも仕事でもお金持ちの人はなりやすいけど。貧乏人はどういても落ちこぼれていくからね。やっぱり女中さんばっかりしよってもおじいさん、おばあさんに私ご恩返しができないから、「なんぞ手に職を」と思ったんでしょうね（えっへっへ）。ある日友達がね。「いとやん。須崎の病院で見習い看護婦を募集してるけんどいてみん」と言われて。「そりゃ良いね」と。高陵病院ですけどね。そこでやっと拾ってもらいましてね。そこで勉強して、勉強いうても自習ですけどね。県の検定試験を２回目にやっと（えっへっへ）取りまして。そのうち育ててくれた祖父母も亡くなりましてね。私もいっつもこんなとこにおるよりも、その頃は戦争で満州事変なんかを聞くと、寒いところで兵隊さんが苦労しているなら、そんなところで働けるなら行ってもいいやという気持ちもありまして。それまで色々。神戸の病院にもおりましたけどね。友達が･･･（えっへっへ）。

中村：そうなんですか。

高橋：鈴木さんという友達が林口陸軍病院の婦長さんとお知り合いでして。その婦長さんが、当時衛生兵さんが南へ付いていかれる、そこに看護の手が薄くなるからと、看護婦の募集に来られたんですね。その時、私神戸におりましたとき、鈴木さんという看護婦さん、知っている看護婦さん募集に来てるが、そしたらあたしと、瀬戸ともう一人おりまして。その３人が「行こう」ってね。ただあこがれみたいなのもあったかもしれませんけどね。その瀬戸さんという人がとっても素晴らしい人でしてね。瀬戸と私と鈴木という 3 人で林口陸軍病院

に行きました。

中村：鈴木さんと瀬戸さんは高知の人ではなくて？

高橋：鈴木さんは愛媛の人でして、瀬戸さんは福井県の人。それが神戸の病院で一緒に働いていたわけね。そこで鈴木さんを知ってる婦長さんが募集に来て。「行こうよ」いうて。そん時は生意気なこと思いますよね、「働きがいのあるところで」と。日本におったら、結核が多かったですからね。結核療養所なんかに私たちおりまして。「満州行こう」って 3 人が行きました。行ってすんぐに、鈴木が。一番元気でお口がたっしゃで、その人がリーダーというか。チブスになって死んじゃった。それが不思議なことに、私と瀬戸が伝染病棟勤務。内科勤務の鈴木さんがチブスになっちゃった。初め「あらっ風邪引いた」、「熱がある言っているうちに亡くなちゃったんですよ。本当一番頼りにしていた人が亡くなってしまいましてね。でもそりゃ今更ね。私は遺骨を持って神戸に帰って連隊司令部におさめて、また林口に帰って。その時一緒に遺骨列車の中に、私の働いてた林口陸軍病院事務に誰やらいう「ほんちょう」さんいう人。その人は兵隊さんの遺骨、私は鈴木さんの遺骨を持って連隊司令部へ、あれは大阪じゃったかへ渡して。また林口に帰りましてね。そのうちに今度瀬戸さんが結核になって。私は一人ぼっちになりました、いっぱい泣きました（あっはっは）。

中村：林口陸軍病院に行かれたのおいくつだったんですか？

高橋：えっとね、22 か 23。父が怒って「23 にもなってからそんな所行って」と怒られましたけどね。「知るか」って。

渡部：それは昭和？

高橋：昭和 17 年ごろだったと思います。

渡部：もう戦争も内地じゃだんだん厳しくなって。

高橋：働きがいもないけど。そういうふうに思ったんでしょうね。

渡部：瀬戸さんも結核でなくなった？

高橋：瀬戸さんはね。ずっと年とって 40 年目に会いました。瀬戸さんは旅順の、こうそう（ママ）、こうそう（ママ）で送られて、旅順の陸軍病院で、ある婦長さんと同じ病気で、松本さんっていう婦長さんと、うんとこう、きょうだいみたいになりましてね。その人の古里のあれは何県じゃったかしら。そこで婦長さんはある大きな会社の医務室に勤務して、瀬戸さんも助手みたいなことして暮らしてましてね。松本さんと瀬戸さんが 2 人で働いて小さなおうちを建てて、松本さんの甥さんがそのお家をほしくて。山の施設へ建てて。その詳しい事情は瀬戸さんのあらかたのあれですけどね。とっても山の中で。「私が行く」って言ったら、「来てもダメ、泊まる所もないよ」。1 日 1 回その山の中の病院の車が買物に出るだけの山の中だから。「来たらダメ」って私を行かせなかったですね。だから相当山の中の施設だって。そこで松本さんが亡くなっちゃって。泣き虫の瀬戸さんがひっとり残りましてね。かわいそうでしたけど。

（戦後）林口陸軍病院にいた兵隊たちが集まる会の一番最初が、京都の大きなホテルで。そこで 40 年ぶりに会えて、生き残りがスクラム組んで踊った。からかみをばったんひっくり返すぐらいうれしかったです。本当に。生きて会えました。ほんで汽車が京都の駅につくと、高い所ですよね。昔の衛生兵さんが 588 会いうて大きな旗を立てて待っていてくれたんですよ。「ああ生きてたか」って（元）兵隊さんが。その頃、兵隊さんいうても召集兵でしょう。私たちが 24・25 とか 26 歳、若い人はみな。37、38 ぐらいの。お兄さんいうかおじさんくらい。東京の人が多かった。「生きておったか」言うて。そこでまたワーって泣き出して。それからタクシーの中でワーワー泣きながらホテルに行って。その時は 100 人近く集まりましたからね。88 人いうたか。本当

にもう生きていたかいうぐらいの、みんなあが戦争すんでから散らばりましたでしょう。だから生きてた人、死んでた人、本当にそれは色々ありました。

渡部：林口陸軍病院は結構大きかったんですか？

高橋：林口はわりと。あの頃、階級がありましてね。１等とか２等とか。ハルピンなんか大きなところは１等。林口は２等のＡいうたか。患者数は千人くらいは収容できる。部隊長が大佐、少佐か。それも階級があったんでしょうね。患者さんも千人近く収容できる大きな病院。ずっーと中央廊下がずっーと。玄関から入ってきたら、伝染病棟へ少しあがるように向こうの人が誰か分からないくらい大きな病院でした。そこで伝染病棟は一番上でした。１人は内科勤務。私と瀬戸２人が伝染勤務になって。内科勤務の人（鈴木さん）がチブスになっちゃって。瀬戸さんが胸が悪くなって。泣き虫の弱虫の。

中村：帰られたんですね。

高橋：その瀬戸さんとは（戦後）40 年ぶりに会えました。瀬戸っていう人は心の美しい人。「青空の清き姿を焦がれつつにごりの中に我今日もいく」。有名な人がね。あれはどこの海で唄った歌か。その人（瀬戸さんが）が好きでね。私教えてもらいました。本当に美しい心の人やって。胸を悪くして転々と日本へ帰ってきました。私一人ぼっちになりました。

渡部：病院の患者さんというのは？

高橋：兵隊、兵隊ばっかり。

渡部：この近辺の人、林口？

高橋：そうそう、あの近辺は基地みたいなのがあって。勃利（ぼつり）の方へ行ったら航空隊がありましてね。そっから患者さんが送られてくるわけですね。割とあの頃は伝染病が多くてね、向こうは。

渡部：そうですか。

高橋：というのがやっぱり、演習なんかすると、夜中草むらを這い回ったりするとね。その頃、今よく言われている体から出血するなにやら病気が、あれとおんなじ病気がね。軍医殿。あの頃、軍医殿、婦長殿でしたからね。その頃の私たちの伝染病の軍医殿と、試験室の診察もしてくれる 2 人軍医さんがおいでましたがね。その人達がなんぼ調べても出血熱が分かりませいでね。林口性出血熱という名前になりましたがね。草むらで寝たりすると、するとそこに虫なんかに刺されて、そういう病気になったんじゃないかと軍医さんたちは、なんぼ調べてもね。原因なんかは分からなかったんじゃないでしょうかね。

渡部：手の施しようがなかったわけですか。

高橋：結局ね。今みたいに点滴なんかは何十年も（後のこと）。手当てするっていうたらリンゲルいうて。食塩水、リンゲルでざくって行くんですよ。大きな針で。なんぼきっちと縛ってもずうっーと出血する。それにかかったら、本当に体温がずっと下がっていって。出血熱になったらもう仕方なかったですね。

中村：かなり致死率は高い病気だった？

高橋：そうですね。その代わりたくさんはなかったですけどね。演習があると、怖いねと用意しました。ベットとか。その時は病室に入りきらないと、お風呂までのけてベット用意したりし、そういうこともありました。割と伝染病棟という所は忙しかった。チブスが多かったですからね。衛生面でも軍隊自体そのものが集団でしょう。一人が移ったら、ばっとひろがって。

中村：一番怖ろしいのはチブスですか？

高橋：ジフテリ（ア）もありましたからね。ジフテリって子供の病気だけじゃないなと。２人ほど亡くなって

びっくりしましたがね。だいだいチブスかとか、赤痢。赤痢が多かった。これは大変でしたね。私たちから見たら本当におじさんいうたらあれやけど、衛生兵も召集されて。３カ月の教育は受けたでしょうけど、３カ月じゃちょっとね。色んな点で。まあこの人らも大きな会社の重役さんだった人も二等兵になって、おトイレを担いでるんだと思うような感じでした。おそらく 37、38 いうたら立派な社会的な立派な人もいっぱいいらっしゃったんじゃないでしょうか。絵描きさんなんかでもね。ていでんですか。ごうかすらさっとっと聞いて。面白がって「描いて」言うて。そしたら扇へぱーと描いてくれた。それが大事にしてたのに･･･（無くなった？）。うん、うん。

中村：そうなんですか。

渡部：うちの祖父が召集されたのが、やっぱり 38 歳くらいで。ハイラルに行きました。村の人達がこんなおじさんが召集され始めたら、もう日本は無理じゃねと。

高橋:そうですね。会社なら重役さんがおトイレを担いで捨てに行ったりしていると思ったら気の毒でしたね。そうだと思います。

渡部：陸軍病院である程度よくなれば。原隊へ戻るわけですね。

高橋：普通の病棟でしたら体が元気になったら退院、原隊に帰れますけどね。伝染病となったら、やっぱり胆汁の中に菌がどうしても残る人がいるんですよ。なかなかそれがね、看護婦もしんどいけど、患者さんもしんどい。いっつも胆汁を引き出しては調べられる。それがなかなか取りにくいんですよ。A 胆汁、B 胆汁、C 胆汁と分けられるんですけどね。B っていうのは胆嚢の出口までいかないと取れないでしょう。そんなこともいっぱい思い出にあります。大変。色々やりました。

渡部：そこは軍医というのは何人ぐらいおられる？

高橋：軍医殿は、病院によって変わるでしょうけども。うちは、伝染病棟だけの軍医さんが一人と試験室の軍医さんが手伝ってくださるので。伝染病棟は 2 人でしたけども、外科もありますし、内科もどっさりありますでしょう。看護婦も勤務交代というのはありましたけどね。慢性伝染病と急性伝染病がある。慢性いうたら結核性のものが多いですから。伝染病棟勤務しだしたら、勤務交代があるって伝染病は嫌という人もいますわね。「変えてやるか」（言われたけど）、「私伝染がえい」言うて。「だって点呼の時軍医さんが怖がってこんも」言うて。点呼でずっと回る時、直立不動で「異常ありません」って言わないかん。兵隊さんと一緒やったら兵隊さんが言うてくれるけんど、兵隊さんが当番じゃなかったら（自分が）言わないかん。いちいち、いじくその悪い軍医さんがおって「どういう食事を取っているか」とか聞かれてね。「うるさい」「知らんわ」って。だから伝染病棟はよその軍医さん（は）怖いですよ、やっぱり。そこの軍医さんじゃったら、「ふんふん分かっちゅう」で回ってくださるけどね。よその外科なんかじゃ「この患者は何たら・・」なんて言われたらね。そんなことでね。

崎山：よく高橋さんうつらんかったことね？

高橋：つらかったこと？

崎山：伝染病にならなかった？

高橋：それが不思議に。一人だけジフテリになったんですかね。腸チブスなんかはお便の中しか菌が出ないからね。伝染病棟で伝染病になったのはジフテリで一人亡くなったのだけです。看護婦は。

崎山：すごいね。やっぱり用心してたんでしょうね。

高橋：かえって伝染病の方がね、ちゃんと予防がね。予防衣を付けて、何をつけて、シュッシュッとやって薬

で。出るにも入るにもそういうふうな昇汞水とか、いくつも手を洗って、そういうところは。

渡部：警戒していたんですね。

高橋：予防衣も、ちゃんと消毒した予防衣がつるしてありましたからね。そういう点を気をつければ。けんど伝染病言うたら汚い言うてね。お昼のご飯の時、みんながあけたらね。よその看護婦はね。「いや伝染がきちゅう」って。

一同：あっはっは。

高橋：「いかんかね」ってみんなで怒ってね。「いつまでも座っちゅう」。そんなことで冗談言いましたけどね。伝染は嫌われましたけどね。実際勤務していると楽なんです。軍医が入ってこないから。うちの軍医さんは「あれどうな」言われたら、「先生こうです」言えるけど。その（別の科の）軍医さんの、意地の悪い人から言われたら嫌でしょう。勤務交代で「伝染でいいです、婦長殿」言うて。

渡部：看護婦とかは寮なんかがあるんですか？

高橋：はい。官舎。20 分ぐらいはかかりましたね。軍医さんらも一緒じゃないけど、官舎が近いですからね。一緒に朝出勤するとき、冗談言いながら。それから花が咲くんですよ。春は。本当に。迎春花（いんちゅんほあ）っていうでしょう。迎春花と書いて。「迎春花が咲いたなら、お嫁に行きます」っていう歌があの頃はやりましてね。

崎山：わんさん待っててちょうだいね。

高橋：わんさん待っててちょうだいね。っていう。迎春花が咲き始めたらね、だんだん暖かくなると背が高くなりましてね。その花がお花畑。全部が。ほんとにね。ヒメユリの花とか色々、ちょっとそこらへん、いっぱいね。それ持って行って患者さんの枕辺にするぐらい。あの頃のあれはどんなんだろうね。畑になったんでしょうかね。その頃は日本が取ってたんでしょうね。中国の人一人も見かけませんでしたから。街へ出れば、その代わり中国の人だからなんだか怖いですよね。言葉も分からないし。だから街へ出るということなかったです。普通は軍の販売所があって何でもそこで、衣服でも食べ物でも買えましたからね。街へ降りるというたら、本屋さん行くぐらいで。２、３回ぐらいしか。怖いんですよ。

中村：街の本屋さんに行くと、日本語の本あるんですか。

高橋：それは日本人がやってたの。だから本はそこへ買いに行きましたね。

中村：街にも日本人はかなり？

高橋：おったんでしょうけどね。一般的に言えば少ないですよね。中国人いっぱいおる中で、言葉が分からないと怖いですよ。

渡部：じゃあほとんど病院の中でということで。

高橋：そうです。官舎と病院の往復だけ。だから軍医さんなんかと一緒に朝出勤していくんですわね。大阪の中尉殿ですけどね。色々病院の話が先生との間で出ますわね。「先生あの甘いのがでる、嫌ですね」と言うたら、「そんなことあるか、おれらあ 2 杯目から、３杯目からうもうなる」。「先生そんなこと言いよったら糖尿病になるわ」って言いよったら、本当に糖尿病になって。

渡部：軍医殿と看護婦はみんなで。

高橋：宿舎は違いますけど、一緒に歩いて病院まで行ったり。

渡部：病棟は、患者さんは階級によって部屋がちがう？

高橋：いやいや、階級はなしですね。中央廊下がずっとこういうふうに、一番上が伝染病棟。一番初めが事務

室とか機密室とかがありまして、磨工（まこう）室いうて医療機械を作ったり、修理したり。日本におる召集前、そういう会社で働いていた人なんか。止血鉗子のコヘルとかペヤンとかも上手に作ってました。慣れてて「はさみ作ってや」っていうたら（作って）。すごい。今でも娘が持っていると思うけど、素晴らしい。その人本当に上手でした。

中村：まこう室？どんな字です？磨くですかね。

高橋：磨は研磨の「ま」でしょうかね。

渡部：内地の時にいろんな技術がある人が分けられる。

高橋：歯医者なんかでは、歯医者で働いてた看護婦がそこへ行った。言われたらすぐできるしね。私なんか歯医者なんて言われても知らないからね。

中村：歯医者さんもあったんですか？

高橋：神戸の軍医さんでした。戦後にみんなでお会いした。戦友会で。

渡部：軍医は士官ですか？

高橋：大尉どのは一人で。あとはたいてい中尉とか少尉でしたね。元々お医者さんですから、軍隊で３カ月やったら、少尉殿、中尉殿になっておいでるんですね。

渡部：磨工室で働いているのは兵隊？

高橋：兵隊さんですね。

渡部：独特の世界ですね。

高橋：社会の重役さんからがウンチ（の処理）をやってると思うと気の毒でね。

渡部：あんまり若い兵はいなかったですかね。

高橋：若い人は南へ取られましたね。補充が看護婦と年取った、割とこんな人というようなね、気の毒なくらい。社会にいたら立派なお仕事なさってるんだろうという人じゃないんですかね。その方は何にもおっしゃらなくても分かりますよね。

渡部：兵隊で千人くらいの患者がいるというたら、かなり伝染病とかいう（人が多かった）？

高橋：私は４年間ずっと伝染病病棟でしたからね。そりゃ、結核もおりましたけど、チブスとか、赤痢とか、ジフテリとか、一番チブスですね。

崎山：チブスは野ねずみがノミを持ってるでしょ。それがチブスを持っていて。初めてお聞きしていたら。まこと原野。ほふく前進したら、ネズミもおるわね。

高橋：夜間で、虫がいっぱいいたりもするんでしょうかね。

渡部：伝染病棟から原隊に帰るのが基本ですか？

高橋：わりと多かったですよ。普通なら元気になったら帰れるけど、便とか血液とかちゃんと検査して、菌がマイナスだったら、原隊復帰ができるんですけどね。胆汁にまで入りこんだら本当に気の毒で。ゾンデいうてゴム管をこう呑んで、そこのちょうど胆汁の出るところまでいった時、それがなかなか目印はあるけど出ないから。患者さんも大変だけど、取る方も嫌なんですよ。「またうどんか」って兵隊さん言いよった。「またか」って。

崎山：胆汁に菌が残るって初めて聞いた。

高橋：たくさんはいなかったけど、たまにそういう人がいるとなかなか取れない。直接に効く薬ないんですもの。

中村：チブスで入院すると、良くなったらどれくらいで退院できるんですか？

高橋：看護婦になるときに、チブスの熱系とか経過を勉強しますはね。「いやほんとにそうだ」ということがたくさんもありました。階段上に上昇し、１ないし２週間くらいは係留というたら、熱が上がったり下がったりよけしないんですね。また階段上に下がってきて治る。だから熱系見てて、いやこの人はそろそろ熱が動き出す頃やなと思っても、動き出さなかったら危ない。ずうっと何十人もの熱系を見てたらね。口には出さなくても、いやこの人ちょっと熱がという思いがありましたね。普通の病気でしたら、熱の上にプルス（脈）が 120 きたいうたらぐっと上がるでしょう。熱が青で、プルスが赤で、赤が上になると怖いですね。「いやっ、この人」と思いますね。熱系見ただけで、ちょっとこれと。私の一緒にいた看護婦が、内科勤務で腸チブスになった時もこりゃ困った。宿舎に電話が掛かってきたんですよ。「腸出血した」って当直から。軍医殿と私と瀬戸、婦長殿の４人が、真夜中に月が煌々というのはあのこと、遮るもの一つ無い荒野ですからね。それを防寒帽に防寒靴はいて、４人がごとごと歩いて病院行きました。いったらすぐ脳症起こして。「私今汽車で帰りゆうで」言うて汽車に揺られているんですよ。鈴木っていう看護婦が。「あー」と思いましたね。私は鈴木の遺骨を持って帰ってきた。

渡部：亡くなった人は陸軍病院の中で火葬する施設があるんですか。

高橋：一人は看護婦で、焼いたことある。それは本当にね。山形県の二人連れで来た。高橋愛子っていうの。最後結核になったけど。一緒に来た押野さんっていう人が。山形弁で「おらが」って。「おら（って）言われん」。そんなかわいらしいっていう感じの人。愛ちゃんっていう高橋愛子ちゃんが亡くなって、みんなで焼きました時に、おっちゃん（押野さん）が「愛ちゃん、愛ちゃん」って泣きますわね。それが忘れられない。たいていはどんなに、患者さんが亡くなった時どういう処理をしたか知りませんでしたからね。愛ちゃんの時は、山へ持っていって焼いたからね、おっちゃんが泣いたからね。

崎山：野っ原で？

高橋：中国は山というより丘が連なって、丘の上の砂地で焼きました。あれはどういう風に、兵隊さんが組んでたんでしょうかね。組んでいてその上に置いたんでしょうかね。

崎山：火葬場はなかった？

高橋：亡くなる人は多かったけど、どういう風にしてたかなと。私たちは屍室（しかばねしつ）という所へ連れて行ったら、後は兵隊さんがしてたからね。そこまでは分からないですけどね。夜勤をしてても、屍室がすっと見えるとなんだか怖い。そこを通らないと、こっちの病棟へいけない。こっちが慢性伝染病、こっちが急性伝染病、こっちに大きな消毒釜がありまして、そこを回っていかないとこっちの病棟へ行けない。その外が屍室なんです。そこ通るのがうんと怖かったですね。怖いと言われんけどね。

渡部：軍医、看護婦、兵隊、全部で何人くらいいましたか？

高橋：先帰った戦友が写真を送ってくれたのもあります。･･･ないね、どっかにしもうてますけどね。だいたい紙切れ一つ持って帰れませんでしたからね。だから、後のことは、戦争終わる前に帰ってきた友達が、写真とかは送ってくれましたね。何にもないですからね。

渡部：軍医殿と兵隊と、看護婦も従軍の看護婦ですから、お互い戦友になるわけですか？

高橋：戦友会ですね。

崎山：死んだら靖国へって言われませんでした？

高橋：（あっはは）。滝口慎太郎さんという俳優さんご存じですか？あの人ソ連に行ったでしょう？ソ連へ行っ

て女優さんと結婚して。「将軍と参謀と兵」という映画があったの。兵隊さんの役をやった人がうちの病院にいて、慰問の写真で来たんですよ。（手を叩いて笑う）。うんうん、そういうこともありましたね。

崎山：まこと慰問に色んな有名な人が来てましたもんね。

高橋：滝口さんはソ連へ兵隊として連れて行かれて、そこで越行した女優さんがいましたもんね。結婚なさったんですって。

崎山：えっ、岡田嘉子？

高橋：そうよそうよ。竹内良一（実際は杉本良吉）なんとかと越境して逃げたんですよね。

崎山：別れさせられたからね。別のとこに収容したからね。

高橋：その人とソ連で一緒になって結婚なさったって。その後はね、東京へも帰っておいでてましたよ、ご夫婦で。戦友会でも「会いたかったらきたらえいで」って言いよった。

崎山：昔昔の話やね。

高橋：滝口さんは有名な俳優さんだから、軍医殿なんかにも大事にされたでしょう。

渡部：病院の敷地には、娯楽施設みたいのもあるんですか？

高橋：娯楽なんかはないけど、慰問の人なんかがきたら、かたづけて境を取ったりして広場を作りましたね。映画をやったりね。

渡部：一般の連隊なんかでは酒保とかああいう感じで。

高橋：酒保は地下にありましたでしょう。兵隊さんたちが行く。私が初めて兵隊さんと夜勤したとき。「おい」。私村田。私は旧姓村田。「おい村田」「今頃ピーヤのまさやって知ってるか」「知らんよ」。それがほら、女性をあれする、なんていうんかね。ピーヤって、朝鮮で問題になっていることあるでしょ。女性、ピーヤと言ったんです。慰安所。それがどうも今のあれですね。なんだそれと思いましたけどね。それが今のあれ（慰安所）ですね。

中村：林口にも（慰安所が）あったんでしょうか？

高橋：どっかにあったんでしょうね。えらい人は日本人だけ、普通は朝鮮の女の人もいたという分け方と今思います。将校さんのえらい人なら特別にそういうところがあったかもしれません。

渡部：病院には近くの連隊から視察に来るとかそういうことありました？

高橋：ありました。通信隊 725 部隊。634 部隊いうたら和歌山の県の人が多かった。周囲をこう守るのに、1時間ぐらいかかるぐらい大きな部隊でした。そこは歩兵でしたけど。通信隊もありましたし、山砲もありました。山砲の兵隊さんいうたら、山の上に大砲を引っ張って上げないかん。屈強な人ばっかりでした。

渡部：ここらへんにかなりの部隊がいたんですね。

高橋：そうですね。林口は。ほとんど私中国の人見る事ない。全部官舎とか部隊とか。

崎山：牡丹江が大きな軍都で、もう少し行ったら 44 連隊なんかいた虎林（コリン）、桂木斯（ジャムス）。その辺は国境へすっと行けるようなね、軍隊がよけいたね。

高橋：戦争始まったらどんどん北へ行きましたからね。ソ連の国境から、毎晩照明弾がバーンって上がる。青の弾が上がったら、何って分かってたんでしょう。バーンと上がるんですよ。戦争に敗けて自分たちが３日、４日歩いて、夜は山で寝て、捕虜収容所くるまでに、小さな横の道をジープで、赤いマフラーをかぶった女の兵隊ばっかりなの。女の人

渡部：林口行くまではどのルートで？

高橋：朝鮮の釜山から、国境の延吉。安東の方へは行かずにこっちから行ったね。牡丹江から林口へ。だから最後は林口の患者も牡丹江に送りましたからね。

渡部：休みとかに牡丹江、桂木斯とか行かれたことありますか。

高橋：患者護送で。めったに行ったことない。１回だけ。だいたい兵隊さんが行きますからね。

渡部：公務で行ったくらいですね。遊びという感じではないですね。

高橋：そうですね。けどね、山には蕨を取りにいったりしましたね。官舎から。

渡部：休みは交代制で、週に１回か２回？

高橋：そうです。官舎当番というて、昼は病院で食べますけど、帰ってきたら看護婦みんなが食べるご飯を作るのが官舎当番ですね。私みたいに看護婦ばっかりやっていると、ご飯が作れない。焼きナスばっかり作って食べさせました。天ぷらか。それを婦長殿が面白がってね。藤崎っていう看護婦がものすごくのんきな人でね。婦長さんはあだ名を付けるのが上手でね。「あれなめくじみたいなき、なめ」って。「なめ」って言うたら「あいっ」て言うぐらいの。（婦長さんが）「帰るぞ、みんな集合。なめが天ぷら揚げて待ちゆう」言うて、「ただいま」（って帰ると）、天ぷら揚げていて、みんながウワーって笑うの。（藤崎は）「何笑ってるの」。そんなことだけが面白いとか楽しい。他にないですもんね。

渡部：看護婦宿舎は何人くらい？

高橋：10 人くらい。部屋が二つ、婦長殿は小さな部屋一つ。ほんで婦長殿が寝てしまって、電気が消えたら。当番がごちそうこしらえちょって、婦長殿の横の横の一番遠いところに集まって、食べて。隠してあるのね。お料理の上手な人は「作っといてよ」ってみんなで頼んで。それが楽しみなんですよね、

渡部：だいたいみんな 20 代くらい？

高橋：日曜いうたら、みんなが布団かぶって寝てるでしょ。８時になっても、9 時になっても。婦長さんはやっぱり早く目が覚めるので、「こら起きんか、目が腐る」言うて起こしに来る。知らん顔して皆布団かぶってんの。（はっはは）

渡部：看護婦も階級があるんですか？

高橋：階級はありません。婦長殿とはあります。看護婦同士はないです。

渡部：17、18、19 年、３年くらい。

高橋：3 年から敗けました。

中村：病院にいるとき戦況聞きましたか？

高橋：普段は平和そのもの。なんかのんびりしてました。庭にトマトの木を植えたり。だけど、兵隊さんは「トマトが熟れて喜んでいるけど、来年の今頃は大変だぞ」と言った兵隊さんがいました。開戦という頃には「えっ」という。ある兵隊さんがそういうこと言ったなと。

渡部：ソ連が攻めてくるまでは変化もなく？

高橋：変化なかった。ぱっと来ましたからね。ほんとにもうバラバラになって。自分が持ってた手榴弾が重いんですよ。手榴弾と水筒だけしか持ってないのに、重くてね。一つじゃけどそれが存外重い。疲れて山の中をほうこうしましたからね。あっち行き、こっち行き、山の中を本隊を探して。兵隊さん何人くらいいたかな

渡部：ソ連が実際に病院まで来ましたか。

高橋：来ませんでした。私たちが林口の駅へ来た時は（爆弾を）いっぱい落としました。ソ連がいっぱい落としました。こうして土の中こうやって、飛行機が。波状攻撃っていうんですね。ブーンと回ってくるまでは、

ダーと駆け上がって。患者を。満鉄というのがあって。満鉄病院の分院が山の上に。林口駅の上に。私たち（の陸軍病院）は北。南側の小高い所に満鉄の病院がありまして、そこへ患者を担ぎ込んでたんですね。兵隊さんたちが。だから、ソ連の飛行機がこう回ってきて、来たときは伏せて。こう回ったら、山の患者の所へ駆け上がったんです。灯が付けられないから、薄暗い所で。満鉄の看護婦さんたち逃げてますからね、何もかも置いて。薄暗いところでご飯を炊いてほんでお米もある、ご飯もある、鶏をしぼったのもそこに置いてある。料理の上手な人がぱっぱと料理して。薄暗い中、患者さんにスプーンで食べさせて。雨の中を送って。それから自分たちが出発したのは、雨の中を土砂降りの中を。ずうっと鉄橋渡る時は後と前の兵隊さんが「眠るなよー」。三日三晩寝てないですからね。食べもせん。千人ばあの患者を送るのに精一杯。前と後から叫んでくれまして。「はいっ」って言いながら。鉄橋渡って。「小休止」って。５分の小休止。とんって座ったらそこで眠っていましたね。最後の列車が貨物列車で。牛が馬を運ぶ。もうこれが最後の列車だという、引きずりあげてもらってこんな高い、馬や牛をするがですからね。こんな箱みたいなもん。そこへ兵隊さんに引きずり上げてもらった。どろどろの所へ突き刺さったら、もう眠ってしまうぐらい疲れてましたね。敵機がきたいうてもね。元気な人は飛び降りて列車の下へ入る。「もういいわ」っていう気持ちでしたね。手や足もがれたら嫌やけど、一発でいきたいなと、みんなあそう思ったと思います。先送った体の弱い看護婦と婦長殿は、患者さんと一緒に先出ましたからね。先付いた看護婦にね。「最後の患者さんをどうした」って。「言いなや、聞きなや」っていうたから。じゃないかなと私は思いましたね。全然動けない人、何十人も連れて回れないですよ。だからあの頃はめちゃくちゃですからね。

渡部：林口の満鉄病院まで行って、患者も本隊へ合流を目指すんですか？

高橋：患者さんはトラックで。そのトラックへ乗ったのが、体の弱い看護婦と婦長殿と事務の人。その人達は私たちを送って。婦長殿は最後に「よく気をつけてやれよ」と私に。私が一番お姉さんでしたからね。私に婦長殿がね。若い看護婦は肩をこやって、婦長のを触って。「離ればなれなるんだよ」「ちゃんと付いてこないかんよ」。私には「若い者気を付けろよ」って言われて。「はいっ」て言ってそれで別れて。雨が降って着たまま濡れたり乾いたり。本隊を探して山をあれしたり。なんかね、列車へも乗ったような気がする。またハルピンの駅へ来た。そんなような感覚で、どこをどう回ったか自分には分かりませんね。本当に何だったろうと思うくらい。どこで乗ってどこをまわっていったのか。下ろされて、山の中をずうっと本隊を探して歩きました。その時に自爆用のあれ（手榴弾）と、それが重くてね。青酸カリとそれとはぎっちり持ってましたからね。重かったなと。兵隊さんも自分のを持ってるからな。持ってくれるわけない。馬がいたような気も。いろいろあまり変化が。それで日本が敗けて。延吉へ収容される所、28 部隊に集合する。３日間くらいはかかったと思う。歩きますからね。後ろを見ても前を見ても敗残兵ばっかり。ずらずらずらと。夜はそこで寝るんですよね。山のふもととかでこうして。ソ連さんがいるでしょう。看護婦は２人３人で固まって、１つの毛布をぎりぎりまいて。そこででもだいぶ連れて行かれて、川へ飛び込んで死にました看護婦が。こんな山で。「あれどうした」いうたら「言うな」っていうたから。私たちはずうっと歩いて。延吉まで歩きましてね。延吉の収容所に入りました。

炎天下で熱いのに行軍でしょう。お水が飲みたいんですよ。その村田っていう私と同姓でしたがね。私どっかに書いたかね。みんな発疹チブスにかかって。発疹チブスはシラミの媒介なんですよね。白いタオルかけてあったら、黒いゴマ振ったみたいに。ぷるっと、血を吸って。そこで発疹チブスにうつらないというのが不思議ですよね。かからないというのが。ほとんどかかりました。けんど２人バカがおりましてね、かかりません

でした。ほんで私意識が戻ってきゆう時に、「村田さんー」「村田さんー」って聞こえて。あれ「私を呼びゆうが」って聞いたら、それも村田なんですよね。「あれあんたを呼びゆう」って聞いたら。「あんたをぎっちり呼びゆう」って。私足がたたんからはって。村田守と書いて「もりさん」。「もりさんわかるかえ」「私だよ」って言うたら、(村田さんが)「うーん」っていうたのが、返事かうなり声か分かりませんね。その子も少し胸が悪かった。喀血か、吐血か、話になりませんね。その時にやっと。

それがすんでから日本人の避難民収容所へ看護婦として、あっちへ５人、こっちへ。そこの看護をしなさいということで、私たちはてんしゅこう教会というところに行きました。３千人くらい入ってたと聞きましたがね。あんまりあちこちしたから順序が分かりませんけど、大きな３階立ての大きな教会でしたね。患者さんが600 人いうたか、たくさんおるのに。薬剤師の中尉殿かな。中尉殿と夜通し、リンゲルいうて。昔点滴がないから。リンゲルを夜通し作っても 20 本くらいしかできない。60 人も 100 人もおるのに焼け石の水です。けれどもそれでも一生懸命作りましたね、リンゲルを･･･。

渡部：そこへ軍医殿もおるんですか。

高橋：軍医殿はどっかに捕虜としてで、ないでしょうかね。私たちの収容所には、薬剤中尉殿がおいでいましたね。軍医殿も亡くなった一人。

渡部：トマト作ったり平温な日があるときからがらっと変わった。

高橋：ほんとに着のみ、着のままでしょ。夏でしょ。着るものないんですよ。だから軍服を一つ兵隊さんがくれましたけどね。その人がちょっと変わった人だからもうあれですけどね。その人が「リンゴが食べたい」「リンゴが食べたい」言うから。藤崎という看護婦とリンゴ２つと換ましてね。そんなにしましたけど。脳症起こしているから分からないですよね。いまだにそんなこと全然知らないでしょうけど。言うたところで仕方ないことですけどね。売りに行った時も怖かったです。「叩き殺すぞ」って、朝鮮の。朝鮮の人が日本人に対してすごくありましたからね。「出られんよ」って軍服を売りいった時は、市場で「叩き殺すぞ」って（言われて）逃げて帰って。それをリンゴ２個と換えてかえってきた。その他は外へは出ませんでした。

渡部：その時の看護婦の同僚で内地まで生きて帰れた人というのは？

高橋：脇と藤崎。戦友会で出会ったのは･･･。戦闘でばらばらになって帰ったのは私と３人しか覚えてない。その前に戦争前に帰った看護婦が、だいぶ集まってくれて、昔の写真やらを。写真が全部京都におる友達が、大阪かな。その友達が全部送ってくれましたね。

渡部：延吉で本隊と一緒にはなれたんですか？

高橋：そうです。そこで一緒になりまして。延吉から兵隊さんは全部ソ連へ送られました。

崎山：看護師さんも連れて行かれた人いるけど、よう高橋さんは連れて行かれなかったね？

高橋：テレビで連れて行かれた看護婦のことやってましてね。あっ、うちの部隊長はえらかったと。「看護婦ははよう市内へ連れて行け」って。「軍隊としておったらいかん」と部隊長がそう言うて、収容所へ。ぼつぼつと出されましたからね。

渡部：軍から外したわけですね。

高橋：だからソ連に連れて行かなかったですね。

渡部：兵隊は基本みんなソ連へ。

高橋：そうそう。それが最初は日本へ帰れると思いこんでいたんですよ。まさかと思うからね。うちの兵隊さんももちろんおるから。食べるものがないでしょ。「ヤポンスキーじゃない、ろすけ」じゃ言うて。だからね、

わりと兵隊さんの中には個人的には送別に憎しみはないからね。日本の食料をとっちゅうがじゃき。あれはカンパン。箱ごと持ってきて。（ソ連兵が）出しちょいて「箱ほれ」って（私たち看護婦に）教えてくれるんです。銃剣持って回りゆう隙にぱっと行って取ってくる。ほいてカンパンを出しちょいて、箱掘り出しといたら。兵隊さんはそんなこと教えてくれんから飢えるんです。カンパンをぽっぽっと出すんです。兵隊さんが取っていてくれて、みんなで食べてくれた。そういうこともね、個人的にはね。

渡部：ソ連兵はやっぱり怖かったのは怖かったんですか？

高橋：軍医さんで日本語のちょっと分かる人がいて。「お腹が痛い」言うたら、「痛かったらなにやらです」って日本語の分かる軍医さんがいましたよ。お洗濯にもソ連の兵隊が連れて行ってくれましてね。川へ。

崎山：ソ連の？よくまあ。

高橋：みんなで鴨緑江、鴨緑江のすぐ近でしたから。すっと出たら鴨緑江。「おなごはええなあ」って兵隊さんがうらやましがっていた。そこで下着あらって。干したらすぐ乾くんですよ。夏、日なたのがんがんてるとき。そんなこともありましたよ。

渡部：延吉どれくらいいたんですか？

高橋：私がまだ発疹チブスからほんとにやっと立ち上がれるようになった頃、八路軍に看護婦をよこしたら日本の難民に食料（やる）。１年は持ちこたえた。みんなの持ってるお金でコウリャンを買って持ちこたえれた。日本人の建物を壊して、燃やして火を焚いて暖房を取ったけど、２年目の冬がきたら日本人は･･･という状況だったから。もちろん食料もないから。その時八路軍が看護婦と医者を出せと。そしたら食料をやるということで。それは結構なことですと。それで私たちは八路軍に参軍したわけ。

渡部：その時はソ連は引き揚げて。兵隊連れてシベリアへ行ったわけですね。

高橋：ろすけは帰ってしまいましたからね。八路軍がいうたら権力取ったわけですね。

渡部：国民党は来なかったですか？

高橋：国民党は来ませんでした。私たちが逃げて、国民党も帰る時に、蒋介石さまが台湾に逃げたでしょう。それで停戦になった。あっちこっちへ分配されたですね。医者と看護婦は。だから山の山の奥の医務室にも行ったこともあります。

渡部：医者と看護婦が八路軍に行くわけですよね。そこで、どういうことじゃと説明みたいなのがあるわけですか？

高橋：ないです。ただ行って。八路軍と国民党は戦争して。患者がいたらそれの治療。戦争を追っていきましたね。今度はこくざんの「今度の戦争はものすごく大きいぞ」と言うて。昔支那と言いましたでしょうかね。満州との境。熱河省延吉という所かな。蒋介石が台湾へ行ったので、そこの部隊が全部来たわけですね。八路軍に。それを捕虜と言われんぞ。起義（チギ）したんだぞ。義に立ったんだから捕虜じゃない。これは捕虜じゃない。捕虜という言葉を使われんという命令がきました。

渡部：同じ中国人民ということですからね。

高橋：かえって向こうにおった人同士が話が合うわけですよね。男同士は面白がって２人が魚釣りに行ったりしましたもん。

渡部：八路軍の動きにつれていっしょにいって？

高橋：戦争がある所の後方へ行ってね。七家子（チージャール）っていうところは本当に山の中で。七つの家の子と書いて「七家子」でしょ。家が七軒しかないんじゃき七家子じゃろうかというぐらい山の中。よいしょ

よいしょと患者さんが担ぎ込まれてくるわけですけどね。たんかを４人で担いで。それへ予備というか交代要員が付いてくる。患者一人に６人が付いている。まあ七家子の７人しかないとこへ、患者さんがどさっと運び込まれてくる。かけてあるの（布）をはぐってみたら、亡くなっている人。ガスエッソね。ガスエッソというのは、朝でもやられたら、晩にはぽんぽんにふくれて紫色になる。あれは切断しかないんですよ。ぱっとめくったら切断切断となるわけ。「チェースワン、チェースワン」言うて。本当に凄惨な感じ。

崎山：それは戦争してたんですかね。そこで。

高橋：そうそう八路軍と国民党とが戦争して。

渡部：部隊には八路軍の軍医もおるんですか。

高橋：そうそう。日本人の軍医がいっぱいおりましたわね。私たち看護婦と一緒で、医者出たんですからね。

渡部：言葉は？

高橋：言葉はびっしり怒られました。「同じ事ばっかりいうな」。「だんだんよくなるから我慢しなさい」という言葉を教えられたら。「おんなじことばかり言うな」って怒られて。

渡部：色々言えませんからね。八路軍から毛沢東がとかいうことも教えられたりするんですか？

高橋：最後平和になってからは、毛沢東の言葉なんかを勉強したりしましたね。私たちが勉強したのは全部劉少奇さんの本でした。その人の書いた本を読まされたんですよね。日本へ帰ってきてから、劉少奇さんがどこでどんな死に方をしたか分からん。「ええっ」て思いましたね。林彪（りんぴょうさん）とかね。リンピョウサンズーとか歌いましたよ。歌もいくつも。「私たちは中国の青年だ」という歌とかね。林彪さんをたたえる歌とかね。モウツーシーとか言うてね、毛主席をモーツーシーと言いますからね。そんな勉強もしました。

渡部：ルートというか、最後は落ち着いていくんですか。八路軍に入ってから。

高橋：戦争が終わってから、吉林市で最後でした。そこで平和な、普通の暮らしができて。ほんで日本人看護婦は。私たちは最後はね。保育園のね。病気になったときの予備みたいなもんですかね。これという仕事はないけどもね。なんかね、それがあっちこちさせられてね。色々平和になったので、いろんなものを建設するんですよ。大きな学校とか何とかを。すごい広い荒野でね。そこの医務室に連れて行かれてね。そこは用事がなければのんきなもん。そこは身体検査なんかこう。どっさり何百人もするでしょう。うちの娘がまだ３つくらいでしたらね。党務さんいうて、女中さんじゃないけど、子供見てもらう人、日本人の女の子を雇ってましたけどね。ゴージエってお祭りがあるんで「どうしたちいぬる」って。「明日はけんど検査があるきおってや」「いや」ってどうしたち帰られてね。中国の年取ったおじさん、子供ない人が、「俺はお尻の検査だから俺のとこに置いとく」いうてうちの娘を。３つばあの娘を。よちよち歩いて出るとね。工人・建設をしてる工人さんがどっさり帰って行くのよ。みんながしゃべりゆうのよ。「あれはね日本人の看護婦の子やぞ」らあて言うのが全部聞こえる。ほいたら中には娘が遊びよったら、「オーソー」「オーソー」言うてくる。握手をしてくる。娘がこうやってするのよ。すると「日本人の看護婦の子じゃ」らあ言うのが聞こえるの。

渡部：日本人はどういう扱いですか。特に日本人だからといじめられたりは？

高橋：かえってかわいがってくれてね。一緒に検査をしゆう人がね。（娘は）かずよという名前だからカータイっていんですよね中国語で。俺はお尻の検査だから、カータイを座らしちょってかまん。あの子も一緒に見たゆうてね。かわいらしいおじさんもいっぱいいましたからね。八路軍にも。かわいがってくれましたよ。カータイカータイ言うて。お菓子買いに行こうっていうたらひゅっとだかれてね。やっと言葉が。カータイチースイって中国語ができたら。サースイって偉そうに行って。一個取ったらメットって。中国語が分かり（はっは）。

そういう時代もありした。

崎山：だいぶ中国語覚えましたね。

渡部：そこは給料みたいに、手当てが出るんですかね。

高橋：そうです。給料だったように思います。だからお守さんにもお守り賃払えましたからね。どうしてもお守りさんない時は、日本人の老夫婦がね、ずっと預かってくれたのは２カ月くらいありました。だから色々転々としましたね。色んなことでね。あっそうだあそこにあんなおばちゃんいたんだわ。私らあが休みの日に行くでしょう。ほいたら別れが泣くからね。あそこに、向こうに何かある言うて。すっとこう私たちは帰ってくる。日本人の家庭にもしばらく預けました。そうせんことには仕事ができなかったですからね。

中村：戦争が終わっても老夫婦の人達はそのまま。

高橋：だいぶおいでると思いますよ。わりと軍隊におりましたからね。一般家庭ということはあんまり知らなかったでしょう。そういう人達はどうしたかなと思いますね。

崎山：八路軍なんかの命令で残された人達は、新京だけでも２千人いたっていうから。全満では随分たくさん残っていた。昭和 28 年に全部帰ってきてますね。

高橋：結局技術者を残したわけ。汽車とかなんとかの工場の。日本人がぱっと引き揚げてしまったらお手上げでしょ。だから技術者を残していろんなものに使ったわけね。日本人をお医者さんなんかでもそうじゃないかと思いますね。

渡部：なかなか八路軍はね。

高橋：八路軍えらいですよ。三大規律、八項注意歌わされましたよ。パーシャンチューイ。

崎山：最後昭和 28 年に引き揚げる頃までは吉林にずっといた？都会にいて良かったですね。きれいな街でね。

高橋：落ち着いたね。黒竜江が流れゆうね、（支流の）松花江。私の友達（立脇）は黒竜江省へひっとり行かされてね。かわいそう言われん。好きだったかもしれん。中国の医者と結婚して、子供は３人できて、１人は静岡の大学へ留学されて。立脇っていう私の友達も、ここへも子供連れて泊まりに来て。色々話して、一番大事なあれを、一生の記念と思ってやったり。その友達とも戦後も２、３回会いまして。588 のみんなが集まって、電気製品なんかをどっさり買って渡しました。２、３回帰ってきましてね。ここでも泊まりましたね、その人も亡くなりましたからね。中国の人はわりにね、こうしてもらったから、こうというのはないです。それはないです。

崎山：（中国の人は）泊まりに来てね、何か御礼も言うて来そうなもん。何もいうてこん。そういうもの。

高橋：それが一般的なんでしょうね。私腹立てよったけどね。腹立てられん。

崎山：なんちゃあいうてこん。

高橋：人が貧乏して金送っちゃりゆうに。金送れ、金送れ言うて。ほんとありがとうないね。

崎山：その時ありがとう、ありがとう言うたら、それでおしまいってね。

高橋：送金したらありがとうも聞こえんで。

崎山：えーほんと。

中村：ご結婚は吉林省いる時されたんですか？

高橋：当時ね、日本人は日本に帰さない、日本のあれがでましたね。日本人じゃない、今中国におるもんは好きでおるんだから。中国人だから、日本へ帰らなくて良い。新聞記者も言いました。「そうそうそう、それはあった」って。その時ばっと日本人同士が。ばっと。ばかもちょうしもないわね、少々ブスでも何でもかまんき

（あっはは)。その時は日本人同士が。やっぱりそりゃそうですよね。残されて、お嫁さんもなかったら困るから。少々ブスでもえいわと結婚したんじゃろう。（あっはは）

崎山：何をしていらっしゃる人ですか。ご主人は。

高橋：衛生兵、お残り。２人が残りもん。

渡部：どこの出身の方なんですか。

高橋：あの人はハルピンの部隊にいたいうたね。

崎山：高知へ引っ張ってきちゃったの。

高橋：東京、むこう３回爆撃にやられて家がないんだもん。

渡部：旦那さんも衛生兵だったもんで。八路軍の中で。

高橋：八路軍の中で一緒になって。こりゃ中国人より少々ブスでもかまなあって。

崎山：向こうで子供さん生まれたの？

高橋：そうです。帰れない、日本人は帰れない、中国に好きでおるんだから。その人は工業出てて、お医者だんですけど。ラジオを組み立てるんですねこっそり。日本人だけの時、今日本はそういう風になってるんだよ。中国におるもんは好きでいるんだから。日本人同士で結婚しよう。３組か４組、そこらあたりにおるもんで。お医者さんが２人と、そういう状況がありました。

崎山：日本人は満州へ土着せよってね。戸籍はね、日本籍を離れるも問題なしって命令があったから。

渡部：昭和 28 年までおいでたら、その間に中華人民共和国の建国がありました。その瞬間は何かありました？

高橋：あの時はどこにいたんだろうな。奥山の鉱山の医務室なんかにおったんで、ほんとに分からなかった時代がありました。子供しょって山を、ちょっと買物いうたら、お山を下っていかないかん。だからね。ずっと一緒にしてると、中国の人とも仲良していうか。街へ行くから買い物ないかいうたら、日本人でいうたら衛生兵ですね。ずっと一緒に働いてきた人が「何人いらあ」「一人でえい」（あっはは)。

渡部：八路軍に限らず、中国人とはあまり対立みたいな感じはなかった？

高橋：一緒に働いたもんはなかったですね。かわいそうにと言う思いもあったでしょうかね、向こうにもね。「日本語教えてくれ」という、そんな子もおったしね。男の子の方がかわいらしかった。食べるものでもね。軍隊ですから、いちいち何人分って作ってくれないから。ギョーザ作るにも、うどん粉どさっ、肉どさっ、私たちがどうしようもなかったら、男の子たちが作ってくれるんですよ。

渡部：そういう会話でだんだん中国語も覚えて？

高橋：熊の小さな子をね。お百姓さん、ローバイシン、医務室へもってきてくれて、かわいらしいけど、診療室の前に松の木へ登ってつくつくと登っていって遊ぶんですよ。見たら本当にかわいいの。だけどやっぱり猛獣ですね。犬は怖がってほえましたね。熊が家の中で遊んでてね、大きな中国の鍋ってこんなに大きいんですよね。ぐらぐらへ落ちちゃって、熊ちゃん。ほんでみんな一生懸命して、カンフル打ったりしたけど、亡くなりましたがね。ほんでかわいいと怖い、が同じ言葉でしょう。「こわいじゃない、かわいい」言うて。日本語のよう分かっちゅう人でもね、使わないの。だからうっかり言えないの。日本人と仕事しよった人はいっぱいいたでしょうからね。分かってしまう。

渡部：そこらへんが微妙なところですね。

高橋：その人がね。ウーって烏っていう漢字。「からすさん」って言ったら、「からすさん違う」って怒りよった。

渡部：前の生活がありますからね。みんなはかりながらですよね。

高橋：壁新聞やらには「日本人のことを日本鬼子（リーベンクイズ)」と書いていた。

渡部：でも現場ではみんなと仲良く。

高橋：仲良くないと仕事ができないから。

渡部：その間に日本へ帰る動きが出てくるわけですか

高橋：なんかほら、ソ連へ行った女の代議士さんが。国会議員がたった一人で女性がソ連へ乗り込んで。日本が向こうにおる人が日本人じゃないと言うたき、ソ連へ。その人が鉄のカーテンと呼ばれたそうですね、ソ連を。そこへ行って交渉してくれて日本人が引き上げれた。どこまでがあれか分かりませんけどね。

渡部：中国からの引揚げというのは昭和 28 年。中国と日本との協定みたいなので。

崎山：そうそうそう。それは赤十字が。まだ国交回復はしてなかったですよね。赤十字同士が話し合って。特殊な人は残った人もいたでしょうけど、ほとんどが昭和 28 年に。上海とか山東省の人とかみんな。満州だけでなくて全部帰ってきてますね。

高橋：私たちも第５回目の船だったからね。

渡部：それは軍から呼ばれて、帰れるように通知があったとか？

高橋：それは誰がおしえてくれたろうか。一般的にずっと奥地におるものは奉天に集まって、それを１カ月かかって集めて。また、移動してそこらへんの者を。２月に聞いて乗ったのが５月とかでしたからね、あっちへ集まり、こっちへ集まり、港の近くへ集まってお船が来たんじゃないでしょうかね。白山丸かね。小さな船が３つと大きな船が２つと聞いてましたけどね、私たちは何丸へ乗ったかな。

渡部：どこから乗りました？

高橋：だいたいは葫芦島ですけどね。違うところで乗りました。

崎山：満州じゃなくて中国の方？

高橋：満州でした。ほんで、日本人が好きな五目飯。「中国で一番おいしいお米で作りましたから食べってください」って言ってくれましたよ。日本海へ入るまではお船が送ってくれました。向こう（中国）の。

崎山：私らとだいぶ待遇違うね。私たちろくなもの食べさしてなかった。

高橋：遠路航海をご無事でっていう言葉が･･･

渡部：イールーピンアンというやつですね。こちらに戻っておいでて、中国の人達との付き合いはずっとあった？

高橋：全然ないですね。立脇とは、それからしばらくしてじゃったろうか。あの子が日本へ帰ってくるいうことで。588 のみんなが大阪まで迎えに行きしてね。汽車から「あっ立さん帰ってきた」って。電気製品も買い集めて持たせた

渡部：八路軍関係者とのつきあいもなかったですか？

高橋：ないです。

崎山：高橋さんは日本人と結婚して良かったね。中国の人と結婚したら、残留婦人でおらんといけなかったからね。まだその頃は日本人もいたから良かったですね。

高橋：そうですね。わりと兵隊さんが残ってましたね。

渡部：シベリアに連れて行かれた人が大変でしたよね。

高橋：私たちも一般的な市民の中へ入れてくれたから、連れていかれなかった。看護婦も（ソ連に）行ってま

すもんね。部隊長さんがそういうふうにしてくれたんだなと思いました。「看護婦は軍隊と関係ないようにしなさい」と言うたんですと。すぐそこにね。延吉の陸軍病院がありましたがね、(戦後) 中国行ってみたらないの。私がいたらないの。

崎山：行きました中国へ？

高橋：死んだ友達と一辺は。置いてきた者に対して申し訳ない。その思いばっかりでしたからね。機会があればという思いがいっぱいで。えらい色々な人の援助がありましてね、行くことができました。

渡部：いつおいでになりした。

高橋：私が 35 歳じゃなかったろうか。60 年前。

崎山：そんな時に行けました？

高橋：行けました。誰やらいう人が、「日本人がここに入れるのは初めて」って言われました。延吉。外国人を受け付けるという一番初めの。その飛行機に南方にいた兵隊さんたちも乗ってましてね。戦地におったのは、私と伊藤と、旧学校の幼な友達と娘で、４人で行きましたからね。「女４人でようあんなとこ行く」って言われました。私たちは八路軍に長いこといましたら、怖いという思いはなかったですね。

崎山：延吉までですか、それより北へは行かなかったですか？

高橋：本当は林口行きたかったですけどね。ちょっと旅程がね。

崎山：まだ自由に行ける時期じゃないですよね？

高橋：日本人を初めて入れる。朝読売の記者さんと朝食で出会うて、「あら日本人ですか」って言われたんですよ。「あんたらどうしてきた」言われて。「こうこうできた」って言うて、新聞に出たのがあれ。だいぶ友達を埋（うず）めてきましたからね･･･。うん。

崎山：満州でお子さんは１人だけ。日本に帰ってきても？

高橋：日本に来て１人。女の子が２人。

崎山：ご主人は？

高橋：あの人はさっさと逝ってしまいました。60 歳で。だいたいうんと体弱ってましたからね。帰るそのまま病院という人でした。

渡部：八路軍の規律はなかなか厳しい？

高橋：そうですね。三大規律。男女関係とかうんとそういうのうんと厳しかったですね。

崎山：借りたら必ずかえせとかね。モラルが崩れてしまってね。あんまりこのごろは･･･

渡部：毛沢東より劉少奇の学習だったんですね。

高橋：色々な人と出会ったですね。

渡部：そこらへんのものが一切持って帰れなかったのがあれですね。

高橋：今だったら、医務。来る人、来る人がガスえっそ、ぱんぱんでしょ。切断切断でしょ。送ってくるに時間がかかったのが原因でしょうね。爆撃でやられた。奥へ入ると酸素がないと菌が増えてひどくなる。くるだんび、毛布をあけると切断切断。

崎山：ひどい目にあってるね、高橋さんも。

高橋：ほんとにね。若かったらできたんでしょうね。

渡部：帰ってこられて病院におつとめ？

崎山：高知で看護婦さんやられてました？

高橋：ほかにかなんちゃあできませんから。当時は赤というのがあって、大きな病院が雇ってくれない。小さな個人の耳鼻科とか、そんなとこばっかり行ってました。

渡部：向こうで赤化したとか思われるんでしょうね。

高橋：赤って言われましたね。

渡部：シベリア帰りも色々言われますからね。

高橋：私も忘れてたことがいっぱいありますよね。中国でチャンピーって言いたら銃殺のことなんですよね。３回、こりゃチャンピーと思ったことがありましたよ。今大島先生と結婚している鈴木という看護婦と輸血をしましてね。すーと入れた途端に患者さんが死んじゃって。もう 2 人がはっと顔を見合わせて、たーと処置室まで行って。血液が凝固せん薬を捨てたんですよ。凝固せん瓶をぱっと捨てたんですよ。なんぼ捨てたっていかん。それが間違いじゃった。それは私たちの間違いというより、薬を作った人のレッテルのはりが悪かった。私たちとばっかり思って、たーと処置室へ走った。処置室へ。すっと捨てたの。捨てたっていかんわね。「もうチャンピーしようがないわ」言うて「事務室行こう、チャンピーチャンピー」行きよったら。加藤いう看護婦がエーンって泣きながら付いてくるの。「きたらいかん」って怒っちょって。日本人の医者もいましたからね。それはないって。助かりました、命が。その看護婦と、もうよう行けませんけどね。香川県へ行ったら。お医者さんも一緒でしたからね。泊まりに行ったら。色々話ますがね。

崎山：長い時間よく話してくれましたね。ありがとうございます。

高橋：こういうことも話しちょったらね。

第３部　2020 年度活動報告

【第１回学習会報告要旨】

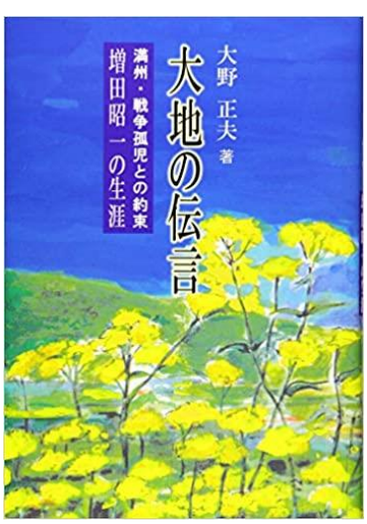
太平洋戦争後の満洲の悲劇―著書：大地の伝言―を教材として

大野正夫
（高知大学名誉教授）

1945 年 8 月 9 日に満洲の国境を越えて侵攻してきたソ連軍を阻止しようと、8 月 11 日、満州東部ソ連国境に近い中核都市の牡丹江市より 30ｋｍほど国境に近い魔刀石で、爆雷（ダイナマイト 10 ㎏を束ねた）を抱えてソ連軍戦車飛び込む特攻作戦が行われた。医大生の増田昭一は、特攻兵となったが生き延びて新京の難民収容所に入った。そこには開拓団で、両親と離れた子供達がいた。彼は子供達とともに暮らしたが、多くの子供達は、酷寒の中、着るものもなく飢えと発疹チフスに罹り、次々と亡くなって逝った。彼自身も発疹チフスに罹りかろうじて生き延びた。翌年 3 月に八路軍（共産党軍）の医師として国民党軍との交戦に従軍した。8 月末に八路軍から離れて、新京で医学生たちと医院を開業し収入を得て 12 月末に帰国した。

彼は 1947 年 5 月より小田原市内の小学校の教職に就き、定年後に新京難民収容所で亡くなった子供達のことを 3 冊の絵本にした。これらの原作から、TBS 終戦記念テレビドラマ「遠い約束」が 2017 年に全国放映された。増田昭一先生は、筆者の小学校２年生から 4 年生までの担任である。増田先生の生涯を取材して、満洲の数奇な経験を核に『大地の伝言　満州戦争孤児との約束　増田昭一の生涯』（夢工房、2020 年）を刊行した。表紙の絵は、増田先生が描かれた満洲の大地である。学習会では、その中から、新京難民避難所の子供達が語ったことや行動と魔刀石の戦いを増田先生に聞き取りながら、先生の思いを報告した。

難民収容所にいた子供達のほとんどは、満洲開拓団家族の子供達で親が亡くなり、また迷子になった者達であった。開拓団の集団生活に慣れていたこともあり、子供同士は仲良くしていた。どういうわけか暗い表情の子供はいなかかった。増田先生は 17 歳の少年であり、お兄さんと慕って自然と子供達の輪の中に入っていった。9 月には、収容所には多くの子供達がいたが、多くの子供達は満人（中国人）に引き取られていった。中国人は「日本人の子供はかわいい、頭が良い」と言って、比較的よい家庭と思われる人に引き取られていった。満洲残留孤児として報道されている帰国された多くの方は、新京市内に来る前に農民の家庭に引き取られて子供達であり、悲惨な生活をしたと思う。農民は貧しかった。残留孤児の記事をみてきて、増田先生はこのように思ったと語った。



ドラマ「遠い約束」で、新京の収容所の子供が中国人女性に引き取られていった筋書きに入れてもらった。収容所の子供達は屋台や店のものを盗むということはしなかった。そういうことを知らなかった。物売りも、ほとんどしなかった。売るものがなかった。11 月になると発疹チフスが蔓延し、子供たちは日に日に亡くなって逝った。しかし、お互いに介護しあい、彼らの目は輝いていた。増田先生は、最近の中東難民の子供たちの映像を

みて、「子供達は違った。新京の子供達は、日本に帰るという希望があり、目は輝いていた」と幾度も語った。酷寒の 2 月には、ほとんど子供達はいなくなっていた。増田先生が収容所を出た時には、子供達はいなかったという。亡くなったか、中国人に引き取れていった。そこで、増田先生は子供達のことを書かねばと思った。増田先生の本を出版した夢工房の片桐務さんから、「増田先生は、子供達が書いたメモ書きのようなものを持ち帰っていた。それが、本のなかに書かれている」と言われた。たぶん引っ越しをされたので、処分してしまったのかもしれない。

第 1 回学習会で報告する筆者

魔刀石の戦いの記録は少ない。石頭甲種幹部学校の学徒 1500 名が牡丹江から魔刀石方面に出陣し、魔刀石の戦場には 750 名が 10 ㎏ほどの爆雷を抱えてソ連軍戦車に飛び込む特攻作戦を決行した。負傷者や山中にとどまったものは 150 名ほどで、2 日の戦闘で約 600 名が戦死か行方不明である。「岸壁の母」の歌のなかの清一は、この魔刀石の特攻作戦に加わり、戦車に向かっていくところまで、生き残った者はみているが、その後、戦死は確認されていない。この歌が世に出て、厚生省の調査団が現地聞き取りや上海に生きているとうわさの確認までしたが、行方不明のままである。

魔刀石は、国境から牡丹江市占領を目指したソ連軍戦車隊の最前線の戦場であった。この方面を第 5 軍の戦略は、牡丹江の市民の避難と戦闘体制を整えるため、3 日間、牡丹江への侵攻を遅らす特攻作戦を取った。にわか作りの作戦であり、第 5 軍傘下の多くの駐屯部隊から、1 個中隊、100 名ほどの特攻隊が魔刀石の戦場に向かったが、その実体は、今もってわからない。増田先生の父は魔刀石の近くの愛河に置かれた兵器廠部隊の部隊長であった。たまたま夏季休暇で、家族に会いに行ったところ、ソ連軍の侵攻に会い、父の命令で特攻隊に加えられた。父はシベリア抑留後帰国したが、父は多くは語らず「息子も戦場で！と思った」と言われた。異常な判断ではあった。増田部隊から 100 名が特攻作戦に加わったが、戦史には全く書かれていない。生き残った学徒兵が記述した戦記は、勇ましく、また血気に燃えた戦いとなっているが、増田部隊の特攻隊員は、開拓団などから招集された 30 代から 40 代の老兵だったという。そのことを増田先生は詳しく書かれている。皆、死を恐れ、家族や故郷を思いつつ、明日の決行を待った。死を覚悟した翌朝は、老兵の顔が変わっていたという。目が異常にきらきらとしていた。最前線は学徒兵たちの陣で、増田部隊はその後方の丘の中腹に陣を敷いた。老兵たちも同じく、「死ぬ」という現実を超越した心境で、前方の学徒兵が戦車の飛び込むのをみて、自分達も飛びこみたくなったという。後日、「戦場の中に入ると人間は変わるんだな！」と思ったと言われた。戦争は絶対にあってはならない。「最後の戦いのことを語らない父・部隊長の本音がわからない」と増田先生は言う。

【第１回学習会記録】（大野正夫）

第１回学習会は 2020 年 2 月 8 日午後２～４時、県立高知城歴史博物館１階研修室で行われた。参加者は実行委員を含めて 33 名、四角に机を配置、満席であった。

会員の瀬戸武彦高知大名誉教授が開会あいさつ。1998 年、満洲引揚げの記録映画上映が契機となり、崎山ひろみ氏らの呼びかけで「満州会」が結成された。高齢化で会員が減少して、新京会や奉天会などに分かれて活動したが、近年は活動が停止していた。2018 年９月 11 日に満州の歴史を語り継ぐ集い実行委員会（準備会）が開催され、「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」が発足。第１回の集いが 2019 年 7 月 13 日に高知市で行われ、第１回の学習会がここに開催される。等々語り継ぐ会の経緯が説明された。

まず、大野正夫著『大地の伝言』（夢工房）をテキスト（参加者に無料配布）、満州全図とソ連軍の侵攻を示す地図、新京の詳細な市街図をボードに張って資料に使い、会長の大野高知大名誉教授が、『大地の伝言』の中から歴史秘話となっている「新京避難民収容所」と「磨刀石の戦い」について語った。

続いて情報交換（50 分）が行われ、高知城歴史博物館の渡部淳館長が司会を務めた。「終戦直後の満州を考える視点からの事例報告」というテーマで討議。まず、瀬戸氏が「満洲の負の遺産と戦後の復興への遺産」について、「満州を語る時に負の遺産が多く語られているが、満州を縦断する高速自動車道の建設や高速列車の運行などの技術は、戦後の日本の復興に役立っている。特に若い優秀は技術者が、多くこれらの事業に関わったことも記憶に残しいくことも必要ではないか」と提言。崎山氏は「新京の都市建設と居住環境と戦後の混乱」について、「新京は、広い原野にパリーをモデルとした放射状の広い道路が建設された。多くの建物の建設も短い期間に、よくここまで出来たと思うほどである。新京市内は水洗トイレであった。これらの都市環境整備に掛かる経費は莫大であった。それが一説にはアヘンが絡んでいると言われ暗い気持ちになる。ソ連軍の略奪と暴行などは、道路に沿い行われていった。一歩奥に入ったところは襲われなかった」などと話した。

最後に、満洲の歴史を語り継ぐ方法について自由討議を行った。「満洲からの引揚者で学習会に参加したかったが、都合でこれなかった知人がいる。聞き取りのチャンスを作ってほしい」という意見があり、渡部館長が「聞き取り・録画を実施しているので、聞き取りができる方の情報を集める方法をこの会で検討していきたい。資料収集と保存の事業も別の組織（高知戦争資料保存ネットワーク）で行っており、ネットワークを作りたい」と話した。また、「満鉄の調査部は広い分野の活動を行っていた。一例であるが、イスラム圏に入って活動をしていた者もいた。満洲での活動を広く集めて、世界史の中で満洲で行われていたことが何であったかを討議する必要がある」との意見があり、渡部館長が「満洲国の時代が短いが、それ以前からの満洲区域の状況を調べ、また近隣諸国との関係がどうであったかも調査研究していく必要がある。植民地政策と満洲など裾野を広げて考えていきたい」と話した。「若者は満州を知らない。しかし、図書館でネット検索できる。体験者の講演と世代を超えた語り部の育成が必要であろう」との意見もあり、渡部館長が「高知大や高知県立大では、満洲に関する授業を行っているが、今後、いろいろな機会を通じて、満洲の歴史を語り継ぐ事業を進めてゆきたい」と話した。

【第２回学習会報告要旨】
第一次大戦時の日本におけるドイツ兵俘虜のことなど

瀬戸武彦（高知大学名誉教授）

学習会で報告する筆者

はじめに

タイトルに満洲の語がないように、本稿は満洲との関わりはほとんどない。しかし、ドイツ兵俘虜を生むきっかけになった日独戦争の戦場が、中国山東半島の青島（チンタオ）であったことから、満洲とも決して無縁ではなかった。以下では、先ずドイツによる青島建設、日独戦争及びドイツ兵俘虜による音楽活動の一端を年表で示してみる。

1897 年（明治 30 年）11 月 14 日、つまり今から 123 年前の今日、ドイツ東洋艦隊の艦船三隻が青島沖に現れ、青島を無血占領する。11 月 1 日に山東省曹州府鉅野県の教堂で、ドイツ人宣教師 2 名が住民に殺害されたことへの報復であった。情報に疎かった清国の守備隊は、儀礼訪問と勘違いしてドイツ兵の上陸を許したのだった。当時の青島は戸数 400 余の鄙びた漁村だった。

1898 年 3 月 6 日　青島周辺 551 平方キロを 99 ヶ年租借する独清条約が締結される。10 月 11 日、青島市街建設の最終的な見取り図が完成して市街建設に着手する。市街地建設に当って必要となった資材、つまり煉瓦、木材等は当初日本から調達した。その際に、山東半島突端の商業港芝罘を拠点とする日本の商社の湯浅商店などがその調達に当った。（日清戦争の勝利で遼東半島を手に入れることは出来なかったが、向かいにある山東半島の港湾諸都市に拠点を築いていたのであった。）

1904 年 6 月 11 日　青島と山東省都済南を結ぶ山東鉄道の開通式が挙行される。（この年の 2 月 8 日、日露戦争が始まる。戦争の勝利によって、山東半島向かいの遼東半島の旅順、大連の関東州を手に入れ、大連と芝罘を結ぶ航路の完成で、満洲と青島の連絡網が繋がる。）

（1906 年 11 月南満洲鉄道会社設立される。）

1907 年　青島市街地の主要な建造物、ドイツ人家屋の建設がほぼ完成する。上下水道完備で、後の自動車時代を想定した道路網も整備された（ずっと後の 1930 年代になるが、ドイツが高速自動車道のアウトーバーンを建設すると、日本はドイツに倣って満洲に高速道の建設を計画し、哈爾濱（ハルピン）と大連間 1000 キロの哈大（はだい）道路の建設に着手する。これは戦況の悪化で中断の止むなきに至る。）

1914 年（大正 3 年）7 月 28 日　第一次世界大戦勃発する。8 月 23 日　日本はドイツに宣戦を布告する。8 月 25 日　独立第 18 師団（師団長神尾光臣陸軍中将；約 15000 名）等の陸軍（約 50000 名）及び海軍の 3 艦隊（総員約 25000 名）が、長崎から山東半島に向けて出撃する。ドイツ側の守備兵力約 5200 名。11 月 7 日　青島ドイツ軍が日本軍に降伏す

る。日本軍の戦死者 1014 名、ドイツ側 182 名。

1918 年 6 月 1 日　板東俘虜収容所内でベートーベンの「第九交響曲」が演奏される。7 月 9 日久留米俘虜収容所内で、ベートーベンの『第九交響曲』が「合唱」部分を省いて演奏される。

1919 年 12 月 3 日　久留米高等女学校講堂で女学生達を聴衆として、久留米収容所俘虜 43 名によるベートーベン『第九交響曲』の第 2、第 3 楽章他が演奏される。

☆俘虜の総数は 4715 名で、その内の 4697 名が日本各地の俘虜収容所に収容された。当初は東京、久留米、福岡、静岡、丸亀、姫路、名古屋、松山、熊本、大阪、徳島、大分の 12 カ所で、後に習志野、青野原、似島、板東が追加され、統廃合の結果最終的な収容所は太字の 6 ヶ所になる。

☆　合計 24 名の収容所長の中から、特に以下の 4 名の収容所長について簡略に記す。

1）西郷寅太郎（1866-1919）：東京、後に習志野俘虜収容所長。西郷隆盛の嫡男。明治 18 年、ポツダムのドイツ陸軍士官学校に留学し、在独期間は 13 年に及んだ。明治 35 年に父隆盛の名誉回復なり、侯爵に列せられた。大正 8 年 1 月 1 日、スペイン風邪で没した。

2）松江豊壽（1872-1956）：徳島、後に板東俘虜収容所長。旧会津藩士の子として生まれたことが、敗者のドイツ兵俘虜へのいたわりに繋がったと言われている。俘虜に自主的な活動や、住民との交流を許し、人間味のある人柄で俘虜から慕われ、敬意を払われた。

3）真崎甚三郎（1876-1956）：第 2 代久留米俘虜収容所長。明治 44 年から大正 3 年 6 月までドイツに駐在した。収容所長時代、俘虜将校 2 名を殴打して国際的な問題になった。昭和 10 年、教育総監の時に林銑十郎陸相によりその職を罷免された。昭和 11 年の 2.26 事件では、反乱幇助の容疑で軍法会議に付されたが無罪となった。佐賀県出身。

4）林 銑十郎（1876-1943）：第 3 代久留米俘虜収容所長。大正 2 年ドイツに留学し、その後イギリス駐在武官を経て、国際連盟陸軍代表を務めた。昭和 9 年陸軍大臣になり、翌年に皇道派の真崎甚三郎教育総監を罷免した。昭和 12 年 2 月 2 日に総理大臣に就任した。真崎甚三郎よりは陸士で 1 期、陸大では 2 期先輩だった。石川県出身。

なお、真崎甚三郎と林銑十郎の二人は、関東軍の高級参謀だった石原莞爾と板垣征四郎等が満州国建国を目指して画策する「一夕会」に、長州閥以外から参加した（川田　稔「陸軍内部から見た満洲事変と満洲国の建国」より。なおこの論考は、2020 年 9 月 6 日に開催されるはずだったが、台風 15 号の接近により中止になった「第２回満洲の歴史を語り継ぐ集い」の講演資料である）。

☆第一次大戦の終結間際には悪性流行性感冒のスペイン風邪が地球規模で蔓延し、1918 年夏から 1921 年夏まで三次に亘って大流行した。死者は 2500 万人から 5000 万人ともされ、第一

次大戦の戦死者約 1000 万人を遥かに上回り、日本でも 39 万人余が死亡した。収容所内で死亡したドイツ兵俘虜 87 名の内の実に 55 名は、スペイン風邪による死者だった。

☆1919 年 6 月 28 日に締結されたヴェルサイユ条約では、日本への賠償金は問題外とされたが、中国におけるドイツの権益は山東鉄道を始め、膠州租借地のドイツ官有財産が日本に譲渡された。青島守備軍陸軍参謀部によって、洋書・漢籍を合わせて 2 万 6260 冊のドイツ官有書籍の目録が、『鹵獲（ろかく）書籍及図面目録』として編纂された。「鹵獲書籍」はその後当時の東京、京都、東北、九州、北海道の各帝国大学や高等学校等及び諸官庁に配分された。図面 5133 葉は全て東大へ与えられた。

☆　日独戦争の結果、旧ドイツ租借地は日本軍が占領支配することになり、青島守備軍司令部下で統治された。統治期間は 1914 年 11 月 7 日から 1922 年 12 月 10 日に及んだ。5 人の青島守備軍司令官の内の二名を以下に採り上げる。（なお、1945 年 8 月 15 日の敗戦時の青島の在留邦人は約 3 万人だった。）

神尾光臣（1855-1927）: 青島攻囲軍司令官。青島占領後は青島守備軍司令官に任ぜられた。1914 年 12 月 18 日青島から東京駅に凱旋したが、その日は東京駅開業式の日だった。神尾の次女安子の夫有島武郎は、妻安子と息子行光（後の映画俳優の森雅之）を連れて東京駅に出迎えた。神尾は後に大将となり男爵に列せられた。

由比光衛（1860-1925）; 土佐郡神田村高神出身。第 5 代青島守備軍司令官。1922 年 12 月 10 日に最後の守備軍司令官として中国に行政権を返還した。由比光衛は海南私塾分校（現小津高校）を経て、1877 年幼年学校入学、1882 年陸軍士官学校、1891 年陸軍大学卒業。青島守備軍司令官在任中に大将に昇進。土佐高知が輩出した最初の陸軍大将であった。なお、弟の由比質（ただす）が校長だった松山高等学校は 384 冊の配分を受け、今日ほぼその全てが愛媛大学に所蔵されている。

☆　日本の各地収容所に収容された 4697 名の俘虜の内から、特色のある俘虜 12 名を以下に採り上げる。なお、カッコ内の地名は、収容所名を表す。矢印→は移動先の収容所を示す。

1）　ジークフリート・ベルリーナー（Prof.Dr.Siegfried Berliner ; 1884-1961）: ライプツィヒ及びゲッティンゲンの大学で数学、物理学、経済学を学び、物理学で学位を取得した。1913 年 4 月に来日して、東京帝国大学法科大学で経済学を講じたが、大戦勃発により青島に応召した。解放後の 1920 年 2 月に東大に復職した。1922 年 11 月 21 日、来日中のアインシュタインが東京のベルリーナー宅を訪問した。（丸亀→板東）

2）　ヘルマン・ボーナー（Dr.Hermann Bohner ; 1884-1963）: ハレ、テュービンゲン等の大学で神学及び哲学を学んだ。学生時代にはカール・フィッシャーが創設した「ワンダーフォーゲル」運動に加わった。板東時代、数多くの多彩な講座の講師を務めるなど、最も学識のある知性豊かな俘虜だったと言われている。解放後は大阪外語専門学校講師となり、弟

二人も来日して、それぞれ高知高等学校、松山高等学校でドイツ語を教えた。神戸市の再度（ふたたび）山に教え子達が建てた墓碑がある。（松山→板東）

3) カール・フィッシャー（Karl Fischer；1881-1941）：1901 年 11 月 4 日、ベルリンで「ワンダーフォーゲル」を創設した。上海のドイツ系新聞社に勤めている時に大戦が勃発して青島へ応召した。松山時代は収容所内のマラソン競技に壮年の部で出場して優勝した。4715 名の俘虜の中で、ドイツの百科事典にその名が記されている唯一の歴史上の人物である。（松山→板東）

4) ハインリヒ・フロイントリープ（Heinrich Freundlieb；1884-1955）：1912 年青島でパン屋を開業した。解放後、愛知県半田町の敷島製粉に技師長として迎えられ、製パン技術の指導をした。日本人女性と結婚し、やがて神戸市北野に自身のパン屋を開いた。「フロイントリープ」は今日もドイツパンの名店として知られている。ＮＨＫ朝の連続ドラマ「風見鶏」に登場する俘虜のモデルである。（名古屋）

5) フリードリヒ・ハック（Dr. Friedrich Hack；1885-1949）：1912 年から大戦勃発まで、南満州鉄道東京支社調査部に勤務していた。解放後はドイツに帰国して、軍需品ブローカーとして日本の海軍省ベルリン事務所と密接な関係をもった。1936 年の日独防共協定締結に際しては重要な役割を果たした。1937 年 2 月 5 日に封切られた原節子主演の日独合作映画『新しき土』（ドイツ語タイトルは”Die Tochter des Samurai”：『侍の娘』）の製作に関わった。日本への思いを終生抱き続けた。（福岡→習志野）

6) パウル・ヒルシュベルガー（Paul Hirschberger；1888-1964）：解放後ヒルシュベルガーは久留米の日本足袋（株）に就職して、地下足袋の底を二重ゴムにする技術を考案した。これで日本足袋は業績を伸ばし、1931 年 3 月 1 日には社名を「ブリヂストン」に変えた。1933 年 10 月にブリヂストンを退職したが、退職後もヒルシュベルガーはブリヂストン社長の石橋正二郎と交流を続けた。第二次大戦後、石橋正二郎はドイツ訪問の際には必ずヒルシュベルガー夫妻を訪ねた。（久留米）

7) カール・ユーハイム（Karl Juchheim；1886-1945）：1909 年から菓子職人として青島で働き、1913 年にはマイスターとなり菓子店を営んでいた。国民軍の軍籍があったことから俘虜として日本に送られた。1919 年 3 月 4 日、広島県物産陳列館（現在の原爆ドーム）で、似島収容所俘虜製作品展覧会が開催され（「図版１」参照）、ユーハイムはバウムクーヘンを出品販売した。解放後は「明治屋」に高給で迎えられ、やがて横浜でドイツ菓子店を開いた。関東大震災後は神戸に移ってドイツ菓子店「ユーハイム」を開業した。芦屋市朝日丘の芦屋霊園に夫妻の墓がある。（大阪→似島）

8) ヘルムート・ケテル（Helmuth Ketel；1893-1961）：2 等巡洋艦エムデンの厨房兵で、大戦勃発により青島に赴いた。解放後、会津出身の女性と結婚した。1927 年、銀座並木通りにバー「ラインゴールド」を開業し、1930 年にはその隣にレストラン「ケテル」を開いた（2004 年夏に閉店）。1956 年製作の東宝映画『ある女の場合』（飯沢匡作）に、キャロル神父役で出演した。神奈川県茅ヶ崎市で没した。（東京→習志野）

9) アウグスト・ローマイヤー（August Lohmeyer；1892-1962）：応召前は青島で食肉加工職

マイスターとして働いていた。解放後、東京の帝国ホテルに雇われて、ハム・ソーセージ職人として従事したが、1921 年には資生堂社長等の出資者を得て「ローマイヤー・ソーセージ製造所」を興し、後に銀座にレストラン「ローマイヤー」を開いた。「ロースハム」という言葉の考案者と言われる。横浜の外人墓地に埋葬された。（熊本→久留米）

10）フリッツ・ルンプ（Fritz Rumpf ; 1888-1949）：15 歳の時、ポツダムの陸軍士官学校に留学していた山本茂陸軍中尉（「写真 1」参照）に日本語を教わった。ベルリンの王立美術学校に学んだ後、一年志願兵として青島に赴いた。やがて浮世絵の研究のために来日し、大正初期を彩った「パンの会」に出没して、北原白秋、木下杢太郎、竹久夢二、吉井勇等と交流し、さらに森鴎外邸にも出かけるなど、日本の文学にも少なからず影響を与えた。解放後は『日本の演劇』、『日本の民話』等、日本に関する多数の著作を著した。（熊本→大分→習志野）

11）ゲオルク・シュテッヒャー（Georg Stecher ; 1874-1922）：父親はザクセン陸軍の軍医監で、ドイツ留学時代の若き森林太郎（鴎外）はその講演を聴き、夕食会にも招かれた。陸軍少佐久邇宮邦彦親王（昭和天皇の后香淳皇后の父親）のプロイセン陸軍への受け入れと交換で、1907 年 9 月ザクセン陸軍省から派遣されて来日した。東京の近衛野砲兵第 14 連隊付武官となったが、大戦が勃発すると青島に赴いてドイツ軍に加わった。収容中に少佐に昇進した。鳴門市のドイツ館には、「忍耐　ステッヘル少佐」の書が額に納められ展示されている。（松山→板東）

12）パウル・エンゲル（Paul Engel ; 1881-?）：丸亀及び板東の俘虜収容所で楽団を結成し、数多くのクラッシク音楽を演奏・指揮した。丸亀時代、学校の音楽担当教師たちに楽器演奏の実技指導を行った。板東時代には四国霊場一番札所霊山寺で、後には徳島市内の立木写真館で楽器演奏の指導を行った。そのエピソードは、NHK 朝の連続ドラマ「なっちゃんの写真館」（「写真 3」参照）でも取り上げられた。『青島戦士行進曲』、『シュテッヒャー大尉行進曲』を作曲した。解放後はオランダ領東インド（今日のインドネシア）に渡ったが、1926 年以降の消息は杳として不明である。（丸亀→板東）

【参考文献】

大阪俘虜収容所研究会/大正ドイツ友好の会編 2008『大阪俘虜収容所の研究―大正区にあった第一次大戦下のドイツ兵収容所』大阪市大正区発行

大津留厚 2007『青野原俘虜収容所の世界　第一次大戦とオーストリア捕虜兵』山川出版社

久留米市教育委員会 1999『久留米俘虜収容所 1914～1920』久留米市文化財調査報告書第 153 集

志村恵 2002「日独戦争と青島鹵獲書籍」『金沢大学独文学研究会「独文研究室報」』第 18 号

瀬戸武彦 2006『青島から来た兵士たち―第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像』同学社

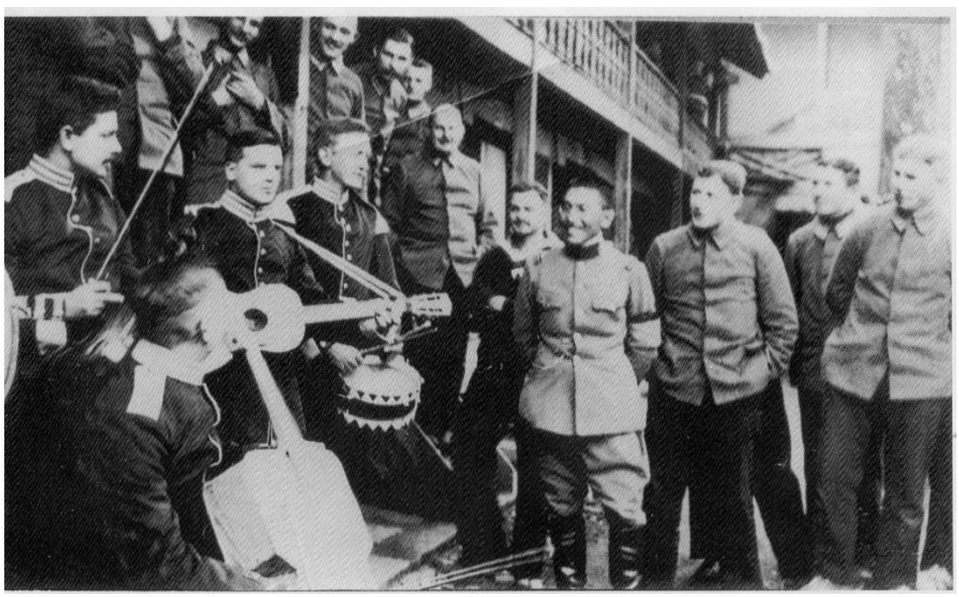
高橋輝和 2014『丸亀ドイツ兵捕虜収容所物語』えにし書房

徳島新聞編集局編 2018『第九　永遠なり　鳴門初演 100 年』徳島新聞社。

冨田弘 1991『板東俘虜収容所―日独戦争と在日ドイツ俘虜』法政大学出版局

習志野市教育委員会編 2001『ドイツ兵士の見たニッポン　習志野俘虜収容所 1915-1920』丸善ブックス

鳴門市ドイツ館史料研究会 2019『松山のドイツ兵捕虜と収容所新聞ラーガーフォイアー』、愛媛新聞社
林啓介 1993『「第九」の里ドイツ村―板東俘虜収容所　改訂版』井上書房
星亮一 2006『松江豊寿と会津武士道　板東俘虜収容所物語』KK ベストセラーズ



「写真１」俘虜と談笑する**山本茂陸軍中尉**（1915 年 1 月 27 日、於久留米の香霞園）
（久留米市教育委員会所蔵）

「写真２」名古屋収容所の一室の冬の陽だまりで（撮影日不明）。右から二人目の
カルクブレンナーは、解放後に数名のドイツ人と朝鮮の蘭谷に渡り、
ドイツ式大規模農場を建設して酪農に従事した。
（オスヴァルト・ハッセルマン氏提供）

「写真３」　　徳島市内の音楽教室での**パウル・エンゲル**
1920 年 1 月、立木写真館応接室にて
（鳴門市ドイツ館所蔵）

「写真４」　「**ドイツ牧舎**」を背景に（俘虜解放前の送別写真；1919 年末）
牧舎建設の功労者富田久三郎（髭の老人）、女児を抱くのは畜産職人クラウスニッツァー、女児を見やるのは牧舎の設計者シュラーダー；富田実氏の推定）
（富田製薬株式会社所蔵）

「写真５」　**似島収容所俘虜のサッカーチーム**が対戦した広島高等師範、
広島師範のチームとの記念写真（1919 年 1 月 26 日）
（ペーター・ヤノハ氏提供）

「図版１」　「**似島獨逸俘虜技術工藝品展覽會目録**」の表紙
（1919 年 3 月 4 日～13 日、於広島県物産陳列館）
（ディルク・ファン・デア・ラーン氏提供）

【満洲聞き取り記録の１次整理について】

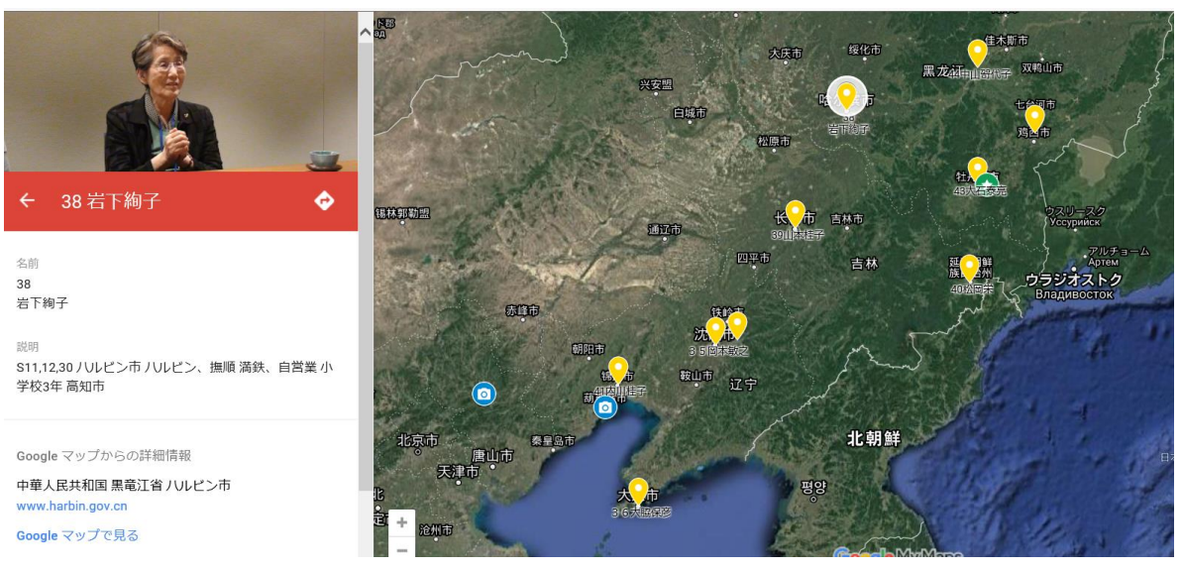
楠瀬慶太
（満洲の歴史を語り継ぐ高知の会事務局長）

2020 年度には、「満洲聞き取りの会」が進めてきた聞き取りデータの整理を進めた。進捗状況を報告する。

① データ移管（9 月 11 日）
高知城歴史博物館より聞き取り対象者 26 人分（61 人中）の音声・動画・写真データを預かり、SSD・HD の２保存媒体にデータを移管。

② データの DVD 焼き込み（9 月 11 日～30 日）
26 人分の動画データのみを変換・焼き込みソフトを使って DVD（1 人２枚ずつ計 52 枚）に焼き込み。DVD は高知城博より提供。1 枚は提供データ（MPG もしくは MTS 形式）のまま焼き込み、もう 1 枚は変換ソフトで再生等に汎用性の高い形式（MP4）に変換して DVD に焼き込み。DVD は高知城歴史博物館で保管。

③ 聞き取り情報のデータベース化（9 月 30 日～）
Google のグーグルマイマップのサービスを利用して、聞き取り情報を地図上にマッピングする作業を仮に行った。動画データを編集して 15 分くらいのダイジェスト版にすれば、地図上に動画を上げることも可能。高知戦争資料保存ネットワークや語り継ぐ会の活動も、随時マップ上に掲載していく予定。現在は非公開の状態だが、いつでもネット上に公開できる。



2020 年度事業関連資料

〇第１回学習会案内チラシ

満州の歴史を語り継ぐ高知の会・第１回学習会の御案内

場所：高知城歴史博物館１階研修室
日時：2020 年２月８日（土曜日）午後２時～４時

開会の辞　瀬戸　武彦

報告（５０分）：大野正夫（高知大学名誉教授）：満州の悲劇

著書：「大地の伝言」をテキスト（**参加者に無料配布**）として、そのなかより、歴史秘話となっている「磨刀石の戦い」と「新京避難民収容所」を語る。

ソ連軍の侵攻により、急遽編成された「ダイナマイトによる特攻作戦」の実体、「岸壁の母」の息子、清一は、学徒兵として、この作戦に参加した。農民までも襲ったソ連軍の無差別攻撃で、現在でも戦死者の数が不明である。

新京難民収容所に収容された満州居留民、特に開拓団の子供達の実体を報告する。酷寒の冬の寒さと飢え、さらに発疹チフスの流行で、弱った子供たちと大人までも次々を亡くなっていった。亡くなって逝った子供達の名前も数も不明である。

主題１として、大野報告への質問

休憩　１０分

情報交換（５０分）司会：渡部　惇

主題２として、終戦直後の満州を考える視点から、事例報告を含めて

- 瀬戸：官吏家族の戦後の生活と引揚
- 崎山：新京の戦後の居住環境（ソ連兵の横暴について）
- 日本人と現地人
- 世界情勢からみた満州

主題３として、満州を語り継ぐ方法　（自由討議）

- 聞き取り・資料収集と保存の方法
- 体験者の講演と世代を超えた語り部の育成
- 若者の立場から意見、体験者と非体験、体験者との距離など
- 視野を広げた考察の必要性：植民地問題と満州

閉会の辞　渡部　惇

○第２回満洲の歴史を語り継ぐ集い案内チラシ

『新満洲国要覧』より

2020 年度高知放送エヌ・ピー・オー高齢者支援基金事業

第２回 満洲の歴史を語り継ぐ集い

日時　2020 年 9 月 6 日（日）13：00～16：00

場所　高知県立高知城歴史博物館ホール(高知市追手筋 2－7－5)

参加費　無料　　主催:満洲の歴史を語り継ぐ高知の会

内容

第１部　基調講演

川田稔さん（名古屋大学名誉教授、高知県大川村出身）「陸軍内部から見た満洲事変と満洲国の建国」

第２部　満洲国の成立と背景を考える

●「中国残留邦人等の体験と労苦を伝える戦後世代の語り部」の語り

（首都圏中国帰国者支援・交流センター）

●シンポジウム　満洲国の成立と背景を考える

（パネリスト：川田稔さん、加藤聖文さん、崎山ひろみさん、渡部淳さん）

○第２回学習会案内チラシ

満洲の歴史を語り継ぐ高知の会・第２回学習会の御案内

場所：高知城歴史博物館１階研修室
日時：2020 年１１月１４日（土曜日）午後２時～４時

今年２月の第１回学習会（大野正夫会長のお話）に引き続きまして、第２回の学習会を開催いたします。今回は、語り継ぐ会のメンバー・瀬戸武彦先生（高知大名誉教授）が、長年研究されてきた第一次世界大戦時で日本国内に収容されたドイツ人捕虜の音楽活動やその後の日本との関わりについて、その後の満州の都市建設などとからめてお話しいただきます。満州史や昭和史の前史となる貴重なお話しですので、ぜひご参加ください（申込不要）。

【報告者】
瀬戸武彦さん「第一次大戦時の日本におけるドイツ兵俘虜のことなど」

俘虜と談笑する山本茂陸軍中尉（1915 年 1 月 27 日、於久留米の香霞園＝久留米市教育委員会所蔵）

「似島獨逸俘虜技術工藝品展覧會目録」の表紙（1919 年 3 月 4 日～13 日、於広島県物産陳列館＝ディルク・ファン・デア・ラーン氏提供）

似島収容所俘虜のサッカーチームが対戦した広島高等師範、広島師範のチームとの記念写真（1919 年 1 月 26 日＝ペーター・ヤノハ氏提供）

●瀬戸武彦　高知大学名誉教授。専門はドイツ文学。満州国新京生まれ。1970 年東北大学大学院文学研究科修士課程修了。主な著書は『青島から来た兵士たち―第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像』（同学社、2006 年）など。

補論
満州建設勤労奉仕隊徳島県隊「アルバム」について

石畑匡基
（高知県立歴史民俗資料館学芸員）

はじめに

満蒙開拓団とは昭和 7～20（1932～45）年の間に実施された、国策による農業移民（以下、満州移民とする）である。対ソ防衛の観点から北満を中心に約 900 の開拓団に延べ約 27 万人が参加している。

満州移民に関する研究はこれまで膨大な蓄積がなされてきた。これまで蓄積されてきた先行研究の立場について細谷亨氏は次の三つに大別できると指摘する[1)]。それは、①旧政策担当者、②「科学的」な検討に取り組んだ歴史研究者、③体験者による回想・記録[2)]である。本稿では、新たな立場として、終戦前に満州を訪れ、移民と触れ合った人が移民をどのように考えたのかという視点による研究を提唱したい。その理由は、満州移民に関しては終戦に伴う引揚の悲惨さがクローズアップされる一方で、移民の生活実態については必ずしも明らかにされているとはいえないのではないかと考えるからである。客観的な立場で満州移民に接した人々の記録に依拠して終戦前の満州移民の生活実態にアプローチすることで、より複眼的に満州移民を捉えることが可能となろう。そのためには、史料の掘り起こしが重要となる。そこで、本稿では満州移民の生活を移民とは異なる立場から助けた満州建設勤労奉仕隊（以下、奉仕隊）が奉仕活動の参加記念に作成した「アルバム」を紹介することにしたい。

さて、奉仕隊とは、「「満州」（現中国東北）における諸事業への労力補填を主眼として編成された組織」で、「「満州国」政府の主導の下，1939 年度より日本国政府が実施し，文部省・農林省（農商省）・拓務省（大東亜省）を主務官庁として 1945 年度まで編成」された[3)]。年度ごとに各県から満州移民への奉仕のために期間を区切って派遣されていたとみられる。管見の限り、奉仕隊への参加者の事例報告に関する研究は愛知県のみである[4)]。他の県の事例はほとんど判明しておらず、各県から派遣された奉仕隊の活動事例を蓄積することは奉仕隊自体の研究を進展させることにもつながるであろう。

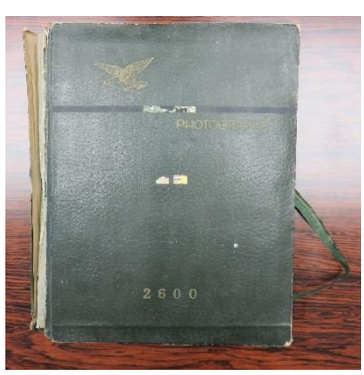


写真１「アルバム」表紙

１、満洲建設勤労奉仕隊開拓団班徳島県隊「アルバム」の概略

満洲建設勤労奉仕隊開拓団班徳島県隊（以下、徳島県隊）「アルバム」とは、昭和 15（1940）6 月に満州へ派遣された徳島県隊で作成されたとみられる「アルバム」である（写真１）。本資料は、徳島県隊を隊長として引率した 0 氏（明治 44～昭和 29 年（享年 44 歳））が所持していたもので、現在はその遺族のもとに蔵されている。なお、原蔵者の意を汲んで、引用に当たっては登場人物を匿名としてイニシャルで表記したい。

徳島県隊は、昭和 12 年に集団第 6 次として北安省綏稜県黒馬劉に入植した四国村開拓団[5)]の本部に本拠を置いて、同村の農業や公共事業に対して約 2 ヶ月間の勤労奉仕に従事した。奉仕先にあたる四国村開拓団は、その名の通り四国四県から 428 名が参加して作られた村である。この前年には愛媛県からの奉仕隊が学校の基礎工事の奉仕に従事していることから、四国四県県出身者による奉仕隊が同村へ送り出されて奉仕していた可能性が高いといえよう。

さて「アルバム」の表紙には「PHOTOGRAPHS」と「2600」と印字されている。徳島県隊が派遣された昭和 15 年は皇紀 2600 年に相当するため、それを記念して作られた写真アルバムを用いて「アルバム」が作成されたようである。剥がれかかっているがかつての満州国旗のシールが貼られている。その左隣にも摩滅して判別できないが、シールの痕跡がある。恐らく、日章旗のシールが貼られていたのではないだろうか。「アルバム」は写真だけではなく、文字も書き込めるようになっており、写真の説明が残されていることが大きな特徴といえよう。丁寧に目次も付けられているため、下掲してみたい。

史料①「アルバム」目次（〇数字は便宜上筆者が付し、漢数字をアラビア数字に変換した。なお、「洲」は原文のママにしている）

① 満洲縦走・現地附近地図・・表紙　②徳島県隊の歌・・１頁　③名簿・・２頁　④幹部・・４頁　⑤記念撮影・・７頁　⑥壮途に上る・・８頁　⑦四国開拓団・・11 頁　⑧小学校奉仕・・12 頁　⑨朝の礼拝・・14 頁　⑩食前作業・・16 頁　⑪吃飯了㠯・・18 頁　⑫奉仕作業・・20 頁　⑬運動・・26 頁　⑭綏稜県運動大会・・27 頁　⑮警備・・28 頁　⑯先遣隊の活躍・・30 頁　⑰仲よし苦力・・32 頁　⑱慰問袋・阿部君応召・・33 頁　⑲楽土の集ひ・・34 頁　⑳予土阿村に遊ぶ・・36 頁　㉑村の子・・39 頁　㉒興農鎮に拾ふ・・40 頁　㉓ハルピンの思出・・42 頁　㉔（欠）・・44 頁　㉕帰還・・50 頁　㉖建設満洲給国明信片・・54 頁　㉗高脚踊り・・59 頁　㉘記念写真をはなむけとして・・60 頁　㉙ハルピン観光・タバコ包紙・・裏表紙

このように全 29 項目が掲げられており、各項目に関係する写真が貼付されるとともに、参加者の感想などが記入されている。よって、本資料からは奉仕隊に参加した人や交流のあった四国村の人々の終戦以前の満洲開拓に対する考えを読み取ることが可能である。紙幅の都合上すべての写真とすべての文章をここで紹介することは不可能である。そこで、次章では各項目を概説するとととともに、場合によっては記されている文章を掲げたい。

２、「アルバム」の概略

①満洲縦走・現地附近地図

ここには、印刷の地図が貼付されている。１つは満州国全体の地図（写真 2）で、手書きで「満洲縦走」とあり、奉仕先である四国村までのルートが赤く塗られている。もう１つは、「北安省北安省綏稜県黒馬劉四国開拓団」とある地図（写真 3）で、四国村の箇所が斜線で塗られている。

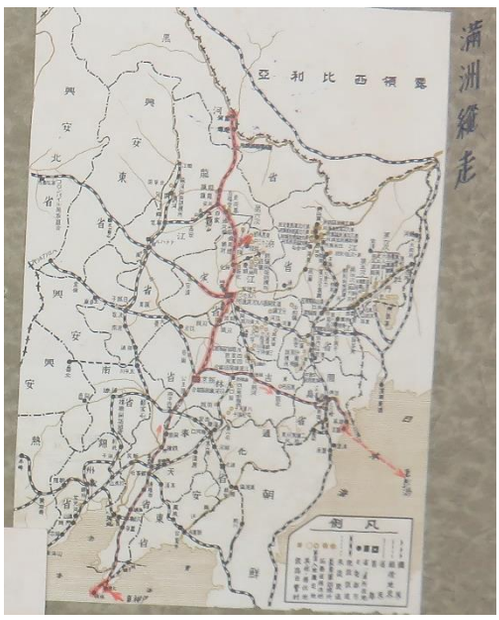


写真２　「満洲縦走」

写真３　「黒馬劉四国開拓団」

②徳島県隊の歌

「満洲建設勤労奉仕隊開拓団班徳島県隊参加記念」と記したのち「徳島県隊の歌」が記されている。また、「六月十一日河和田出発」記された写真が貼付されている。歌は１～６番まで下記の通りである。

史料②「徳島県隊歌」

一　日は匂ふ国　阿波の国　緑衣の樹々に風薫る　六月二日　初夏の　故郷の山河後にして

二　赤い夕陽の北満に　力と誠さゝげむと　集ふ四十有余名　結びは固き奉仕隊

三　忌部海人（インベアマベ）の古きより　和衷協同　勤勉の　尊き父祖の血をつぎし　阿州の健児　いざ行かむ

四　嵐よ吹けよ　波も荒れ　荊の道も　何かせむ　胸に久遠の　火と燃える　八紘一宇の大理想

五　我らが流す建設の　汗に輝く大御稜威　五尺のからだ　今更に　生きて甲斐ある　この命

六　呼鳴　大陸を踏みしめて　今感激に胸おどる　紀元は二千六百年　不朽の誉　地は植えむ

③名簿

小さい顔写真に各人の名前が左側のページに載っている。また、右側のページには「氏名」「年齢」「住所」「職業」「学校団体関係」の項目が挙げられている。隊員は、すべて徳島県民で、17～25 歳までの 45 名が名を連ねている。また、先遣隊には名前の上部に〇が記されている。「職業」はナシ 11 名・農業 29 名・自転車 2 名・議員業 1 名・製炭 1 名・商業 1 名である。「学校団体関係」には青本 30 名・教養生 11 名・青研 2 名・青年団 2 名である。

④幹部

幹部は隊長 0 氏 30 歳（徳島県立青年学校教員養成所教諭）、隊附（先遣隊）H 氏 33 歳（小学

校訓導青年学校助教諭)、隊附S氏34歳（小学校訓導青年学校教諭）の3名の写真と人柄などの説明。併せて、香川県出身で四国村現地訓練所主任のS氏、同じく香川県出身で四国村現地訓練所主任のK氏の写真と人柄に関する記述もある。

史料③幹部の人柄などの説明

S君（石畑註―隊附S氏を指す）

板野郡堀江村高畑出身、徳島師範並に青年学校教員養成所卒業、現在同村堀江南校に勤務さる。

“slow and steady”とは君の事か？　河和田の幹部訓練から帰還まで唯の一度も病気休養された事もなく　肥満の体躯よく二里の駈足に耐えられるとは誠に驚異的体力の持主である。奉仕期間中は警備主任として活躍され、日本体操と軍歌の指導は氏の専門でした。

H君（石畑註―隊附H氏を指す）

先遣隊長として六月初め渡満、体は小さいが運動なら何でも来いの猛者、県下教員対抗競技に氏の顔を見ないことはない。あゝそれなのに〳〵時々腹痛にやられるとはどうしたことでせう。毎日の様に奥様から送られる手紙や慰問品にはおすそ分けを頂きながらS氏（石畑註―隊附S氏を指す）と共に随分妬かされましたよ！板野郡一條町西條、徳島師範学校御出身。

K君（石畑註―四国村現地訓練所主任K氏を指す）

第二拓殖訓練（三重）御出身。「若身乍ら死するまで拓道に生きん」と何時も口癖に云はれるだけあってその張り切り振りには隊員中尻尾を巻いた者幾人か？雨の日の囲碁も、又君らしく「勝つまで止めない」と云ふ頑張リズム、この分では君の夫婦げんかもさぞ猛烈を極める事でせう？

七月十日令兄御病気のため内地に帰られ最后まで御指導を得られなかったのは残念でした。

香川県出身、現在四国村現地訓練所主任。「行きますら」「しますら」君の「すら」弁は愉快だった。

Ｓ君（石畑註―四国村現地訓練所主任Ｓ氏を指す）

寡言実行、見るからに円満なる御人格、奉仕期間中御指導を受け非常に御世話になりました。愛嬌たっぷりの奥様と可愛いゝ坊ちやんに恵まれて一家団欒ぶりは誠に羨ましい限りでした。君の唯一の悪癖は朝滅多に顔を洗はないことでした。

香川県出身、現在は四国村現地訓練所主任。

また、「幹部訓練記念」の集合写真も貼られ、現地訓練所主任S氏の「所感」が記されている。

史料④「所感　四国村現地訓練所　　S」

私は感謝にみちみちた心を以て感想の一端を書かして貰ふ。

六月十九日大陸の朝霧を突いて北安行の列車は克音河のホームに心快く辷り込んだ。私はN 課長始め協和会の方々と共にトラツクにて出迎えた。列車より共存共栄の隊旗を朝風になびかせながら流れ出た溌剌なる若人の一因は隊長の指揮により一糸みだれず駅前広場に整列した。長途の旅にも一向疲れも見せなかった。私はこの光景を眺めた時彼等は双肩にかゝつてゐる奉仕の重任を完全に完うするだらうと直観(ママ)した。入所后の作業は農耕に建築に或は公共事業に、中でも農耕の四十町歩は実に苦しい労働であったがよく奉仕隊の綱領を守り一丸となって働き或は終日作業の疲も打忘れたかのやうに犬の遠吠を聞き乍ら銃を左手に警備につく。これ等若人の尊くも逞しい姿を私達が傍観する時目頭が熱くなり自然に頭の垂れるのを禁じ得なかった事も幾度か。私の直観はあやまらなかったのだ。三ヶ月間開拓地にて得た真に正しい体験を内地若人に赤裸々と語り伝へるとき大和民族の大陸移動も自然解決されやう。

“楽土の集ひ”より

⑤記念撮影

「河和田出発記念」「現地帰還記念」「教養生参加記念」の各集合写真が貼付される。

⑥壮途に上る

「出発式」「出発は明日だ」「戦友に送られて」「LaplataMaru.7,266ton17／天気晴朗にして波静か」の各写真。それに加えて下記の「本隊の旅程と見学」が載る。

史料⑤「本隊の旅程と見学」「内地訓練」「日課」（なお、原文は漢数字だが、アラビア数字に改めて引用する）

本隊の旅程と見学

5 月 11 日（火）出発式（10.30）勇躍壮途に‼ 東京着（16.05）市内行進、宮城遙拝。明治神宮、靖国神社遙拝（二重橋前にて） 東京発（23.30）

12 日（水）正午神戸出帆（らぷらた丸）県学務課 I 先生より見送らる

13 日（木）門司市内見学（7.00 着、小隊毎ニ外出、正午出帆）

14 日（金）船中演芸大会（県民歌、阿波踊、詩吟、剣舞に出演し喝采人気を集む）

15 日（土）大連上陸（11.30）埠頭にて歓迎式 関東軍兵舎に一泊 市内見学

16 日（日）忠霊塔参拝（食前）旅順白玉山、東鶏冠山見学 旅順発

17 日（月）新京歓迎式（13.05 プラツトホームにて）

18 日（火）ハルピン着（10.29）歓迎式 第 7 回輸送部隊解散式、市内見学

19 日（水）克音河着（4.37）現地入所（13.00）

内地訓練

5 月 25 日（土）幹部（0 隊長・S 隊付）徳島発（19.18）

27 日（月）義勇軍河和田分所入所（13.00）幹部訓練始まる

6 月 2 日（日）本隊徳島発（10.57）　宣誓式・徳島県護国神社参拝　小松島出帆（12.00）
華城丸、大阪上陸。
3 日（月）宮城遙拝、市内見物　河和田入所（15.00）
4 日（火）午前所内見学、入所式（10.00）午后、義勇軍出発式見学、夜 K 先生ラヂオ講演「農に生きるものゝ喜び」聴講
5 日（水）午前中隊密集教練、O 中隊出発式参列（10.00）所内整理作業（後后）
6 日（木）午前小隊密集教練、午后宣誓式所内見学（内原）
7 日（金）午前 M 社会教育官、T 教官講演、夜間行軍（5.30 発）水戸市
8 日（土）文部省 O 博士「衛生」、拓務省 H「開拓民について」講演　午后開墾整理作業（朝部訓練所）
9 日（日）午前各個教練、出発式参列、午后土木作業
10 日（日）出発式参列、神宮遙拝式（天皇陛下二千六百年御報告、時難克服御祈念　御親拝と同時に外宮に対し 11.14 内宮に対し 1.54）
11 日（月）清掃、備品返納、出発式（10.40）

日課時間表

A　5.00　起床・洗面・点呼　　5.30　礼拝・日本体操・駈足・清掃・軍歌教練
7.00　朝食　8.00　講和(ママ)・教練・作業　12.00　昼食
P　1.00　講和・教練・作業　5.00　整理　6.00　夕食・入浴・座談会・軍歌練習
8.30　点呼・礼拝　9.00　消灯

⑦四国開拓団

ここでは奉仕先である満洲国北安省綏稜県黒馬劉四国村開拓団に関して村の様子がわかる写真（写真４・５）や団長のコメント（史料⑥）が記載されている。

写真４　四国村開拓団本部全景

写真５　四国神社

史料⑥“何時か苦しみが楽しい笑の中に消ゆる時がある”H 団長

「開拓事業程創造的で発展的である建設はない。満州開拓は新しい国土を開発し、日本民族を中核とした道義国家を築き上げ、新東亜建設の拠点を造り上げんとする民族的な大業で、

人類史上画期的な新意義を有するものである。

理想と希望のない人間生活に価値はない。吾人が努力を続けてゐるのは、その理想を実現するためである。大事業遂行の前途には曙光もあり光明もあるが、中々思ふ様に行かない。功は急がず農村の生命は永遠である。一つ〳〵の階段と課程を踏み越えなければならぬ。明確な目標に一歩々々精進せなければならぬ。

理想到達までは開拓の道は何時も坂道だ、発奮努力だ　何時か苦しみが楽しい笑の中に消ゆるときがある。幾多の困難障碍を覚悟し不動の信念を以テ開拓精神を遺憾なく発揮し幾多の困難を克服し協力一致聖業に勇往邁進し理想農村の建設、新東亜建設の盤石の礎を築き上げるのだ。」

語る団長の頬は紅潮し静かではあるが底力のある講演に隊員の顔は次第に緊張する。団の使命建設当初の苦心と現状話は尽きない。窓外には夜来の雨がいつまでも降り続いてゐる。

七月三日（水）午后三時より。

⑧小学校奉仕

8月2日から7日まで奉仕隊が従事した四国村小学校（写真６）に関する写真が掲載される。具体的内容としては小学校経営農場・簡閲点呼場準備・運動場整理などである。なお、四国村小学校は「昨年度奉仕隊（愛媛）基礎工事に勤労奉仕し同年校舎本建築完成す」とあり、出来たばかりの校舎であることがわかる。併せて、8月の奉仕隊の活動に関する「八月の暦」や四国村小学校長からのコメントも掲載されている。

写真６　四国村小学校

史料⑦「八月の暦」・「奉仕隊を送るに当り　四国村尋常高等小学校長K」

八月の暦

暑い〳〵と思ってゐるといつか忍び寄る秋の気配。平均気温も二十度位となり日中は大(ママ)陽の直射が酷しいが夜分はぐっと温度が、下り暑さに馴れた習慣のまゝでゐると寝冷えをしたり風邪を引き易い。体を壊すのも此の月が最も多いから衛生に充分注意しなければならぬ。

農林に於ては秋蒔蔬菜の播種に害虫駆除に・・・・・目の廻る程忙しい時期五穀の実りも先づ麦の刈取から嬉しい収穫が見られる。中旬過ぎれば目に見えて涼しさが加はりそゞろ逝く夏が惜しまれる。戸外の快適を存分に味ふのは日数ももう少い。健康を鍛へ精神を練り奉仕作業も充分精出してやがて来る帰還に備へやう。

一日　日清戦役布告記念日　公休日　　二日　小学校奉仕作業始まる

八日　立秋　簡閲点呼見学　　九日　小隊長会議（新京中央実践本部にて）

一〇日　旧七月六日　七夕祭　燕麦刈取始まる。
一四日　小学校新学期始まる　一八日　旧盆　公休日　二一日　予土阿村見学
二七日　現地発　帰還の途につく。

奉仕隊を送るに当り　四国村尋常高等小学校長 K

大陸開拓の聖業に営々孜々として国策に殉ぜんとする開拓団に短期間ながら奉仕の生活を送られた事は諸君にとり格別幸のことゝ存じます。奉仕などゝ云ふ思ひ上った気持でなく「働かせて貰ふんだ」と云ふ謙虚の気持の間にこの聖業に参加させて貰ふと共に自己修練の行の為に身をおかうとの御精進が常に伺はれて誠に感服と感謝の念に満されました。

入植以来気候風土の懸隔、生活の不便、治安に恵まれざる現地にありながらも和気藹々裡に作業を楽しみ、士気旺盛、日輪ほのかに浮ぶ朝より赤陽地平の果てに沈む夕まで、現実の村を見つめつゝ、麦刈、除草、蔬菜播種、公共事業奉仕など烈しい苦熱の下　流汗よく奮斗(ママ)、真面目に真剣に努力せられし其の効(ママ)績は実に目醒しいものであるを信じて疑いません。殊に諸君の行動が団員の驚嘆と賛辞と激励になったことは諸君の意外の収穫ならんなど推察されて欣快に堪へません。

現地に於て団員と起居を共にせられた間に実に尊い体験を得られ開拓国策の重要性を思ふこと愈々切なることを感じられしことゝ察せられます。あらゆる困苦欠乏と慣れぬ風土と戦ひつゝ着々建設の歩が日夜を分つことなく進められてゐる、この不撓不屈の開拓魂が忍従な農民道に於てのみ成立することをその実践生涯からつく〴〵感じられたことゝ思はれます。教育に於ても開拓地教育については従来都会教育の部(ママ)面しか持たなかつた　跛行的　行過ぎから新に土に根をおいた農村教育に炬然たる眼を注ぎ未成形の農村教育の正しい発展を計らねばならぬことと痛感せられた事と思はれます。

白余日の体験に見学に　北満開拓地には満ち足りた生活があり明るい光の~~ある~~匂ふ明日のあることを認められし事かと推察致します。このあやまらざる認識を以て同志に訴へ益々聖業貫徹の一助を賜り度　此業の成否たるや　一に諸君青年の力にあると信じます。現地に於て得られたる堅忍不抜の精神を益々強調され　燃えて尽きざる愛国の炬火と尽忠報国を以て大和民族大使命達成を念願すると共に諸君の弥栄をを祈りつゝ筆を擱く。

⑨朝の礼拝

奉仕隊の朝の日課について説明がなされる。午前 5 時に起床すると朝礼があり、その内容は「点呼、たて・みたましづめ・おろがめ、遙拝・二拝二拍手一拝、あつはれ・あなおもしろ・あなたのし・あなさやけ・おけ、天皇陛下弥栄を高らかに三唱、綱領斉唱、海行かば斉唱、朝の挨拶」である。皇居への遙拝や勤労奉仕隊の綱領の読み上げなどを毎日実施していたことが判明する。

史料⑧綱領

我等勤労奉仕隊ハ　　皇祖ノ神勅ヲ奉シ　協心勠力、身ヲ挺シテ興亜ノ　天業ニ追進シ、

神明ニ誓ツテ　　天皇陛下ノ　　大御心ニ副ヒ　奉ランコトヲ期ス

⑩食前作業

食前の奉仕作業（羊草刈り・蔬菜手入れ・道路修理など）に関する写真と現地訓練の日課が記載されている。

史料⑨日課（現地訓練）（なお、原文は漢数字だが、アラビア数字に改めて引用する）

A　5.00　起床洗面　5.30　礼拝、食前作業　7.00　朝食　8.00　作業始　11.30　作業終

P　12.00　昼食　2.00　作業始　6.00　作業終　6.30　夕食　9.00　点呼、消灯、就寝

⑪吃飯了(チファンラマ)広メシ完了(ワンラ)

楽しみの一つである食事や、食料調達の様子に関する写真が掲載される。

⑫奉仕作業

日中の主な奉仕作業や四国村開拓団の記念日などに関する写真や奉仕隊日誌から抜粋された記事が掲載されている。そのほか、奉仕隊隊員の感想なども掲載されている。

史料⑩奉仕隊日誌抄（なお、原文は漢数字だが、アラビア数字に改めて引用する）

6月19日（水）現地入植、四国村現地訓練所、入団式、后打合

20日（木）四国村本部諸施設見学、県運動界出場者予選会

21日（金）綏棱県運動会に出場し角力、マラソンに優勝す。夜祝賀会

22日（土）燕麦除草、蔬菜手入等始まる（6月29日迄）

23日（日）隊長医療班出迎のため宋(宗)特設農場に出張す。

25日（火）小学校経営農場へ奉仕

26日（水）医療班（H隊医、A準教医附）来る。午后教練

27日（木）夜間土壁を越し侵入せんとする怪しきもの発見し発砲撃退す

28日（金）馬受取のため興農鎮に出張（Y・K・I）

30日（日）馬受取者帰る。公休日

7月1日（月）蕎麦畑整地始まる（7日まで）

3日（水）H団長講演

4日（木）小学校生徒身体検査施行のため医療班出張す。

5日（金）第4回入植記念日　休日　雨天のため式典参加せず

7日（日）支那事変勃発記念日

8日（月）含内大消毒実施、Y病気のため学医Nと共にハルピンに出張

9日（火）蕎麦蒔始まる　市内見学23.00ハルピン発

10日（水）K先生内地へ帰る　9.30北安着、省公所にて打合せ、29.00ニ龍山着

11日（木）宗特設農場班（香川・高知・徳島小隊）見学に来る。食后赤い夕陽を拝す。

N氏と■特設農場見学

12 日（金）蕎麦蒔完了す。6.00 起床　昼寝す　13 日ニ龍山発　出張所一泊
14 日（日）中央実践本部より慰問隊 3 名来る。夜講話
15 日（月）公休日、黒馬劉満人部落見学
16 日（火）医療奉仕隊（新潟医大生）10 名来る。
19 日（金）中央実践本部 T 講演　A 医附帰る。
20 日（土）慰労会開催
21 日（日）H 隊医帰る
22 日（月）座談会開催（団長来所）
23 日（火）獣医隊（麻布）3 名宿泊（8 月 4 日迄）
27 日（土）休日
29 日（月）朝食后直ちに部落奉仕に出発（29.30.31）
31 日（水）部落奉仕終了　夕刻帰舎　「寿区南方に匪賊百余騎潜入せり」との情報入る
8 月 1 日（木）公休日
2 日（金）A 君応召なり正午出発　Y、苦力見送りのため興農鎮へ。点呼準備、小学校奉仕作業始まる（7 日迄）
5 日（月）獣医隊帰還
7 日（水）隊長小隊長会議出席のため新京へ出張
8 日（木）簡閲点呼見学
9 日（金）小隊長会議（新京中央実践本部会議室にて）
10 日（土）燕麦刈取始む、饅頭を作り内地の七夕を偲ぶ
13 日（火）鮮人部落へ米受取りに、
15 日（木）慰問袋受取のため Y 君　海倫に出張、
16 日（金）慰問袋来る、H 隊附県公署へ出張（旅費、視察、その他）
18 日（日）旧盆の為休業
21 日（水）予土阿村見学、五島林子部落（徳島出身者）にて宿泊す
23 日（金）種痘、奉仕隊用品返納準備、
24 日（土）先遣隊 4 名出発
25 日（日）25、6 両日帰還準備
27 日（火）現地発　帰還の途につく。

史料⑪奉仕隊員の感想など

隊員　H

祖国の山河決然と　勇み進むだ若人よ　勤労奉仕の大任を　共に果たすは何時の日ぞ
試練の嵐何のその　潮に燃ゆる若人よ　尊き使命この身には　阿州の健児意気高し
黒土は燃えて春は来る　凍る沃土も溶けて行く　五尺吾等がこの胸に　開拓の意気今高し
畑は高粱燕麦大豆　田には黄金の波が打つ　内地の友や親達に　一目見せたいこの稔り。

6 月 24 日（月）晴

朝夕は相当に冷えるが日中の温度は次第に上りお天気も毎日続き時々気持ちよい夕立も降って燕麦は驚く程すく〳〵と伸びて行った。然し間もなく我々は雑草と戦はねばならなかった。背丈以上も伸びると云ふ蓬、低いが根強いあざみやたんぽゝ、径八寸もあらうと思はれるおほばこなどその他名も知れぬ無数の雑草が畦にも溝にも空地にもどん〳〵と伸びて行く。その生長の早いのは逞しいと云はうかすざましいと云はうか実に驚嘆の他はない。一寸油断すればすぐ作物が圧倒されさうになる。

この頃の作業は来る日も〳〵雑草と戦ふことだ。

馬耕日　隊員　M

今日は燕麦蒔畠にリーヂヤンを通すのだ。馬二頭隊員二人と畠に行く。七町歩と云ふから仲々(ママ)広い。往復三十分もかゝる。馬が途中で止まって思ふやうに動かない。手に汗を握り、追ひ立てゝも〳〵どうしても動かない。人間が馬に使はれてゐるやうだ。仕方なく苦力を呼んで来る。多年馬に馴れてゐるから非常に上手だ。苦力が来てから馬も動くし昼食まで能率を上げる。午后になって愈々暑くなる。暑さはジリ〳〵と肌をさし顔は泥だらけだ。素足に雑草や高粱のからが立つて痛い。苦力には「馬鹿野郎」と叱られるしもう無(ママ)中で働く。予定の分が終る頃「少々マン〳〵デー」苦力が云ふ。少し休む。故郷より第一信、妹より懐い便りだ。雑草の中で読む。「兄さん一生懸命で奉仕してください。」「あゝ嬉しい。よしやるぞ！」予定の作業も早く終わって明日の分までやる。

七月六日（土）　晴

大陸“稔りの秋”へ驀ら

酷暑は去った。大陸の沃土はいま稔りの秋へまっしぐら、南満に北満に鍬音高く農夫は最后の仕上げに大童の活動を続けてゐる。一雨二億円の慈雨に恵まれて農作物増産十ヶ年計画第一年度を幸先よく踏み出した興農満洲は早くも第一回の収穫期を迎へるのだ。今年度の農作物の出来は？収穫量は？　以下は晴れに曇りにまた雨に一喜一憂の農民にもたくされた　興農部調査課発表の収穫予想、　沃土からの中間報告！

▷北満地方

各作物とも平年作より一割増の見込み、播種期に稍降水量不足を見て気遣はれてゐたがその后適雨と適温に見舞はれ良好なる生育を辿りつゝあり。病虫の被害もさしたることなし。

植林計画に協力

団長さんのお話では「本団の植林については相当急速に行ふ必要あり、燃料用材、防風境界林を設置し更に美林地区をも設定し将来に具える」ため次の様な植林計画を立てゝゐる。

一、閣山ニ百五十町歩に神社林　共有林六十万本植林、一、中央団有地を共有野山として植林、一、区境界線に沿ひ四十万本植栽、一、弩敏河沿線及北西境界線の折條山林地帯を共有地として管理し更に二十万本植林。

吾々奉仕隊も団の植林計画に協力し「ドロノキ」の苗床の手入や宿舎付近には植林しておかう。何時の日か吾々が再び本団を訪れる機会を得ば閣山の神社林に共有地の美林に眼をみはり　今日の植林の事を懐しく思ひ起こすことだらう。
“七月二十八日（曇后雨)”

八月二日（金）曇
半月ばかりも前まで青々と伸び切った作物の中に満人の群があちこちと器用に鋤頭を使ってゐるのが見受けられたがこの頃は畑には殆ど人影が見ない。燕麦が少し色づき始めた。隣の包米も湿地の向ふの稲も穂を出し始めた。「今年は豊年だ」と百姓は皆喜んでゐる。収穫時までの一時を天候に恵まれんことを祈りながら静かに休息してゐる事だらう！
燕麦刈取まで一週間ばかりの暇を得て今日から小学校運動場整理を四国村附近開拓団の点呼準備に奉仕することになつた。

八月十日（土）快晴
訓練所のコスモスが初秋の風に身をまかせて心持よく揺れてゐる。終わりが近づいた夏休みの最后を楽しむかのやうに村の子供等が背丈以上も伸びたよもぎの野道を声ばかり走つて行く。今日から燕麦の刈取が始まる。
左手で穂を抱くやうにして后へ刈り集めて行くのは内地と違つて面白い。刈取つて行くもの、束ねて行くもの　積み上げて行くもの　お互に追ひ立てられながらどん〳〵進んで行くので汗を拭ふ間も痛む腰を伸ばす暇もない。一時間毎の休憩が待ち遠しい。振り返ると積み上げられた麦の小山が整然と幾列も〳〵丘陵の空と接する処まですつと続いて処々に刈り残された　よもぎがくつきりと大空に浮んでゐる。五時半予定終了。この分ではお盆までに終り相だ。

⑬運動
作業後や休日に隊員が運動に興じる様子を撮影した写真などが掲載される。馬術や、剣道・相撲などがなされたようである。「楽しい休日に　運動・娯楽一様(イーヤン)」。
⑭綏稜県運動大会
6 月 21 日に開催された運動会に関する内容である。今回は皇紀 2600 年を祝うものであるが、第 9 次としているため、毎年開催されていたことがわかる。奉仕隊からも出場者があり、マラソンと相撲において優勝者を輩出している。
⑮警備
殺人や略奪などをする盗賊である匪賊の襲来に備えて四国村開拓団員は村の警備に従事しており、奉仕隊も協力していた。銃を持ち警備につく様子の写真やその感想が掲載されている。なお、この警備は杞憂ではなく、実際の被害も報告されている。例えば、「八月十八日夕刻団員二名弩敏河渡河中匪襲され一名行方不明との急報に接す。直ちに捜査隊編成団に協力現地に出発す。数日にしてやうやく死体下流より発見さる。」との記述があり、襲撃を受け行方不明とな

った団員の捜索に、奉仕隊が協力していたことも判明する。

史料⑫警備に関する奉仕隊の感想

警備　　隊員　M

最初警備に立つた時は云ふまでもない。高鳴る胸を鎮めて「匪賊よ来ないでくれ」と神に祈るのみだつた。だが回数を重ねるにつれて度胸も出来　面白味さへ感ずるやうになつた。或晩昼より降り出した雨は夜に入つても止みさうもなく　柳條を吹き倒さんばかりの強風さへ加つてトタン屋根はガタ〳〵と音を立て馬繋場では馬の足音が終夜続いて無気味な夜だつた。

この日、本部へは「〇〇部落が匪賊の襲撃を受けたり。警戒を厳にせよ」との情報あり　警備は四名増員された。此の夜は一寸先も見えない闇夜である。「四十名の命は吾々が護るのだ匪賊よ来らば来れ」と度胸をすえ　手にぎつしり銃を握りしめ土壁にぴたりと身をくつつけて頑張った。

夜は次第に更けて行った。時々草を分けて人のけはいがする。土壁の外からソツと頭を出す様な影が見える。　何事も起らない。　眼の錯覚であらう、耳のせいであらう。雨はしきりに降り風はいよ〳〵強い。雨は防水衣の中まで滲み通り　寒さがひし〳〵と迫って来る。ふと皇軍将兵の苦労を思ひ浮べた。

やがて雨は小止みになったが黒雲が物凄く東へ飛ぶ。

“楽土の集ひ”より三篇

匪襲　A・B 生（※原文のママ）

床についてしばらく無駄話をしてゐると「銃声がする、静かにしてくれ」叫びながら歩哨が走り去った。突如五六発の銃声、無気味な弾のうなり。S 先生報告の声と共に歩哨の銃から火を吐く。

「背を低くして武装せよ」班長の声に素早く身仕度をして次の号令を待つ。極度に緊張した皆の声は興奮にうはづつてゐる。班から二名警備が増員され自分も加つた。闇の中で班長から銃を受け取つて舎外にとび出した。豆を炒るやうな小銃の音と共にヒユンと異様な音を立てゝ弾がとんでくる。しばらく振ひが止まらない。

銃眼に位置を占め固く銃を握りしめ引き金に指をかけてじつと闇を睨む。黒いものがジリ〳〵と土壁の方へよつて来る。グツト引鉄に手がかゝつた。

轟然一発！

銃から火を吐いたが手応へがない。隊長の巡視の足音がかすかに聞えるだけである。

夜の歩哨　　隊員　H

七時半交替だ。銃と実弾三十発握つて思はず緊張するのを覚える。小興安嶺の連峯が微かに見える。黄昏時、地平の彼方に雲が湧き　やがて大陸特有の豪快な雲となり~~国境を越えて~~北へ飛ぶ。国境を越へて北の空へ‼　向ふの満人部落の低い屋根からは二條、三條煙が登り大

気は静かに夕暗と変り無気味な気が立ちこめる。

陽がとつぷり暮れるのは正に十時、消燈后シンとして物音一つせぬ中を鴨が二三羽風を切つて湿地の方に飛んで行くのも淋しい。まだ地平線が見分けのつく位であるが星が直ぐ頭上に煌いて無数の銀砂を振り播いた様だ。十一時を過ぎると一面の暗夜だ。これから二時迄は寸分の油断もならぬ。地球の動くのさへ分るかと思ふ静寂の中に聞えるは何処で鳴くか虫の声、馬の嘶き、犬の遠吠に耳と目に全神経を集める。直ぐ近くの草のすれ合ふ音に思はず銃の引金に手がかゝる。併し庭の真中に聳え立つ日章旗のはためきを聞く時　征服の血か‼　大和魂か‼　何かしら体内に潜んでゐた血しほが全身にたぎる緊張を覚える。　匪賊よ来るなら来い‼

直ぐ前の高粱畑でカサツと音がした。オヤツと息を殺して緊張する。もとの静けさに帰り何も起らない。暫くすると興安嶺の上に月が出た。肌をさす夜風がサツと通り過ぎると　遠くで水の流れる音がかすかに聞える。静寂の中にカチ〳〵と進む時計の遅さよ……。併し大陸の朝は早い。二時ともなれば早や朝らしく三時には東は白くもう重苦しい夜気は去つて匪賊の心配は更にない。　清明の朝の空気は漲る。起床の鐘が鳴り朋友は雄叫びに溌剌として朝の行事が始まる。

「交替に参りました」「ご苦労さん　立哨中異常ありません」……。

⑯先遣隊の活躍

奉仕隊本体に先立ち先遣隊が現地に先に入って本隊が現地入りするための事前準備に従事していた。

史料⑬“先遣隊の旅程と行事”（なお、原文は漢数字だが、アラビア数字に改めて引用する）

5 月 22 日（火）徳島発（A.10.57）護国神社参拝

23 日（水）東京着（A.6.30）宮城遙拝、靖国神社参拝、上野発（10.40）赤塚着（1.00）
入所（P.3.00）

24 日（木）河和田第１日　本隊入所準備

26 日（土）出発式（A.2.00）K 先生訓示、東京発（P.10.00）

27 日（日）敦賀出帆（気比丸）にて（P.4.30）

29 日（火）清津上陸（A.5.30）市内見学

30 日（水）羅南見学

31 日（木）清津発（6.30）満洲第一歩

6 月 1 日（金）新京入り（A.7.00）歓迎式　新京神社参拝、参議府ニテ壮行会、新京発（P.3.20）
ハルビン着（P.9.00 ）

2 日（土）克音河着（A4.30）現地着（P.1.00）

5 日―18 日　本隊入植準備
宿舎の準備、壁の修理、風呂場の修理及風呂釜据付、飯釜据付、便所構築其の他、警備、

史料⑭嬉しかったこと　隊附　H（⑰の見出しがある 32 頁に記載されるが内容は⑯のものであるため、ここに掲げる）

先遣隊一行五名目的地不案内になんだか不安なやうな心をハルビン駅食堂に少時落付けやうと席を求む折から我等の奉仕地黒馬劉開拓団の K 校長先生、運輸部の K さんに偶然会ふ。あゝよかつた　神の引合はせか、　小躍りして喜んだ。四国村迄の道順　道程　団の内容等時を忘れて耳を傾けた。旅先にて自分の目的を知つて親切な教を受ける程嬉しいものはない。

四国開拓団の興農鎮出張所、何のためにこんな出張所が必要か　不思議に思ひ乍ら門をくゞると　こゝの主任さんは板野郡松島村出身の Y 君　お隣り村と聞くだけに嬉しいのに、とても親切な方、町の案内から記念写真までいろいろの心尽しの嬉しさ　忘れることの出来ない深い印象だ。其の后度々興農鎮に出る度に出張所の必要性と便利さは自ら了解出来た。

⑰仲よし苦力

苦力（クーリー）とはもともとは、「外国人が、重労働に従事する中国やインドの下層労働者を指してよんだことば。」（『日本国語大辞典』小学館）である。それが日本では、日露戦争後に南満洲鉄道の支配に着手し始めたころより、開発に従事する「中国人の未熟練労働者」指す言葉となったようである（『世界大百科事典』平凡社）。

奉仕隊の活動を苦力のＴが手伝っていたようで、彼に関する感謝の記述もある。このように現地満州人とも奉仕隊が交流を持っていたことがわかる。

史料⑮仲よし苦力　T

去る端午の節句の日 K 先生の御案内で先遣隊一同訓練所の「儞や」の家で御馳走になる。オンドルがアンペらを通してぽかゝと温い。丸テーブルの上に古式な茶碗箸等が並べられる。ヂョーザ、チータン、パイ酒　猪肉など油濃い御馳走が次から次へと運ばれて遠慮すると「不行々々」「我的看々」と模範を示して心から馳走をすゝめる。遺憾なのは自分の満語のわからないことだ「没法子」だ「天好々々」が堰の山、心から待遇してくれる你や「T」に感謝せずには居られない。

⑱来了‼　慰問袋・Ａ君応召

日本から奉仕隊へ宛てられた慰問袋をはじめとして、奉仕隊の楽しみに関する記述がある。また、奉仕隊の隊員であるＡには軍隊への臨時召集がかかり、本土へと送り出されている。

史料⑯・嬉しいもの・

○あゝ‼慰問袋だ　ドロツプに金平糖に塩昆布……。まだゝある〳〵ハンカチに石鹸……。
その底に慰問文……　開いて喜ぶその顔と顔、一寸カメラに収めたい。

○もう三十分したら飯だ……頑張れ……味噌汁が白い湯気を立てゝ待ってゐる。おゝ！
御魂鎮め……　綱領……　待ち遠ほしいやら、嬉しいやら…

○今大車帰ったか？　僕の手紙あるか　小包は？　ない　あゝああ‼　あった〽　何と懐しいこと　嬉しいこと　作業始めの鈴も聞えたり聞えなかったり。
○明日は休みだ　夜が寝られん。そんなことはないだらう？
“楽土の集ひ”より

史料⑰A 君応召に関する記述
先遣隊員として六月二日現地入植以来益々元気にて奉仕作業に従事し第三班々長として活躍中八月二日臨時召集の栄に浴し一路懐しの故国へ…。送別式后訓練所前にて送る。馬上固る決意を眉宇に漲らせて去って行く A 君の御奮闘を心から祈ると共に吾等も又一層奉仕作業に精励せんことを誓ふ。　八月二日（金）曇
“五日午前十時無事徳島着、八日午前八時善通寺騎兵隊に入隊”

⑲楽土の集ひ
奉仕隊の余暇の様子などの写真が収められる。

⑳予土阿村に遊ぶ
昭和 14 年集団第７次北安省綏稜県東黒馬劉予土阿村開拓団[6)]に見学へ行った際の写真があげられている。予土阿村開拓団は高知・徳島・愛媛からの参加者 304 名が北安省綏稜県四海店に入植している。奉仕隊は徳島県出身者のいる五島林子徳島部落（写真７）に滞在している。

写真７　五島林子部落

㉑村の子
四国村開拓団で誕生した赤ちゃんの写真や出生率に関する団長の分析や、それに対する奉仕隊の感想が掲げられる。

史料⑱どの部落にも小孩多々的
「厳寒時の家族招致、気候風土に不馴れ、若夫婦が多く分娩育児の知識の少いこと、労力不足のため農繁期の激労などのため　初めは乳幼児の死亡率が相当高かったが数年后の今日では“生めよ増せよ”全く文字通り二百六十戸中八十人　増加率三十パーセント以上。本建築を終つたばかりの小学校々舎も数年にして狭隘を感ずる」とは団長さんの嬉しい御心配。
成程どの部落を訪問しても同じ年頃の可愛い小孩多々的！これ等の坊やん嬢ちゃんが大きくなった暁に真に理想農村が完成され民族協和、道義国家建設が達成されることだらう。

㉒興農鎮に拾ふ
四国村開拓団の出張所が置かれた興農鎮において見学をした際の写真や感想が掲げられる。

史料⑲興農鎮における感想など
馬車・洋車

満洲に来て先づ眼につくものゝ一つに「馬車」と「洋車」がある。“花の馬車でわられてる……”レコードの文句や通一片の風物詩のテーマには誠に恰好のものであらうが、一度国都新京やハルビンの玄関に下り立った時附近の建物が堂々としてゐるだけに　その不潔さはとても詩や唄どころではなく、都市の美観を損ふものとして眉をひそめざるを得ない。

然し長年満洲に住み馴れた者に取っては之程安直便利な大交通機関はないそうであり又吾々も不案内な土地で行先さへ示せば間違いなく運んでくれる便利さは感謝するが他所者と見ればつけ込んで不当の料金を要求する「雲助ニーヤ」が少くない。此方が強気に出てその場で腕力を発揮すれば逃げるが、少し甘くみられた者は日満鮮の区別なしに彼等は執拗に要求する。その駈引のエゲツなさは凡そ詩や唄とは程遠い存在である。

馬車や洋車はも少し綺麗にし賃金も何とか安心して乗れるやうに出来ないものだらうか。街頭の明朗化の為にも…。

興農鎮　隊附　S

内地から満洲の大都市ばかり眺めて来た吾々は綏稜県第一の市街興農鎮も内地の一部落位にしか見えなかった。それでも大陸独特の城壁だけは立派に造られて街路も可成り広くゆったりとした街だ。四国村出張所で休憩の余暇に市内見学に出かけた。土の煉瓦を練り上げて作つた低い家が軒を並べてゐる。どれも入口が非常に狭いのは防寒のためだらう。煙草・日用品　食料品　金物等多くの露店が続いてゐる。~~店~~放飼の豚が三々五々打連れて食飼をあさつてゐる。店舗に入つて見ると外見程みつともない家でないのに気が付く。品物も相当豊富に置いてあるし内地より物資は何かにつけ豊富らしい。

街のあちこちに日満国旗が飾られてゐるのは吾々を歓迎するためださうだ。吾々はこゝまで来て始めて満洲に来たと云ふ感を深くした。小学校もほんの形ばかりのものであるが文字の国に文盲の多い満洲の夢だから設備などお話にならない。これでも新興満洲の時代を背負つて立つ小国民の修練道場だ。児童の年令も色々様々女子は極少数教育力の滲透を速(ママ)進し一日も早く文化の程度を高め王道楽土を味は(ママ)し たい気がする。

六月十九日（水）晴

㉓ハルピンの思出

ハルピンの写真や絵ハガキが貼られる。

㉔

作成途中の箇所か。７名が写った集合写真１枚が貼付されるのみであるが、詳細は不明である。また、49 頁には昭和 15 年度の満州建設勤労奉仕隊手帳が貼付される。

㉕帰還

日本へ帰国するまでの旅程や記念写真や見学地の写真が掲載される。

史料⑳帰還日程と見学（なお、原文は漢数字だが、アラビア数字に改めて引用する）

8 月 25 日（日）25、6 日帰還準備

27 日（火）現地発（14.00）興農鎮出張所にて宿泊
28 日（水）克音河発（4.30）黒河着（18.15）日満クラブにて一泊
29 日（木）黒河見学
30 日（金）黒河発（8.00）克音河着（23.00）出張所にて一泊
31 日（土）綏稜県主催感謝式（午后 4.00）
9 月 1 日（日）克音河発（11.25）哈爾浜（16.30 着、23.40 発）市内見学
2 日（月）新京（7.54 着 22.05 発）市内見学及感謝式　先遣隊 4 名 6.18 着　本体に合流
3 日（火）羅新着（15.30）満蒙会館に宿泊
4 日（水）羅新出帆（17.00）サイベリヤ丸
6 日（金）新潟着（7.00）県属出迎を受く。満拓会館にて休憩市内見学、新潟発（23.05）
7 日（土）大阪（4.20 着、9.40 発）Ｎ回生病院に入院、Ｓ附添
8 日（日）徳島着（6.10）駅前にて帰還報告、護国神社参拝、県庁にて朝食后解散式

㉖建設満洲給国明信片
「新京大同大街」「国務院・新京」「放牧」「新京飛行場」「特急アジア」「鞍山昭和製鋼所」「哈爾浜の寺院」「阜新炭鉱露天堀」「国民学校」「沃野を拓く」「お正月の仕度」「北満の採金船」「新京忠霊塔」「奉天城内」「熱河喇嘛廟・承徳」の写真と説明文。
㉗高脚踊り
高脚踊りは中国の伝統舞踊であり、それを見学した際のものとみられる写真が貼付される。
㉘記念写真をはなむけとして
中国人風の女性の写真とともに、帰国後に書かれたとみられる文章が掲載される。

史料㉑“記念写真をはなむけとして”
記念写真を御送りする。誠に下手な写真ではあるがこの一葉々々を通して出て来る思ひ出の数々こそ誠になつかしいものだらう。静かに過去三ヶ月の生活を振り返って見ると内地訓練に奉仕作業に或は各地見学に思ひ出の数々が苦しかったことも楽しかった事も今は唯なつかしく夢の様に追想されるのみである。
されど今吾々は甘い感傷にふけってゐる時でない。
吾々の双肩には満洲に於ける尊い体験を基礎とし郷土民に呼びかけ誤りなき大陸の認識を伝へ開拓政策の促進を図り国策の先駆者として東亜永遠の平和確立のため活躍すべき重大なる任務がかゝつてゐるのだ。三ヶ月の勤労奉仕は終つた。経済的にも精神的にも大きな成果を収めて。然し真の活躍はこれからだ。
御送りした写真が楔ともなり永遠に我等を結びつけ共に手を取ってこの重大任務に向って協力するを得ば誠に幸いこれに過ぎるものはない。
昭和十五年九月　　吉野河畔にて

㉙ハルピン観光・タバコ包紙

パンフレット「はるぴん観光」や「新京御案内」という地図や、満洲製たばこのラベルなどともに、「四国開拓団地区現形図」（写真８）が貼付されている。

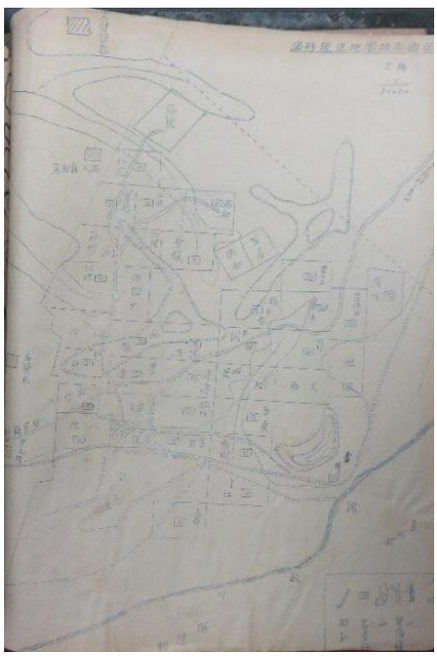


写真８「四国開拓団地区現形図」

おわりに

本稿では、奉仕隊徳島県隊で作成された「アルバム」の概略を紹介した。一方で、内容に踏み込んだ考察は出来なかった。ところで、満洲移民に関する研究蓄積を紐解くと「昭和七年の満州建国から昭和十四年頃までを移民送出の黎明期とすれば、昭和十五年以降県を挙げて強力に推進した分村、分郷運動の期間は、大量移民送出計画の本格化した最盛期」[7]という評価がなされている。そのため、全国的にみても、この「最盛期」を対象とした研究の蓄積が厚いといえよう[8]。他方で、黎明期は混成移民が基本であったとみてよい。「アルバム」で紹介される昭和 12 年第集団 6 次黒馬劉四国村開拓団、同 14 年第 7 次東黒馬劉予土阿村開拓団がまさに満洲移民の黎明期に該当しようが、この時期の研究はまだまだ解明の余地が多分にある。ゆえに、本稿の成果を用いつつ、黎明期にあたる満州移民の生活実態を論究することを今後の課題としてひとまず擱筆したい。

註

[1] 細谷亨 2019『日本帝国の膨張・崩壊と満蒙開拓団』有志舎。

[2] 高知県出身引揚者の回想では、高知「新京会」編 2007『遥かなる満州』（高知「新京会」）や、満州の歴史を語り継ぐ高知の会編 2020『第 1 回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集』などの成果を得ている。

[3] 白取道博 2000「「満州建設勤労奉仕隊」に関する基礎的考察」『北海道大学教育学部研究紀要』80 号。

[4] 秋山郁子 2006「満州建設勤労奉仕隊−愛知県からの参加者の事例報告−」『季刊　中国』86 号。

[5] 三宮徳三郎編 1970『高知県満州開拓史』土佐新聞社出版部。

[6] 前掲三宮 1970。

[7] 前掲三宮 1970。

[8] 前掲細谷 2019。

本記録集は、2020 年度高知放送エヌ・ピー・オー高齢者支援基金事業「満洲の歴史を語り継ぐ活動」を活用して発行しました。

第２回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集・2020 年度活動報告集

＝＝

編集　　満洲の歴史を語り継ぐ高知の会
（編集責任者：大野正夫（会長）、編集担当：楠瀬慶太（事務局長））

発行者　　満洲の歴史を語り継ぐ高知の会（高知県土佐市宇佐町井尻２６２－１）
e-mail: kusukei31@yahoo.co.jp

発行日　　２０２１年1月１０日

印刷　　西岡総合印刷株式会社
〒640-8324　和歌山市吹屋町 5 丁目 54

＝＝